秋田県文化財調査報告書 第343集
払田柵跡調査事務所年報2001

払田柵跡

第119・120次調査概要

2002年3月

秋田県教育委員会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

ほったのさくあと

払田柵跡

第119・120次調査概要

2002年３月

秋田県教育委員会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

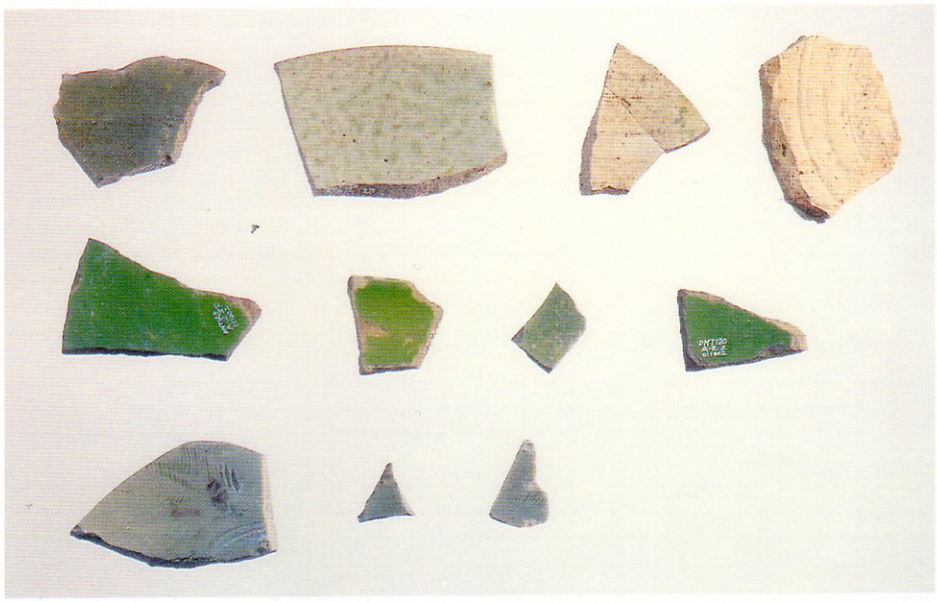
長森丘陵全景

平成13年８月８日撮影

上：西方上空より鳥瞰する
長森丘陵が北に開く弧状・弓形を呈する独立丘であることがわかる、右手前の林が真山
長森奥の水田面（茶～黒色部）が本年度調査された千畑町厨川谷地遺跡となる

下：北方上空より望む
第119次調査区は右端、丘陵西側の北向き緩斜面部にあたる

（２枚:秋田県埋蔵文化財センター提供）



上：青磁・灰釉陶器・緑釉陶器（上２段、第120次、第32図）
青磁（下段、第119次、第26図）

中：同上の内面

下：緑釉陶器手付瓶（第119次、第22図）

青磁・灰釉陶器・緑釉陶器

序

国指定史跡払田柵跡は、管理団体である仙北町による環境整備も順調に進捗し、遺跡を訪れる方々も年とともに増加していることは喜びに堪えないところであります。

平成13年度の調査は、第６次５年計画の３年度にあたり、政庁域西側の長森丘陵部を精査しました。第119次調査区は、外郭西門北東部地域に、第120次調査区は、政庁域外の北西側隣接地にそれぞれあたります。

第119次調査では、丘陵北側緩斜面部に複数の段状地形が人為形成されていることを確認し、ここには鍛冶関係の炉・竪穴遺構等が構築されることが判明しました。また段状地形改変に伴う整地層からは、「出羽」と刻字された須恵器や緑釉陶器も見つかっております。

第120次調査では、昨年度確認していた南北棟の掘立柱建物跡北側の様相を探ることを主目的としてトレンチを設定しました。その結果、建物の北側には板塀により画された空間が道路であったと推測され、これは政庁から外郭西門に至る東西道路の一部であった可能性が高まりました。

本書は以上のような今年度の調査成果を収録したもので、古代城柵官衙遺跡の研究上、資するところが大きいと考えますので、ご活用いただければ幸いと存じます。

最後に、調査ならびに本書作成にあたって御指導・御助言を賜りました、文化庁、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史博物館、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所に心から感謝申し上げるとともに、史跡管理団体である仙北町、同教育委員会、千畑町教育委員会の御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成14年３月

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

所　長　　芳　賀　　誠

例　言

1　本書は秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が平成13年度に実施した、払田柵跡第119次調査・第120次調査、調査成果の普及と関連活動の成果を収録したものである。

2　発掘調査及び本年報作成にあたり、当事務所の顧問である秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名誉教授・東北歴史博物館館長岡田茂弘氏から御指導いただいた。また次の方々より御教示を得た。記して謝意を表する。　（順不同・敬称略）

熊田亮介（秋田大学教育文化学部）　井上喜久男（愛知県立陶磁資料館）　穴澤義功（たたら研究会）　山口博之・高桑弘美（山形県埋蔵文化財センター）　八重樫忠郎（岩手県平泉町教育委員会）　山本信夫（山本考古研究所）　三上喜孝（山形県立米沢女子短期大学）

北野博司・村木志伸（東北芸術工科大学歴史遺産学科）　小西秀典（仙北町教育委員会）

王　琦（甘粛省博物館歴史部）　魏文斌（甘粛省文物考古研究所）

3　第５章は愛知県立陶磁資料館・井上喜久男氏に寄稿いただいた報告を収録したものである。

4　遺構等の実測図は国土調査法第Ｘ座標系を基準に作成した。実測図・地形図中の方位は座標系を示し、磁北はこれよりＮ７° 30′ 00″ Ｗであり、真北はＮ０° 10′ 58″ Ｅである。詳細は払田柵跡調査事務所年報1977『払田柵跡－第11・12次発掘調査概要－』（1978年）を参照いただきたい。

5　本書の作成・編集は当事務所学芸主事高橋　学が行った。

凡　例

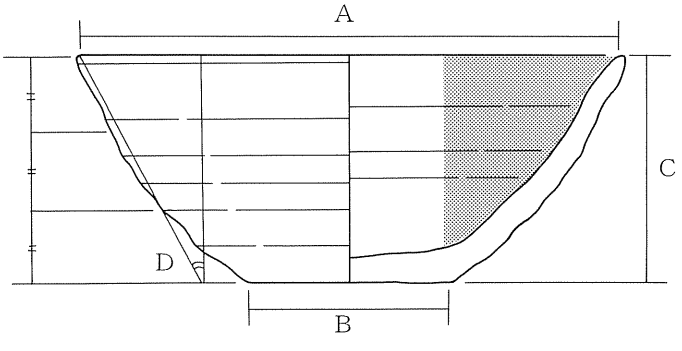
1　土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖　1997年版』を参考にした。

2　本文中における遺物の個体数表記については、坏類では底部が１／２以上残存する個数を数えたものを示す。

3　遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＢ　掘立柱建物跡	ＳＩ　竪穴住居跡	ＳＫＩ　竪穴状遺構
ＳＫ　土坑	ＳＡ　板塀跡	ＳＤ　空堀・溝跡
ＳＦ　土塁	ＳＮ　焼土遺構	ＳＸ　鍛冶炉

4　坏形土器の計測基準は下図のとおりである。



Ａ：口径　　Ｂ：底径

Ｃ：器高　　Ｄ：外傾度

底径指数：$\frac{B}{A}$　　高径指数：$\frac{C}{A}\times 100$

黒色処理

払田柵跡調査事務所年報2001

目　次

巻頭図版

序

例言・凡例

第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　調査計画と実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第３章　第119次調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　第１節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　第２節　検出遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

　第３節　小　結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

第４章　第120次調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

　第１節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

　第２節　検出遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

　第３節　小　結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

第５章　払田柵跡第119・120次出土の施釉陶器・・・・・・・・・・60

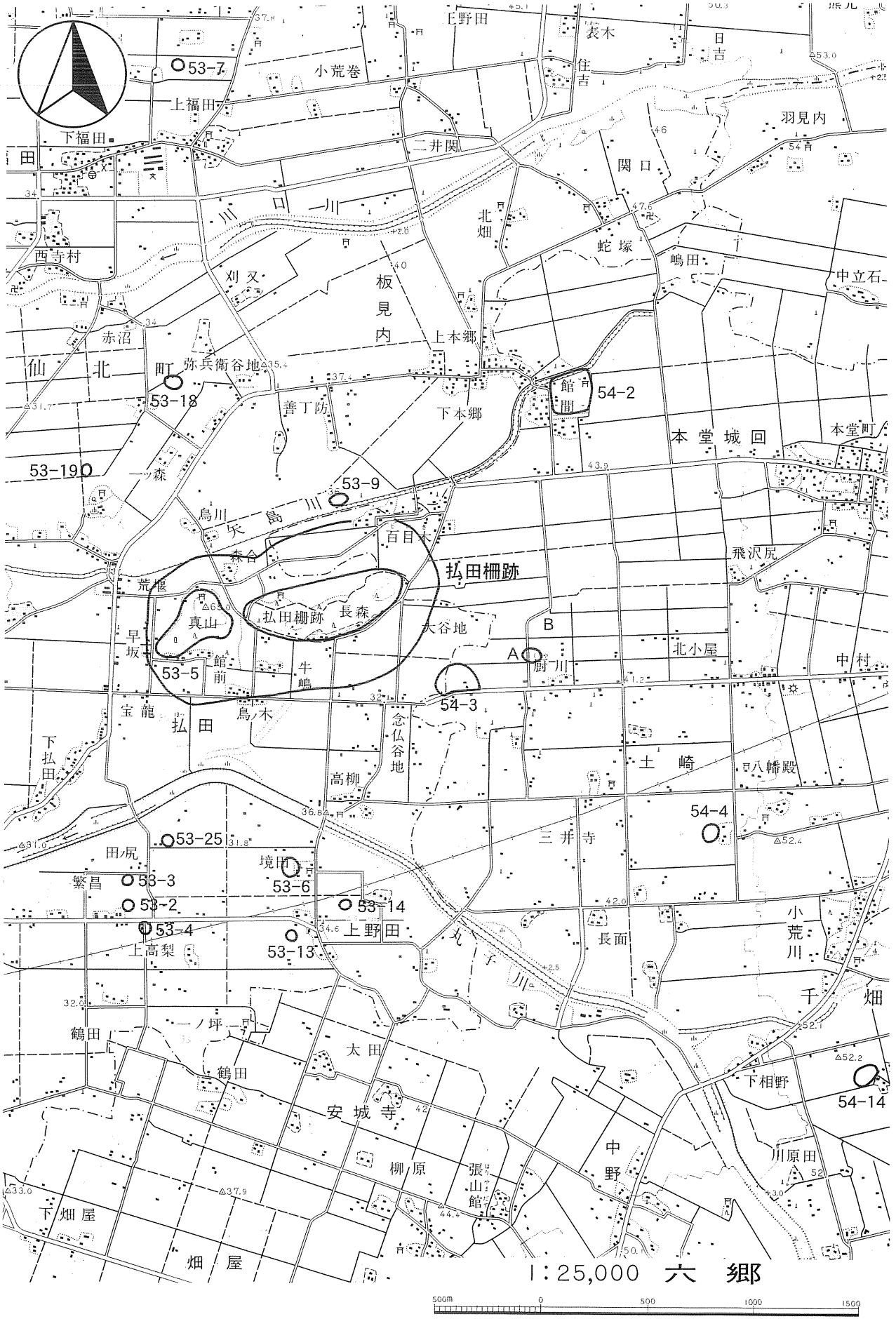
第６章　調査成果の普及と関連活動・・・・・・・・・・・・・・・・63

報告書抄録

付図　長森丘陵西部の地形と第119・120次調査区配置

◯挿図目次◯

第１図　払田柵跡と周辺の古代・中世の遺跡
第２図　払田柵跡調査実施位置図
第３図　Ｈ１・Ｉ１・Ｊ１トレンチ遺構配置図
第４図　Ｈ２・Ｉ２・Ｊ２トレンチ遺構配置図と土層図
第５図　ＳＫＩ1321竪穴状遺構と周辺の遺構
第６図　ＳＫＩ1321竪穴状遺構土層断面図
第７図　ＳＫＩ1321竪穴状遺構出土遺物
第８図　Ｈ１トレンチ北側の遺構配置図
第９図　ＳＫ1333土坑出土遺物
第10図　ＳＤ1319ａ空堀跡と出土遺物
第11図　ＳＫＩ1330竪穴状遺構と周辺の遺構
第12図　ＳＫＩ1330竪穴状遺構土層断面図
第13図　ＳＫＩ1330竪穴状遺構、ＳＫ1332土坑出土遺物
第14図　Ｉ１トレンチ北側の遺構配置図
第15図　ＳＫ1326・1327・1329土坑、ＳＤ1328溝跡、ＳＮ1322焼土遺構
第16図　Ｉ２トレンチの遺構配置図　ＳＤ1319ｂ空堀跡、ＳＫ1332土坑
第17図　Ｊ１トレンチ北側の遺構配置図
第18図　ＳＫ1325出土遺物
第19図　ＳＫ1335・1336・1339土坑、ＳＤ1338・1355・1356溝跡
第20図　整地層出土遺物（１）　Ｈ２トレンチ（１）
第21図　整地層出土遺物（２）　Ｈ２トレンチ（２）
第22図　整地層出土遺物（３）　Ｈ２トレンチ（３）
第23図　整地層出土遺物（４）　Ｉ２トレンチ（１）
第24図　整地層出土遺物（５）　Ｉ２トレンチ（２）
第25図　遺構外出土遺物（１）　Ｉトレンチ
第26図　遺構外出土遺物（２）　Ｊ～Ｌトレンチ
第27図　段状地形模式図と空堀・溝・竪穴の平面配置
第28図　第120次調査区の基本層序と遺構配置図
第29図　縄文時代の出土遺物
第30図　遺構外出土遺物（１）
第31図　遺構外出土遺物（２）
第32図　遺構外出土遺物（３）青磁・灰釉陶器・緑釉陶器
第33図　遺構外出土遺物（４）土錘・砥石
第34図　第115・118・120次調査区における建物と板塀の配置状況



第１図　払田柵跡と周辺の古代・中世の遺跡

第１章　はじめに

払田柵跡は秋田県仙北郡仙北町払田・千畑町本堂城回にある。遺跡は雄物川の中流域に近く、大曲市の東方約６㎞、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩からなる真山、長森の丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（烏川）、南側を丸子川（鞠子川）によって挟まれた沖積低地に立地する。

明治35・36年（1902・1903）の千屋村坂本理一郎による溝渠開削の際や、明治39年（1906）頃から開始された高梨村（現仙北町）耕地整理事業の際に発見された埋もれ木が、地元の後藤宙外・藤井東一らの努力によって歴史的遺産と理解されたのが、遺跡解明の端緒となった。

昭和５年（1930）３月に至り、後藤宙外が中心となって高梨村が調査を実施し、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われて遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、昭和６年（1931）３月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、昭和63年（1988）６月29日付けで史跡の追加指定がなされて現在に至っている。史跡指定面積は894,600㎡である。

昭和40年代に入り、史跡指定地域内外の開発計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実体を把握することを目的に昭和49年（1974）、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した。幸い、地元管理団体仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

事務所は昭和61年（1986）４月、「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称し、現在は「払田柵跡調査要項」の第６次５年計画に基づいて計画的に発掘調査を実施している。

史跡は長森・真山を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物にはⅠ～Ⅴ期の変遷があり、創建は９世紀初頭、終末は10世紀後半である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』（昭和60年３月）として公刊した。

一方、区画施設である外柵は東西1,370m、南北780mの長楕円形で、標高32～37m、総延長3,600m、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約878,000㎡である。外柵は１時期の造営で杉角材による材木塀が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は、東西765m、南北320mの長楕円形で、面積約163,000㎡、最高地は標高53mである。外郭線の延長は約1,760mで石塁、築地塀（東・西・南の山麓）と材木塀が連なり、東西南北に八脚門が開く。外郭線は全体に４時期にわたる造営が認められる。なお外柵・外郭は、従来それぞれ外郭線・内郭と呼称していたが、これまでの調査成果を踏まえ、平成７年（1995）から呼び替えたものである。これら区画施設の調査成果は報告書『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』（平成11年３月）として公刊した。

出土品には、須恵器・土師器・瓦・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁（越州窯系）などのほか、斎串・曲物・挽物・鋤・楔などの木製品、漆紙文書・木簡・墨書土器・箆書土器などの文字資料がある。木簡は昨年度までに88点確認しており、「飽海郡少隊長解申請」「十火大粮二石二斗八升」「嘉祥二年正月十日」などと記された文書・貢進用木簡があり、「別當子弟」「狄藻」などの文字もある。墨書・箆書土器は

400点以上出土・採集されており、「大津郷」「鷹空上」「懺悔」「小勝」「音丸」「厨家」「厨」「官」「舎」「館」「千」「主」「長」「酒」などの文字が認められる。

管理団体である仙北町は、昭和54年（1979）から保存管理計画による遺構保護整備地区の土地買い上げ事業をすすめており、昭和57年（1982）からは調査成果に基づいて環境整備事業を実施している。さらに平成３年（1991）から「ふるさと歴史の広場」事業により、外柵南門や大路東建物、河川跡・橋梁の復元整備、ガイダンス施設（払田柵総合案内所）の設置などを実施し、更に平成７年（1995）からは「ふれあいの史跡公園」事業により、政庁東方の官衙建物の整備などを実施した。平成11年（1999）には外郭西門の門柱及びこれに取り付く材木塀の復元整備を、本年度は外郭北門周辺の盛土整地と案内板設置を実施している。

なお、平成12年度までに実施した過去27年間の発掘調査面積は、秋田県埋蔵文化財センター（第102次）・仙北町・千畑町調査分を含め47,946㎡であり、遺跡総面積のうちの5.5％にあたる。

第１表　払田柵跡周辺の主な古代・中世遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所在地	備考	文献
53-2	繁昌Ⅰ遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（木製品）：古代	1
53-3	繁昌Ⅱ遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（土師器･須恵器）	1
53-4	上高梨遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（須恵器）	1
53-5	堀田城跡	仙北町払田	真山を利用した中世城館	2
53-6	境田城跡	仙北町払田	中世城館：天正18年破却	2
53-7	杉ノ下Ⅰ遺跡	仙北町横堀	遺物包含地（須恵器）	1
53-9	鍛冶屋敷遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（土師器･須恵器）	1
53-13	四十八遺跡	仙北町上野田	遺物包含地（土師器･須恵器）	1
53-14	中村遺跡	仙北町上野田	遺物包含地（土師器･須恵器）	1
53-18	弥兵谷地遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（須恵器）	1
53-19	一ツ森遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（珠洲系陶器）	1
53-25	田ノ尻遺跡	仙北町払田	遺物包含地（土師器･須恵器）	1
54-2	本堂城跡	千畑町本堂城回	中世城館：戦国期本堂氏の居館	2
54-3	厨川谷地遺跡	千畑町土崎	埋蔵銭出土地（大正４年） 2001年発掘調査、古代祭祀遺跡	3
A	厨川谷地Ⅱ遺跡	千畑町土崎	中世以降？2000年新発見	
B	厨川谷地Ⅲ遺跡	千畑町土崎	古代、2001年新発見	
54-4	中屋敷Ⅰ遺跡	千畑町土崎	寺院跡	1
54-14	内村遺跡	千畑町千屋	平安時代集落跡、1980年発掘調査	4

文献　1　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）／2　秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981（昭和56年）／3　千畑町「古銭発掘由来記」『千畑町郷土史』1986　（昭和61年）／4　秋田県教育委員会『内村遺跡』1981（昭和56年）／地図番号は、文献１の地図番号に対応する

第２章　調査計画と実績

払田柵跡の調査は「払田柵跡調査要項」に基づき、５年計画を起案し、調査顧問の指導と助言を受け継続実施している。平成11年度から15年度の調査は、「払田柵跡発掘調査第６次５年計画」として調査顧問の承認を得ており、本年度はその第３年度に当たる。

事業費については、国庫補助金の内示（総経費1,600万円のうち、国庫補助金800万円）を得たので、次のような「平成13年度払田柵跡調査計画（案）」を立案した。

第２表　調査計画表

調査次数	調　査　地　区	調　査　内　容	調査面積	調　査　期　間
第119次	外　郭　西　部 （仙北町払田字長森）	外郭西門東部地域 の遺構分布調査	400㎡	４月17日～ ５月31日
第120次	外　郭　西　部 （仙北町払田字長森）	政庁西方の推定 官衙域の調査	400㎡	６月１日～ ９月30日
合　計	２　地　区		800㎡	

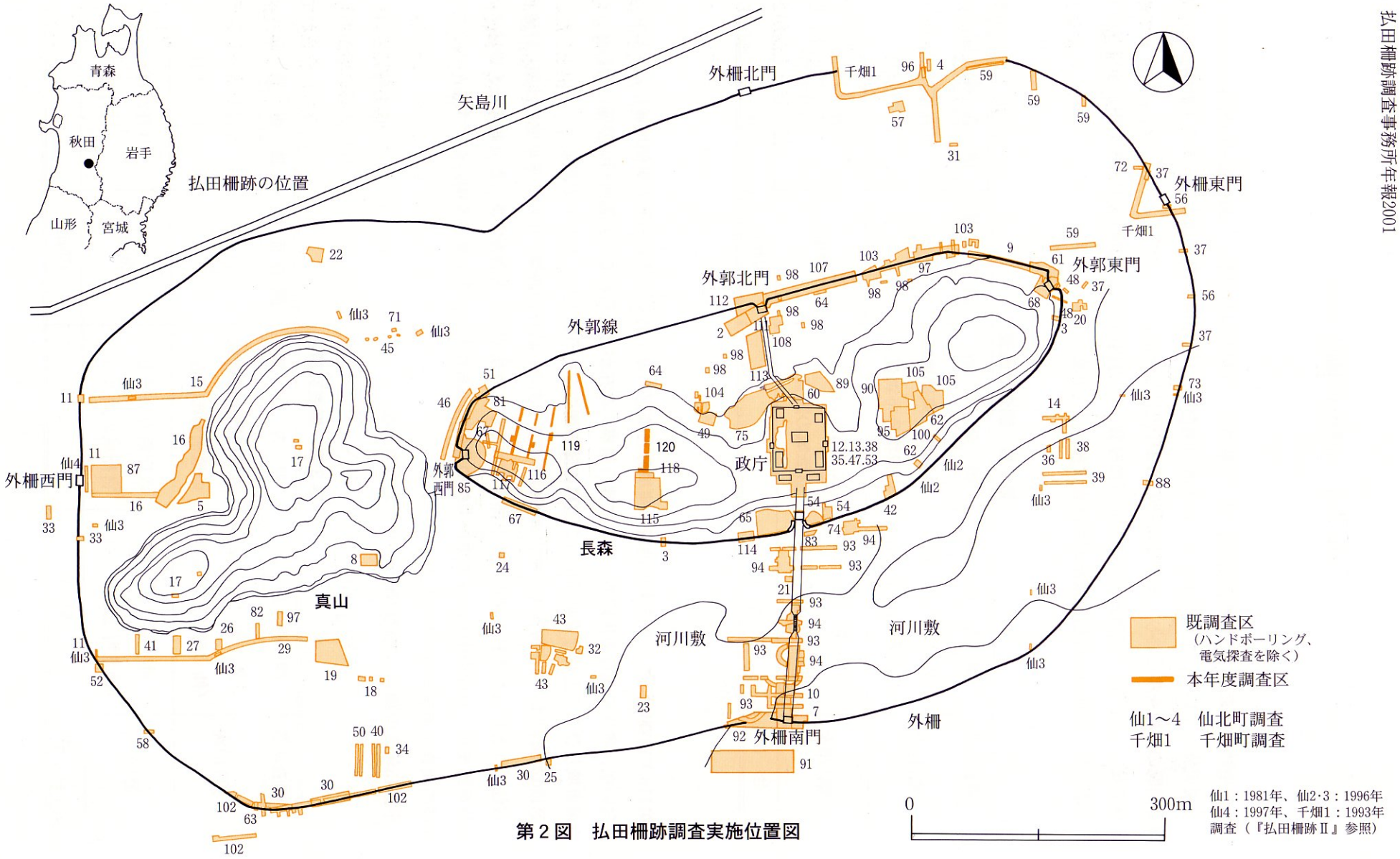
第119次調査は、外郭西門東部地域の遺構分布確認調査である。外郭西門の東側地域には平坦地は少ないが、政庁に連なる道路や、それに伴う遺構の存在が考えられる。外郭西門の整備に合わせ、西門東方域及びここと政庁を結ぶ地域の遺構確認の調査を行うことにしたものである。

第120次調査は、政庁域西方の推定官衙域の調査である。政庁の西側に広がる平坦地には掘立柱建物、竪穴住居などからなる官衙域の存在が推定されるが、今まで全く未調査であった。政庁東方地域での調査を踏まえ、政庁を中心とする東西両側の遺構群のあり方と、その変遷を明らかにするため、この地域の調査を実施することにしたものである。

平成13年度の調査の実績は第３表のとおりである。

第３表　調査実績表

調査次数	調　査　地　区	調　査　内　容	調査面積	調　査　期　間
第119次	外　郭　西　部 （仙北町払田字長森）	外郭西門東部地域 の遺構分布調査	630㎡	５月７日～ 11月２日
第120次	外　郭　西　部 （仙北町払田字長森）	政庁西方の推定 官衙域の調査	280㎡	９月28日～ 11月２日
合　計	２　地　区		910㎡	



第２図　払田柵跡調査実施位置図

第３章　第119次調査の概要

第１節　調査経過

第119次調査は、外郭西門東部地域における遺構分布を確認する調査である。本調査は第４章で報告する第120次調査と並行する形で進めており、以下にその経過等を調査日誌の記述から抜粋する。

５月７日、調査を開始。調査事務所で所長の挨拶、作業員説明会などを実施した。午後から作業員休憩用と機材保管用のテント２張りを現地に設営した。

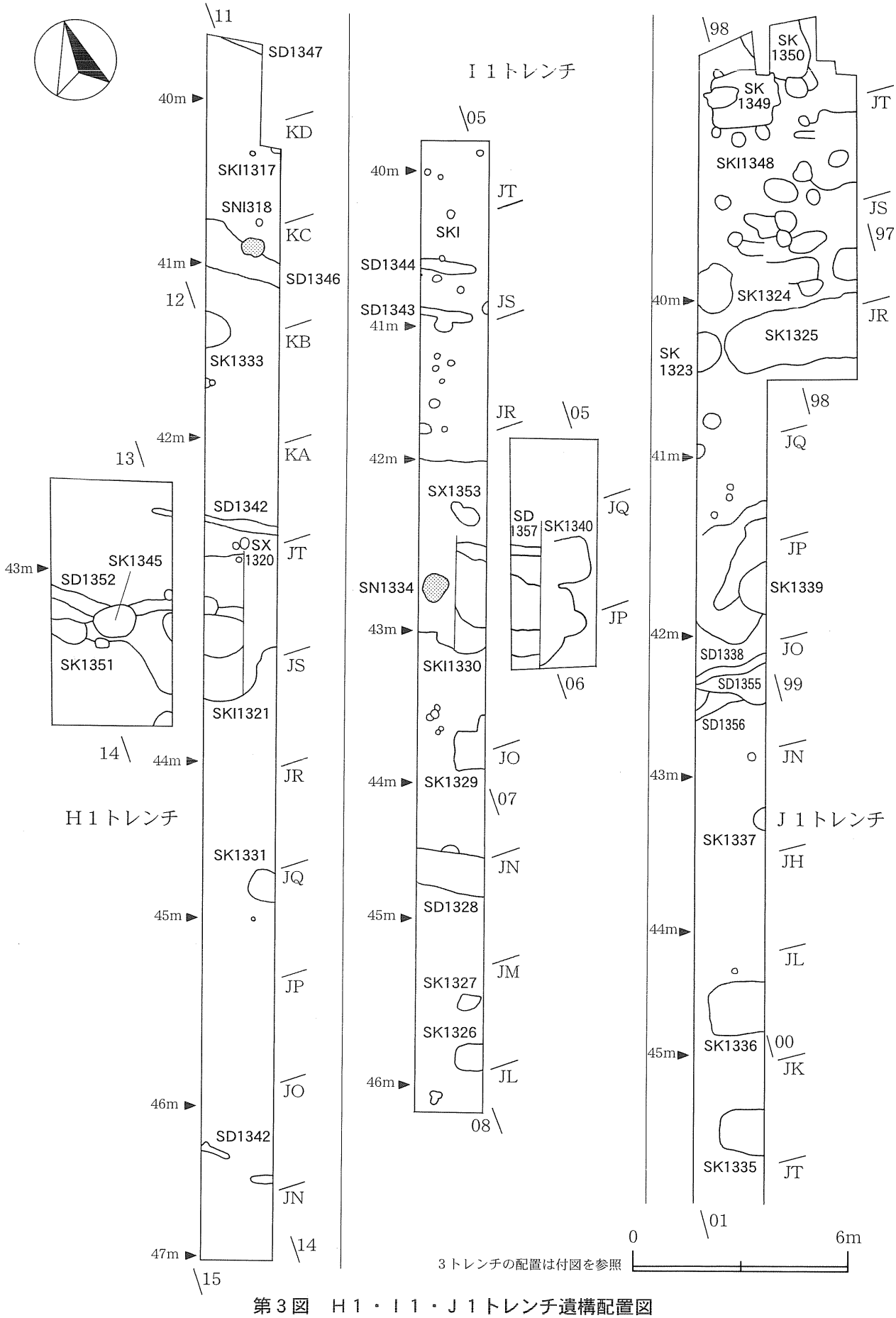
本年度の２つの調査区は丘陵地であり地目が雑木林である。しかも本年度から本格的にトレンチ調査を実施することから、調査面積以上に雑木を間伐・除去する必要が生じた。伐採の効率を考えれば、下草が繁茂する前にある程度の目途を付けておく必要があり、両調査区のトレンチ調査予定区域の間伐・除去を集中的に実施することにした。従って第119次の掘り下げは６月に入ってからとなった。

５月29日、トレンチを２本設定（Ｈ・Ｉトレンチ）、その幅を２ｍとする。トレンチ内の粗掘りは６月４日から開始した。その初日、早くもＨ１トレンチ北側で土師器坏が数個体まとまって出土、遺構に伴うものか（後のＳＫ1333）。表土からわずか25cm程下の層位出土である。５日、昨日土器がまとまって出土した地点の側から焼土遺構が見つかった（後のＳＮ1318）。明らかに同所で火の使用がなされている。周囲には炭化物も見られた。またここから南側（斜面上位）でも竪穴らしきプランが見え始め、遺物には鉄滓が含まれる。今年も鍛冶関係の工房などが出てくるのか。

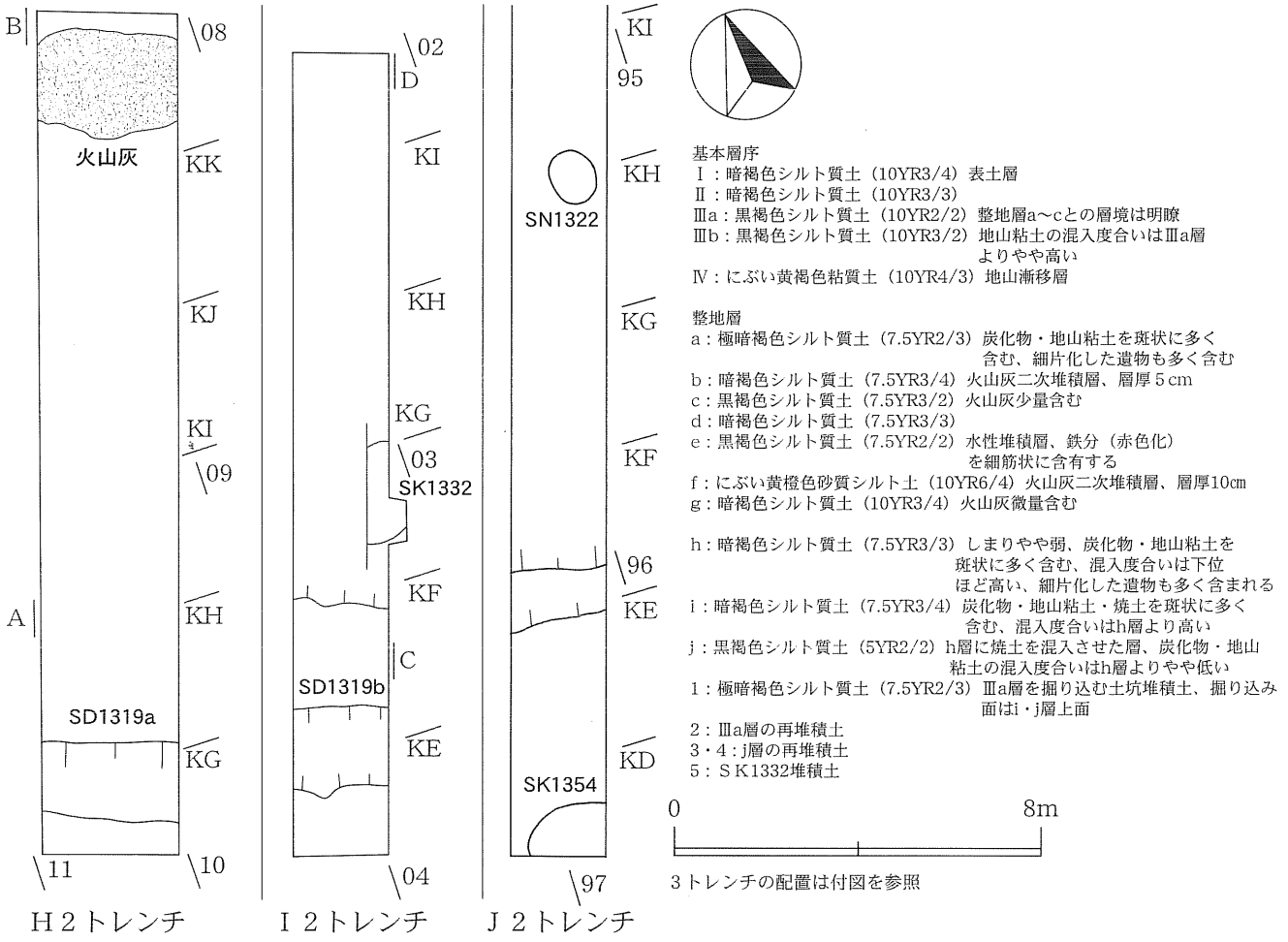
６月22日、平板による現況地形図作成（1/100）を行う。これは雑木伐採の結果、段状の地形が確認されたことを受けてである。27日、３本目となるＪトレンチ粗掘りを開始。７月６日、４本目のＫトレンチの粗掘りに着手した。10日、Ｊ２トレンチ第Ⅰ層中ではあるが、中国産青磁片が出土した。この周辺（Ｊ２・Ｋトレンチ）では須恵器系中世陶器（擂鉢）が少数ではあるが点在している。該期の遺構・遺物が見つかるのか。11日、Ｊ２トレンチで白磁椀が、Ｈ２トレンチ北側では石硯・銭貨がそれぞれ出土するが、目に付くのは中世の遺物が多い。また同日Ｌトレンチ粗掘りにも着手した。

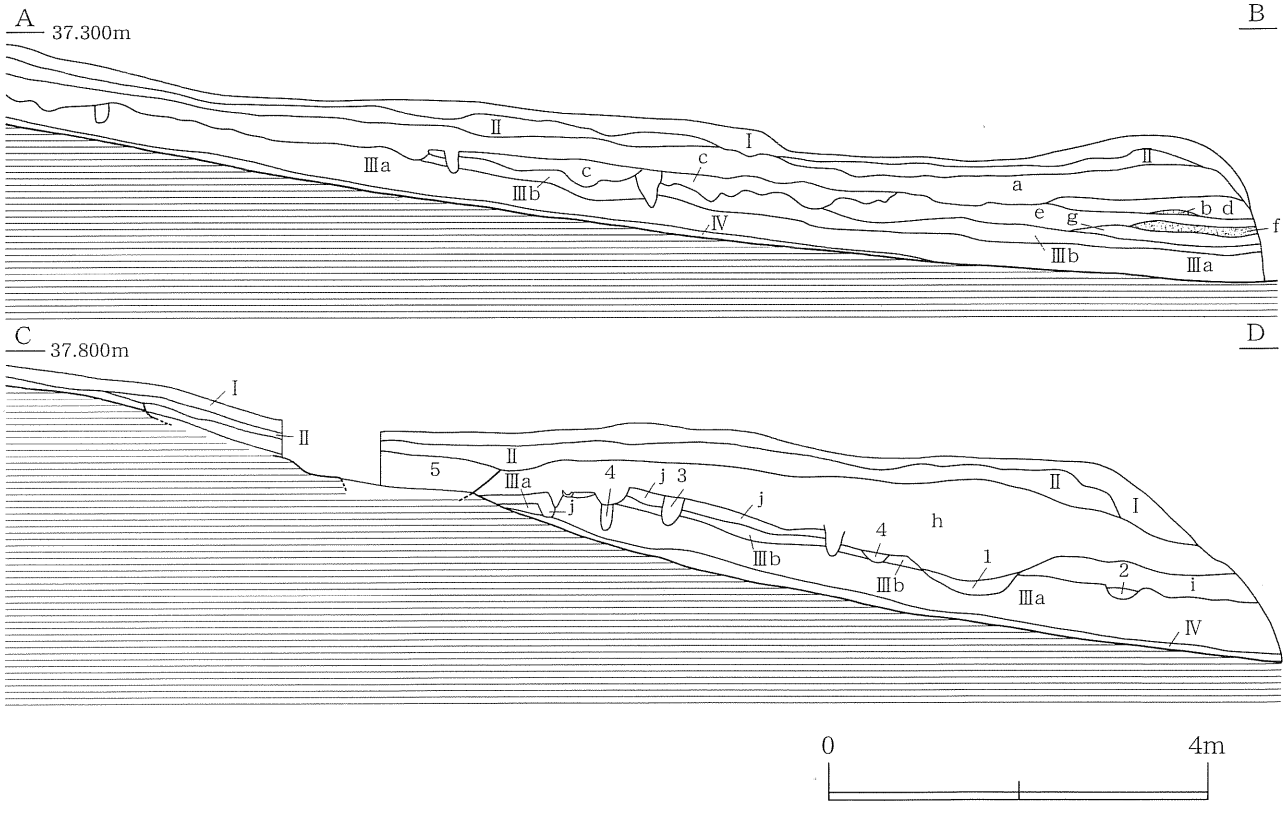
８月27日、Ｈ・Ｉトレンチ内の遺構検出作業に入った。Ｈ１トレンチでは鍛冶炉・竪穴・溝・焼土遺構など続々と検出された。Ｉ１トレンチでも土坑あるいは掘立柱建物跡の柱穴掘形や溝も確認された。28日、Ｈ２トレンチの溝は、昨年度確認している中世墳墓に伴う土塁・空堀のうちの北限の堀かもしれない。30日、鍛冶炉と想定していた焼土遺構周辺の土を篩いにかけたところ、鍛造剥片が含まれていることが判明し、本遺構（ＳＸ1320）は鍛冶炉と断定された。９月３日、Ｈ２・Ｉ２トレンチ北部は包含層（後に整地層とする）を呈し、土師器・須恵器が比較的多く出土した。５日、Ｈ２トレンチ北端部で十和田ａ火山灰がブロック状に検出された。

９月６日夕方、事務所内で水洗いしている遺物の中に刻書で「郡」と記される須恵器坏を発見した。同様の破片を探したところ、「出羽」「酒坏」と刻書のある破片と接合し、三行にわたり文字があることが判明。17日、払田柵跡周辺で稲刈りが始まる。千畑町厨川谷地遺跡の現地指導で訪れた東北歴史博物館の岡田茂弘氏、払田柵跡の調査現場にも来跡され各種指導を頂く。19日、Ｈ２トレンチで緑釉陶器が出土した。25日、Ｊ２トレンチ北側・ＳＮ1322堆積土内より炭化米が出土した。このことから、



第3図　H1・I1・J1トレンチ遺構配置図





第４図　Ｈ２・Ｉ２・Ｊ２トレンチ遺構配置図と土層図

堆積土を全量を持ち帰り篩いかけを行うことにする。26日、Ｈ２トレンチ北側の十和田ａ火山灰層の下位を掘りげる。遺物は極端に少なくなってきた。27日、Ｊ１トレンチで竪穴状の遺構を確認した箇所を拡張して広がりを追跡することとした。28日、本日より第120次調査区の粗掘りに入り、図面作成担当のみが本調査区に残る体制をとる。

10月15日、第53回の調査顧問会議を開催した。主に現地で指導を仰いだ。20日には千畑町厨川谷地遺跡と共に遺跡見学会を実施した。好天のもと210名の見学者が来跡された。

23日、本日より遺構精査に入る。24日、Ｈ１トレンチ・ＳＫＩ1321は埋土に十和田ａ火山灰がブロック状に認められ、竪穴廃棄の時期が推測できる。また同竪穴から一輪差し状を呈する須恵器壺（壺Ｇ）の体部～底部破片が見つかったが火山灰層直上からの出土であった。さらにＩ１トレンチ・ＳＫＩ1330の精査も行う。椀形滓・鉄滓が多数出土した。25日からは精査と並行して断面・平面図作成を開始した。さらに29日からは図面作成と埋め戻しを並行して実施。11月２日には第119次の野外調査を終了した。

第２節　検出遺構と遺物

１　調査区の立地と基本層序

第119次調査地は、外郭西門の北東約30ｍに位置し、長森丘陵西端部の馬背状の狭い平坦地から北側に傾斜する地区にあたる。一昨年度第116次調査区と昨年度第117次調査区の西・北側に隣接する。標高はＨトレンチでの計測（表土面）で、最高位が48m、北端部で40.5ｍとなる。現況はかつて杉林・雑木林であったところを10数年前に伐採しているが、その後手が加えられておらず、下草や雑木等で鬱蒼たる藪となっていた。

調査区は幅２ｍのトレンチを南北方向、すなわち等高線に直交させるようにして５本（Ｈ～Ｌトレンチ）設定した。Ｈ～Ｊの３トレンチは東西に走る道路で分断されるため、南を１、北を２とし、Ｈ１・Ｈ２トレンチと呼称している。なお各トレンチは遺構の分布などからその幅を広げたり、隣接地に拡幅させた箇所もある。調査期間の関係で、Ｋ・Ｌトレンチは表土（第Ⅰ層）除去のみとなっている。両トレンチ部は次年度に遺構精査を行う予定を立てている。

調査区の基本層序は、Ｈ１トレンチ、ＳＫＩ1321の南側で観察した。（第６図参照）

第Ⅰ層：暗褐色土（10YR3/4）表土、植物根が多くブカブカしている。層厚は10～15cm前後。

第Ⅱ層：極暗褐色土（7.5YR2/3）部分的に炭化物が混入する。層厚10～20cm。

第Ⅲ層：黒褐色土（10YR2/3）炭化物を少量含む。層厚25～40cm。

第Ⅳ層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）地山漸移層

第Ⅴ層：黄褐色土（10YR5/6）地山土

同層序を基準に他所を観察すると、Ｈ１～Ｊ１トレンチの北端部（東西道路の南側）では第Ⅱ層が欠落し、表土層の下に層厚10cm前後の第Ⅲ層が堆積する。またＨ２・Ｉ２トレンチでは第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に整地（盛土）層が介在していることが明らかとなった。整地層については後述する。

なお昨年第117次調査区においては地山面上で硬質泥岩（礫）を露出・観察される箇所が存在していたが、今回の調査区ではＪ１トレンチの南端部で一部硬質泥岩が認められるものの、他所では一切

見られなかった。

２　遺構と遺物

トレンチ調査により得られた資料は、出土遺物から主に古代に帰属する遺構が大多数を占める。明らかに中世と判断される遺構は、Ｊ１トレンチのＳＫ1325のみであり、ＳＤ1319とした空堀跡も当該期の可能性が高いものの、追検証が必要である。

また前節で紹介のように、本調査区では掘り下げ以前において段状の地形が観察された。精査の結果、これが10世紀前葉以降に人為的に地形を改変・整地させた施設であったことを確認している。

従って本項ではまず、トレンチ単位（Ｈ・Ｉ・Ｊ）での遺構・遺物の概要を報告し、次いで段状地形及びこれを構成する整地層について出土遺物を含め記述する。そして最後に遺構外の出土遺物にふれることとする。なお今次調査で新規に付した遺構番号は、1317～1357である。

検出した遺構・遺物は以下の通りである。

古代：竪穴状遺構３軒、土坑19基、鍛冶炉２基、焼土遺構３基、溝跡12条

【遺物】土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦、土製品（坩堝・羽口）、鉄製品（紡錘車）・鉄滓（鍛造剥片）・砥石・炭化米

中世：土坑１基、空堀１条　　【遺物】須恵器系中世陶器・青磁・銭貨

（１）Ｈトレンチの遺構と遺物

Ｈトレンチは昨年第117次調査区Ｂトレンチの東18mに設定した。調査の結果、道路南Ｈ１トレンチ（長さ35.4m）の２箇所で竪穴状遺構・土坑や鍛冶炉が集中し、北のＨ２トレンチ（長さ17.5m）では空堀跡を１条検出した。

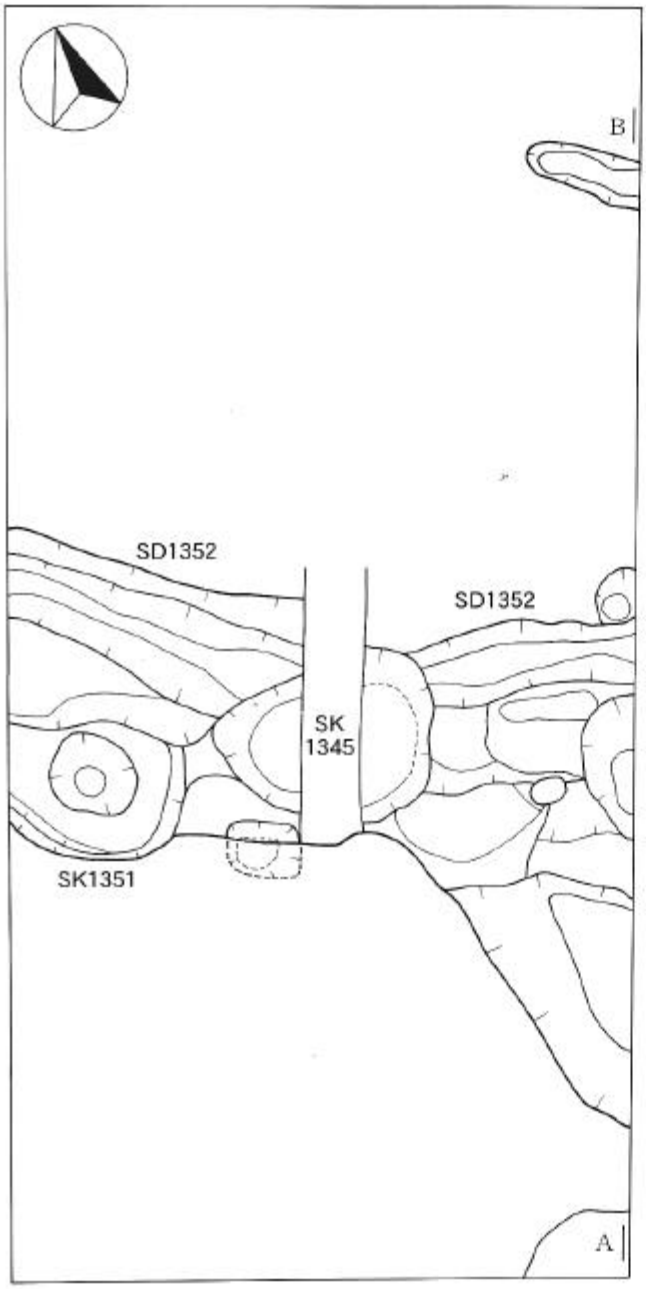
①ＳＫＩ1321竪穴状遺構とＳＸ1320鍛冶炉

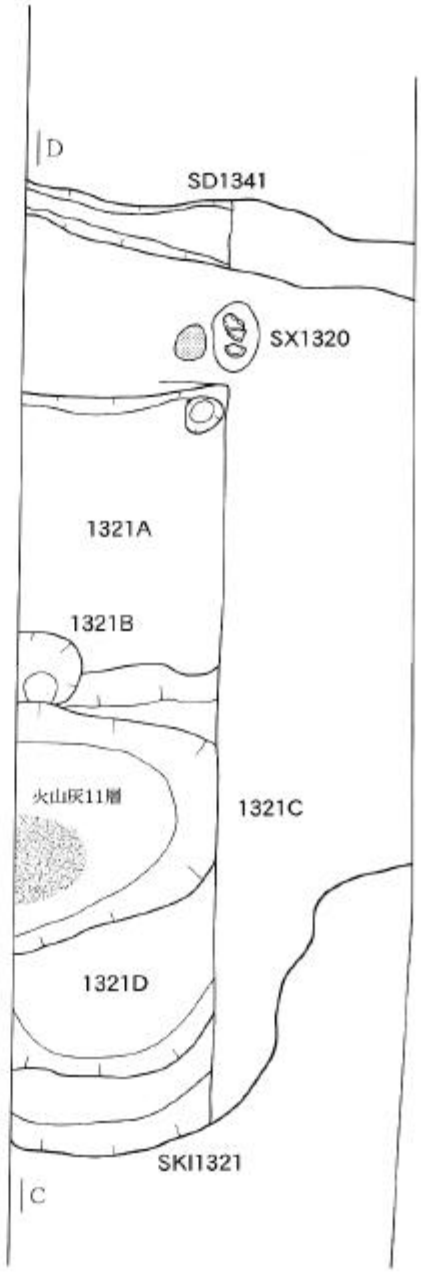
表土面での標高が43m前後に位置する遺構群である。竪穴・土坑・溝・焼土遺構と鍛冶炉が重複あるいは隣接して構築される。

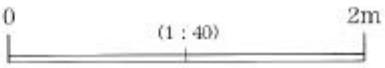
ＳＫＩ1321竪穴状遺構（第５～７図、図版２）

ＪＳ13を中心とする地区で検出した。ＳＫ1345・ＳＤ1352と重複し、新旧関係は旧い方からＳＫＩ1321→ＳＤ1352→ＳＫ1345となる。またＳＫＩ1321自体も堆積土の観察（第６図Ｃ－Ｄ間土層図）から1321Ａ→1321Ｂ→1321Ｃ→1321Ｄの変遷をたどる。

1321Ａは堆積土14～18層で構成され、南北1.75m、東西1.15m以上の矩形を呈すると考えられる。深さは30㎝程であり、底面は平坦となる。1321ＢはＡを切り込んで構築される建物柱穴の掘形（13層）を呈する。平面形は略円形を示し、推定径は60㎝、柱痕跡（12層）は径20～25㎝となる。その深さは55㎝である。1321ＣはＢの南側を切り込む形で構築される。南北1.4m、東西は1.15m以上であるが、西側に拡幅した調査区には及ばないことから東西は２m未満の楕円状を呈すると思われる。確認面（1321Ｄ床面上）からの深さは30㎝である。堆積土は９・10層で構成され、いずれも人為的堆積を示す。さらに上面は堅く締まっており、Ｄ構築に伴い埋め戻されたと判断される。1321Ｄは第Ⅲ層面から掘り込まれており、Ｃを埋め（貼床）、Ｂ・Ａの上面をも床面として使用し、その規模は南北4.3m、東西４m以上と見られるが、形状は不明確である。確認面からほぼ平坦な床面までの深さは110㎝に

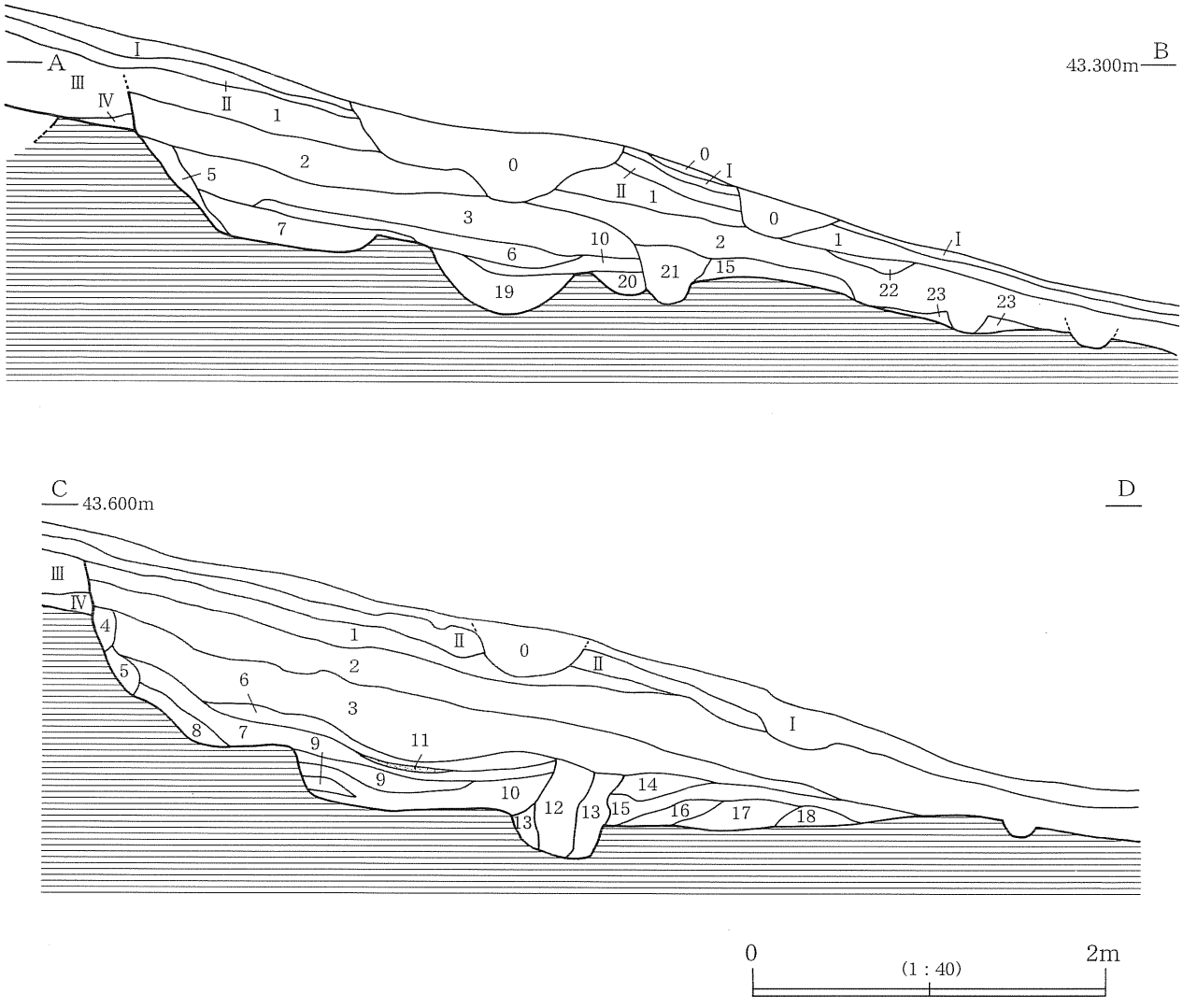






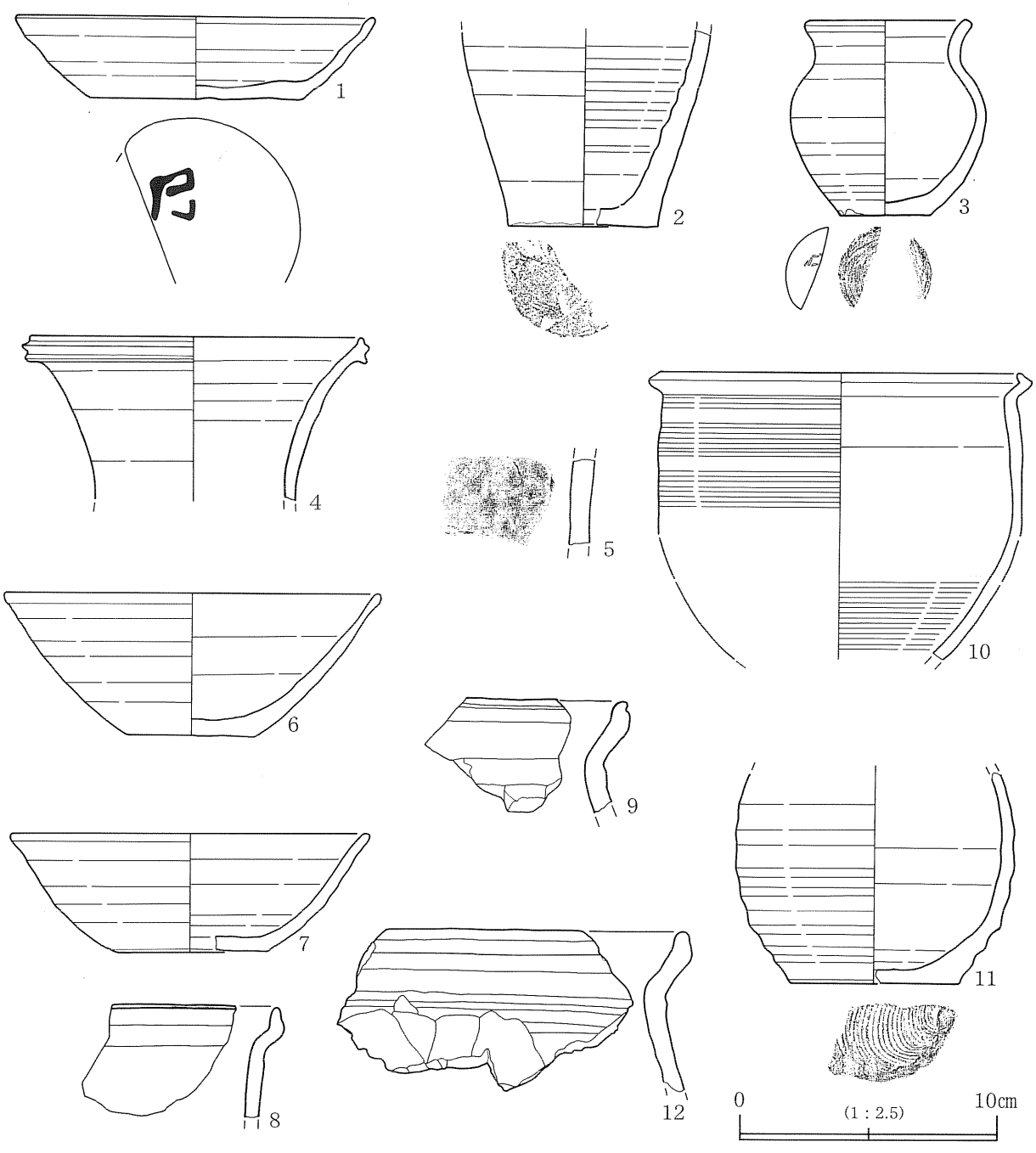
ＳＫＩ1321土層（C−D間）
堆積状況（東→）
中央に火山灰11層の分布が認められる

第５図　ＳＫＩ1321竪穴状遺構と周辺の遺構



0：撹乱層
1：黒褐色シルト質土（10YR2/3）Ⅲ層の再堆積土、地山粘土・炭化物やや多く含む
2：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土・炭化物を斑状にやや多く含む
3：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土やや多く含む
4：にぶい黄褐色シルト質粘土（10YR4/3）
5：褐色粘質土（10YR4/6）地山粘土二次堆積（ブロック状）
6：黒褐色砂質シルト（10YR3/2）しまり弱、火山灰を多く含む
7：黒褐色シルト質土（10YR3/1）しまり弱、地山粘土少量含む
8：黄褐色粘質土（10YR5/6）地山粘土二次堆積、ポソポソする
9：黄褐色粘質土（10YR5/8）上面が堅くしまる、貼床状を呈する
10：暗褐色シルト質粘土（10YR3/4）地山粘土斑状に多く含む、人為堆積
11：火山灰層
12：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土斑状に少量含む
13：褐色粘質土（10YR4/6）地山粘土を主体的に含む、人為的埋め戻し土
14：黄褐色粘質土（10YR5/8）13層と同質
15：黒色シルト質土（10YR2/1）
16：黄褐色粘質土（10YR5/8）地山粘土を主体的に含む、人為的埋め戻し土
17：褐色粘質土（10YR4/6）16層と同質
18：褐色粘質土（10YR4/6）地山粘土を主体的に含む
19：黄褐色粘質土（10YR5/8）地山粘土二次堆積が主となる、ポソポソする
20：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土やや多く含む、SD1352埋土
21：にぶい黄褐色シルト質粘土（10YR4/3）
22：暗褐色シルト質土（10YR3/3）
23：褐色粘質土（10YR4/6）

第６図　ＳＫＩ1321竪穴状遺構土層断面図



番号	種　別	器　形	出土位置・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
1	須恵器	坏	SKI1321D-3層	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「厨」か	13.8	8.4	3.2	0.61	23.2	34°
2	須恵器	壺G	SKI1321D-3層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、胎土に赤色粒子を含む		5.8	(7.7)			
3	須恵器	小壺	SKI1321D-2層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り→篦書(焼成前)	6.0	3.6	7.6			
4	須恵器	長頸壺	SKI1321	内外:ロクロ調整、内面に自然釉かかる	12.7		(6.4)			
5	須恵器	甕か壺	SKI1321	内外:ロクロ調整、外面に自然釉かかる						
6	土師器	坏	SKI1321C-10層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り	14.4	5.0	5.6	0.35	38.9	33°
7	土師器	坏	SKI1321C-10層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	6.0	4.7	0.44	34.6	32°
8	土師器	甕	SKI1321D-3層	内外:ロクロ調整、内外面に煤付着						
9	土師器	甕	SKI1321C-10層	内外:ロクロ調整、12と同一個体か						
10	土師器	甕	SKI1321	内外:ロクロ調整、煤付着、被熱	14.0		(11.2)			
11	土師器	甕	SKI1321	内外:ロクロ調整底:回転糸切り、外面煤付着		6.6	(8.3)			
12	土師器	甕	SI1321C-10層	外:ロクロ→ケズリ、内面煤付着						

第７図　ＳＫＩ1321竪穴状遺構出土遺物

達する。堆積土は１～８・11層に細分される。最下層に近い11層は十和田ａ火山灰の二次堆積土であり４cm程の層厚を有する。このことから1321Ｄ廃棄の時期は十和田ａ火山灰流入の前となる。

出土遺物（第７図）は、主に1321Ｃと1321Ｄから得られている。土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺類（壺Ｇを含む）、瓦、鉄滓がある。土師器坏は少なくとも18個体（うち１個体は内面黒色処理）認められた。破片の重量比（％）からみた土師器:須恵器の出土割合は86:14である。また鉄滓は4.89kg得られている。

ＳＫ1345・1351土坑、ＳＤ1352溝跡（第５図）

ＳＫ1345、ＳＤ1352ともＳＫＩ1321を切り込んで構築されるが、ＳＫ1351はＳＫＩ1321とは直接的な重複関係はない。しかしＳＫ1351はＳＤ1352構築に伴いその北側を消失している。

ＳＫ1345は東西1.25m、南北0.95mの楕円状を呈する土坑である。確認面からの深さは45cmとなる。ＳＫ1351は削平及び調査区の関係で規模・形状は不明確ではあるが、東に隣接するＳＫ1345に近似する規模を有すると考えられる。ＳＤ1352は等高線に沿うように東西に延びる溝である。その幅は30～50cm、深さは15cm前後である。確認された長さは3.6mであるが、少なくとも西には延長する。ところが東側では1321Ａ・Ｂ近辺を通るはずではあるが、平面・断面としての確認はできなかった。

ＳＸ1320鍛冶炉（第５図、図版３上）

1321Ａの北側に隣接する位置で確認しているが、直接の重複はない。ただし1321Ｄと同一面で検出していることから、Ｄ構築時に同時期に存在していた可能性がある。遺構は灰色に還元した径25cm前後の円形プランの中に鉄滓・焼けた礫が各１点置かれていた。その周囲の土を篩いにかけたところ鍛造剥片が見つかり鍛冶炉と判断したものである。鉄滓は椀形滓であり、還元面に接していることから原位置を保つ炉底滓と考えられる。

ＳＤ1341溝跡（第５図）

ＳＸ1320の北に位置し、ＳＤ1352と同じく等高線に沿わせて東西に延びる。確認された長さは3.8m、その幅20～40cm、深さは僅か10cm前後にすぎない。昨年第117次調査区Ｂトレンチで検出していたＳＤ1305の東側延長部にあたることから、ＳＤ1341あるいは先のＳＤ1352のいずれかが接続していた可能性がある。

②ＳＮ1318・ＳＤ1346周辺の遺構（第８図）

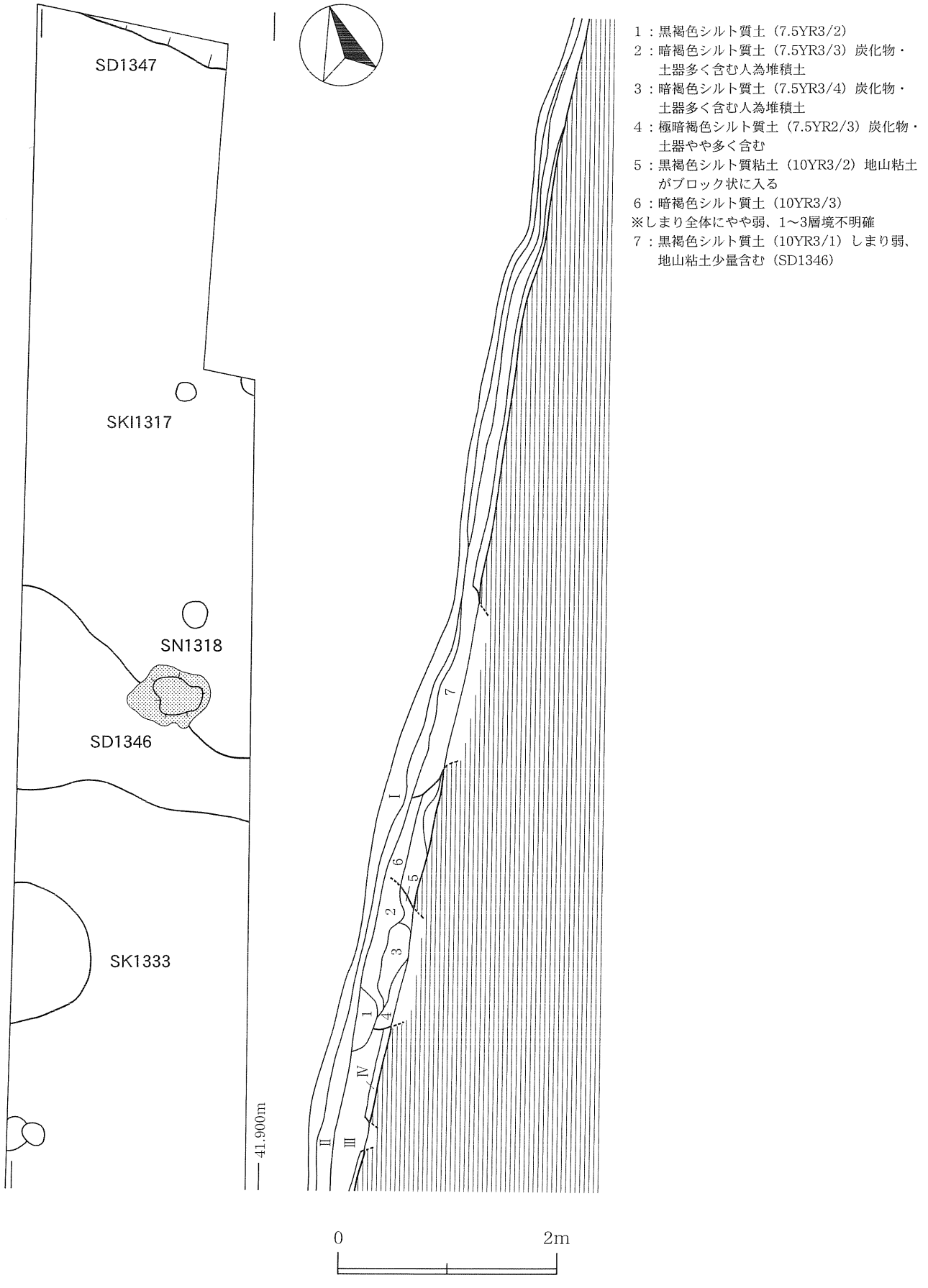
表土面での標高が40～41m前後に位置する遺構群である。検出地区はＫＢ～ＫＤと10～12ラインに挟まれた位置となる。ここでは焼土遺構・土坑・溝が重複あるいは隣接して構築される。また遺構としての確認はできなかったが、地山面の観察から竪穴状遺構（ＳＫＩ1317）の存在も推測される。

ＳＮ1318焼土遺構

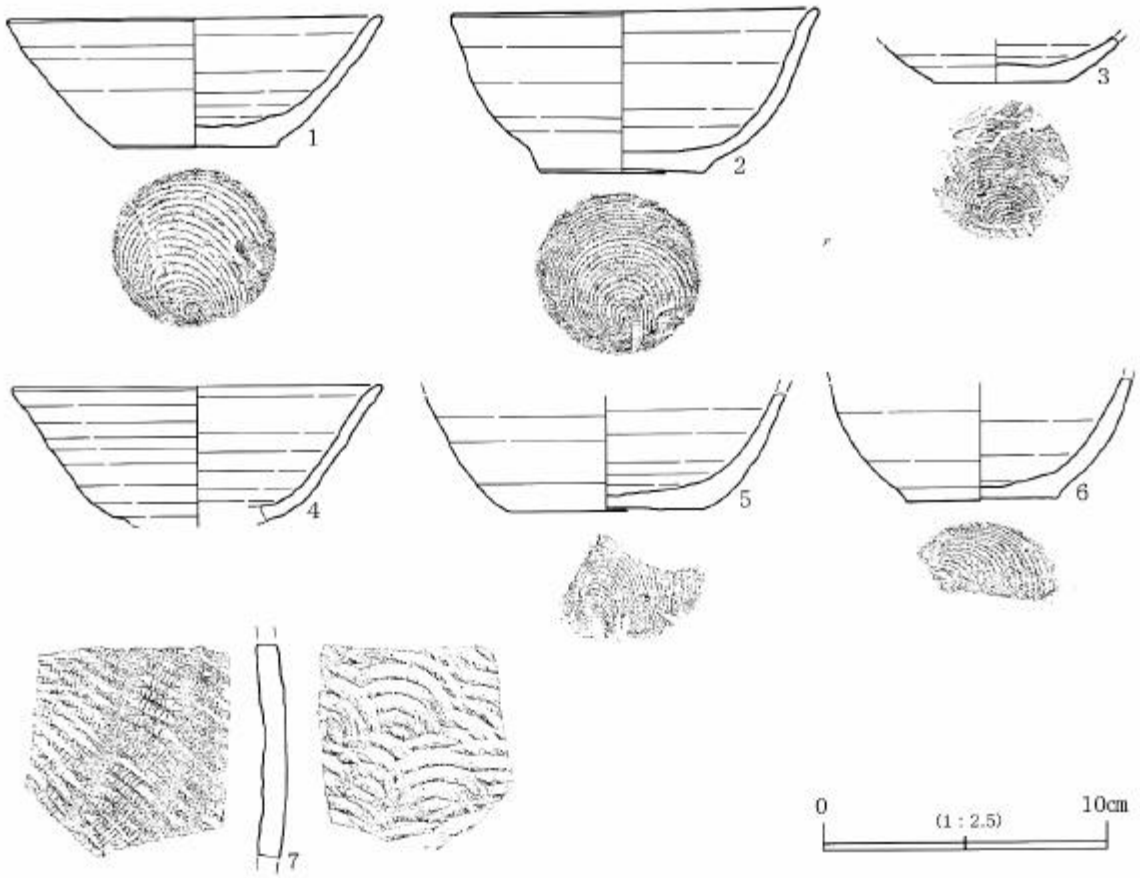
南側でＳＤ1346と重複し、溝堆積土の上に焼土遺構が形成されていることを第Ⅲ層中で確認した。焼土の広がりは東西75cm、南北60cmの不整円形を呈する。掘り込みを伴う形態ではなく、地山面での火の使用に伴う遺構と判断した。

ＳＤ1346溝跡

ＳＤ1341・1352と同じく等高線に沿うように東西に延びる溝である。確認した長さはトレンチ幅いっぱいであり、その幅は50～140cmと一定しない。プラン確認のみであり深さは不明であるが、溝掘り込み面は土層観察より第Ⅲ層中となる。確認面上より須恵器片が出土している。

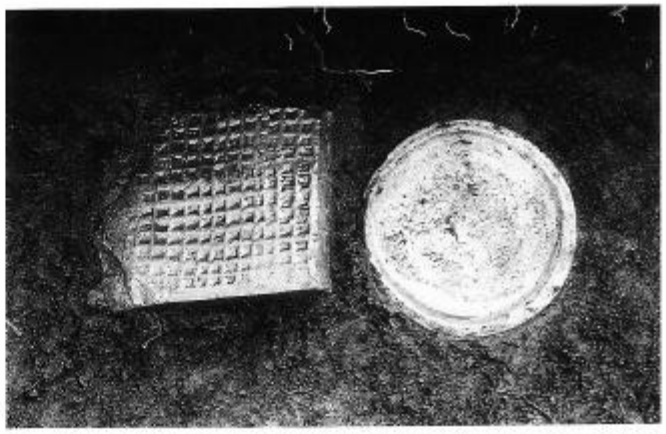


第８図　Ｈ１トレンチ北側の遺構配置図

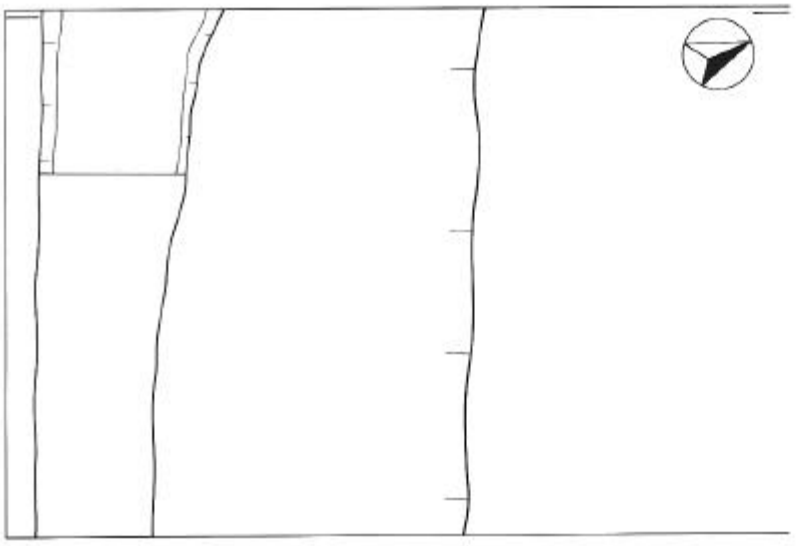


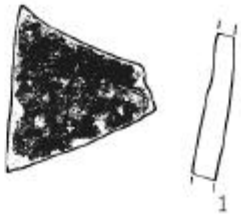
番号	種　別	器　形	出土位置・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	坏	SK1333-2層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.8	4.6	0.45	35.4	34°
2	土師器	坏	SK1333-2層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り	12.7	5.9	5.7	0.46	44.9	21°
3	土師器	坏	SK1333-2層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、内面煤付着		4.8	(1.6)			
4	土師器	坏	SK1333-2層	内外:ロクロ調整	13.0		(4.8)			
5	土師器	坏	SK1333-2層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り		6.6	(4.1)			
6	土師器	坏	SK1333-2層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り		5.4	(4.2)			
7	須恵器	甕	SK1333-2層	外:平行(細目)叩き、内:青海波当て具						

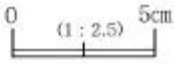
第９図　ＳＫ1333土坑出土遺物

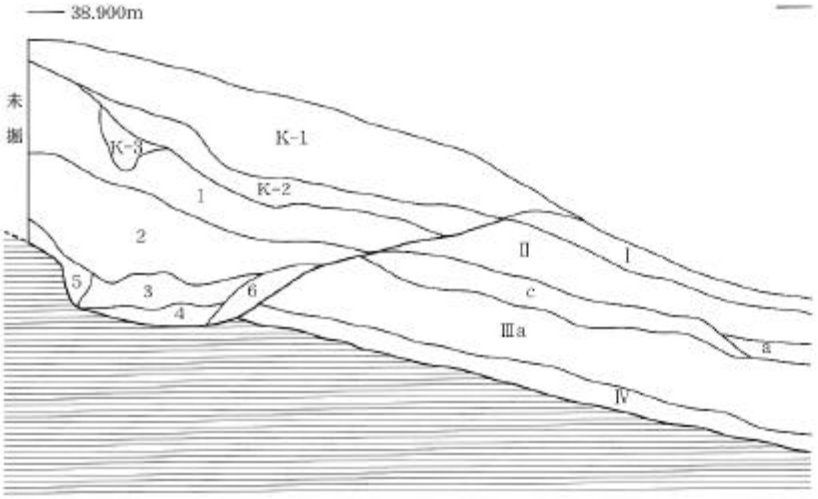


Ｈ２トレンチ整地層出土遺物出土状況
左：平瓦（第21図18）
右：須恵器壺底部（第20図５）



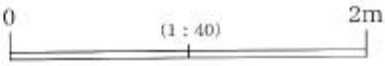


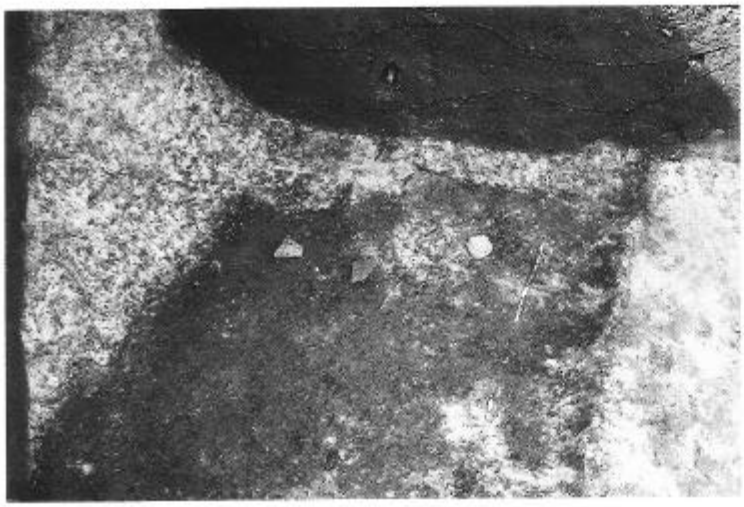




SD1319a
1：極暗褐色シルト質土（7.5YR2/3）
　Ⅱ層に類似
2：黒褐色シルト質土（7.5YR3/2）
3：極暗褐色シルト質土（7.5YR2/3）
4：黒褐色シルト質土（10YR2/3）
　地山粘土やや多く含む
5：黒褐色シルト質土（10YR2/3）
　地山粘土ほとんど含まず
6：黒褐色シルト質土（10YR2/2）
※1～3層は層境不明瞭、地山粘土・炭化物やや多く含む

a・c：整地層、kは撹乱層





SD1319a　土層下部と4層中出土の遺物（東→）
左・中：須恵器（左:上図の1）
右　　：土師器坏（上図の2）

第10図　SD1319a空堀跡と出土遺物

ＳＫ1333土坑（第８・９図、図版４上中）

ＳＤ1346の南に位置し、第Ⅲ層中より掘り込まれる土坑である。遺構の西側は未調査区に及び規模・形状は不明確であるが、現況での南北長は1.1m、東西長は0.7mとなり、円形あるいは楕円形をなしていた可能性がある。確認面上から遺物が多く出土し、一部掘り下げ（１～５層）を行ったところ、人為的に埋め戻した土に土師器・須恵器が含まれていることが判明した。

出土遺物（第９図）は、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、羽口があり、土師器坏は少なくとも24個体を確認している。図示した遺物は全て２層出土である。破片の重量比（％）でみる土師器:須恵器の出土割合は92:８となり、圧倒的に土師器が多い。

ＳＤ1347溝跡

Ｈ１トレンチ北端部で僅かに東西方向の壁の立ち上がりを検出した。ＳＤ1346と同方向を示すことから溝跡で登録はしているものの、竪穴状遺構の南側壁であった可能性も残る。

なおＳＤ1347とＳＤ1346の間（表土面での標高が40m前後）には明確な遺構の検出は認められなかったが、地山面がほぼ平坦となり、かつ堅く締まっていることから、ここに竪穴状遺構（ＳＫＩ1317）が存在していたと推測される。

③ＳＤ1319ａ空堀跡（第10図、図版３中）

Ｈ２トレンチ南端、ＫＦ10を中心とする地区で検出した。遺構南側は現道のため未掘であり、規模（幅）は不明だが、現況での幅は2.4mとなり、少なくとも３mを超す幅をもつことが類推される。土層を観察すると堀は第Ⅱ層中より掘り込まれ、ｃ層とした整地層をも掘り込んでいる。断面形状は緩いU字形を示し、底面は平らな箱堀状をなす。下端部の幅は0.85m、深さは最深で1.45mとなる。

ＳＤ1319ａは、検出位置から平成元年度第81次調査区及び昨年度第117次調査区で確認していた丘陵地を「コ」字状（北側が開口する）に巡る堀跡ＳＤ877の北側を画する空堀跡（中世）であった可能性が高いが、今後の追跡調査が必要である。

遺物は最下層（４層）より土師器（坏・甕）・須恵器・鉄滓が数点出土したが中世期の遺物はない。第10図１は瓶類の肩部破片である。外面に灰釉が掛かっており、施釉陶器の可能性が考えられたため、愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏に見ていただいたところ、「東北地方産の須恵器の可能性が高い」との報告を得ている。２は土師器坏である。

（２）Ｉトレンチの遺構と遺物

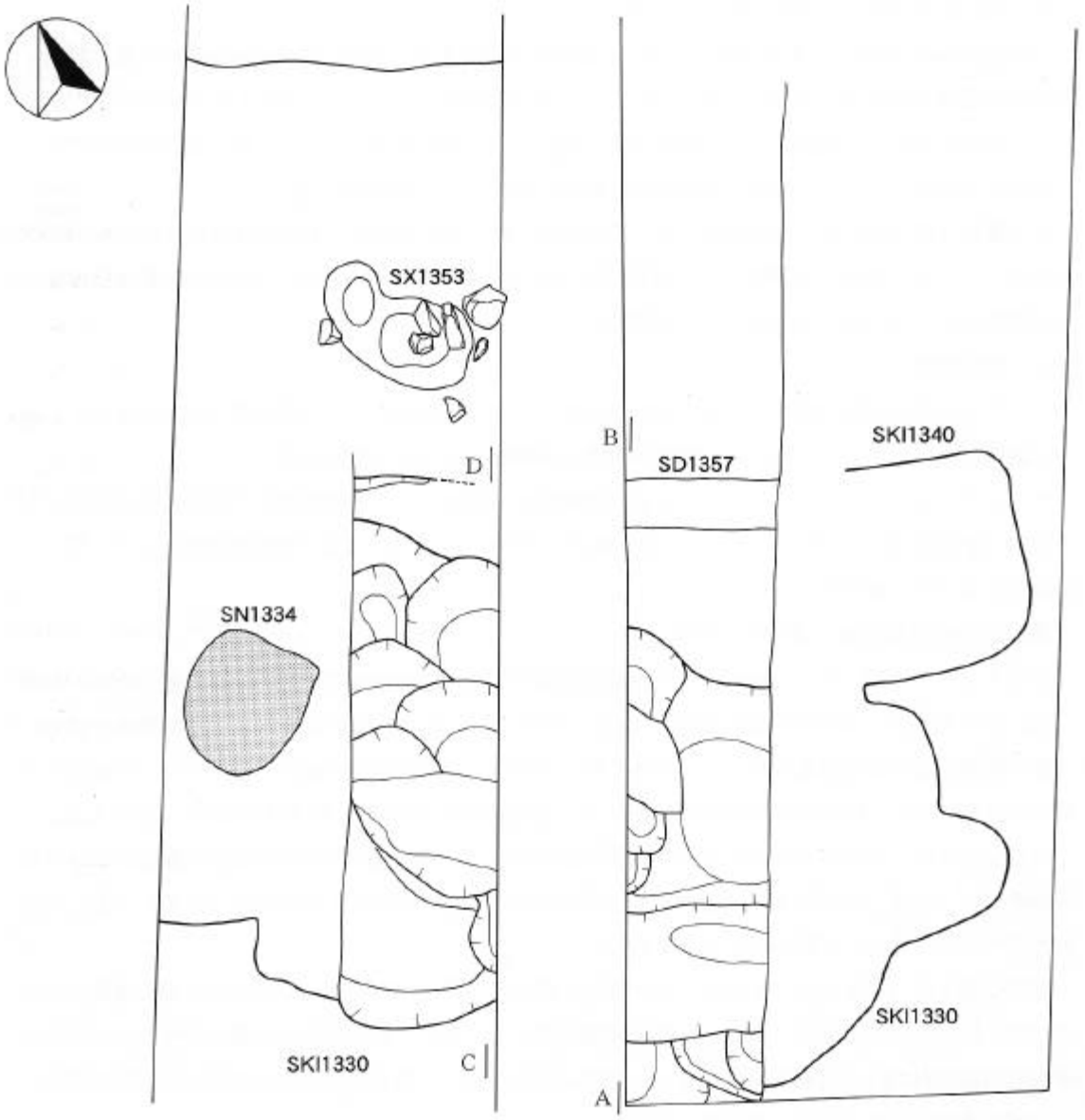
ＩトレンチはＨトレンチの東20mに設定した。調査の結果、道路南Ｉ１トレンチ（長さ28.8m）ではほぼ全面に遺構の分布が認められるものの、竪穴状遺構はＨトレンチと同様に２箇所にまとまりそうである。北のＩ２トレンチ（長さ16m）では空堀と土坑を検出した。

①ＳＫＩ1330竪穴状遺構とＳＸ1353鍛冶炉（第11～13図）

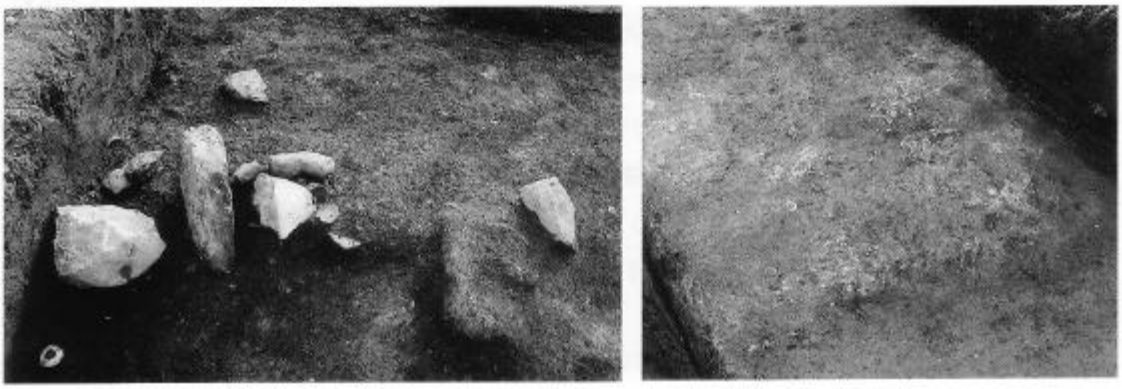
表土面での標高が43m前後に位置する遺構群である。竪穴・土坑・溝・焼土遺構と鍛冶炉が重複あるいは隣接して構築される。遺構配置のあり方は標高を含め、Ｈ１トレンチのＳＫＩ1321竪穴状遺構・ＳＸ1320鍛冶炉周辺遺構群のあり方に近似する。

ＳＫＩ1330竪穴状遺構（第11・12図）

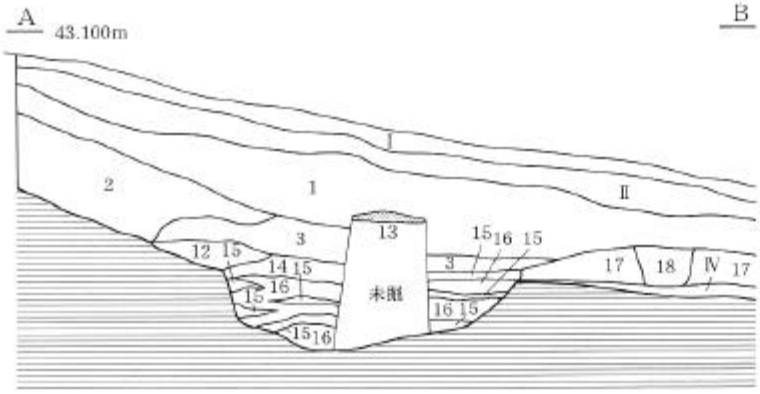
ＪＰ05を中心とする地区で検出した。ＳＫ1340・ＳＤ1357・ＳＮ1334と重複するが、ＳＮ1334がＳＫＩ1330埋没後に構築された焼土遺構であること以外、新旧関係は不明である。ＳＫＩ1330は南北

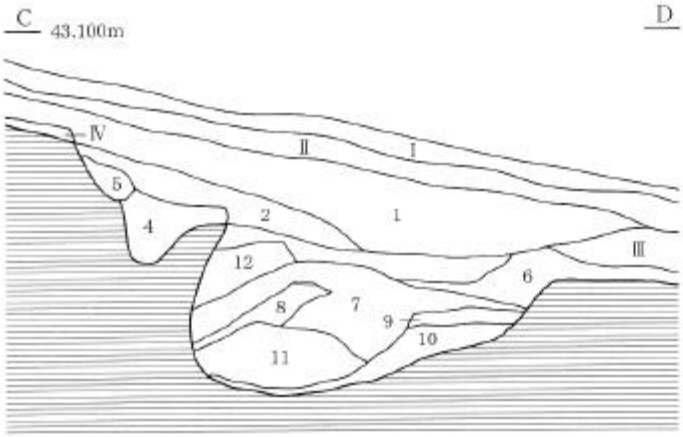


左：ＳＸ1353鍛冶炉（北→）
右：ＳＮ1334焼土遺構確認状況（北→）



第11図　ＳＫＩ1330竪穴状遺構と周辺の遺構





ＳＫＩ1330
1：黒褐色シルト質土（7.5YR3/2）地山粘土・炭化物少量のみ含む
2：黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粘土・炭化物少量のみ含む
3：黒褐色シルト質土（7.5YR3/2）地山粘土をやや多く含む
4：黒色シルト質土（10YR2/1）と黄褐色粘土（10YR5/6）が互層を呈する、人為堆積土
5：黄褐色粘質土（10YR5/6）地山粘土の二次堆積層、壁の崩落ブロックか
6：黒色シルト質土（10YR2/1）炭化物多量に含む、鉄滓も含む、ポソポソする
7：黒褐色シルト質粘土（10YR2/3）地山粘土ブロック斑状に多く含む
8：黒色シルト質土（10YR2/1）地山粘土ほとんど含まず
9：黄褐色粘質土（10YR5/8）地山粘土二次堆積層、堅く締まる、意図的に貼ったものか
10：暗褐色シルト質土（10YR3/3）７層と同質
11：黄褐色粘質土（10YR5/6）地山粘土の二次堆積を主とする、人為堆積土、ポソポソする
12：黄褐色粘質土（10YR5/8）11層と同質
13：暗赤褐色焼土（5YR3/4）竈土層
14：黒色シルト質土（10YR2/1）
15＋16：４層と同質，16層黒色シルト質土（10YR2/1）に15層黄褐色粘質土10YR5/6）が互層筋状に入る
17：にぶい黄褐色シルト質粘土（10YR4/3）地山粘土を斑状に多く含む，人為的埋め戻し土
18：黒褐色シルト質粘土（10YR2/3）ＳＤ1357堰土、炭化物・地山粘土を多く含む

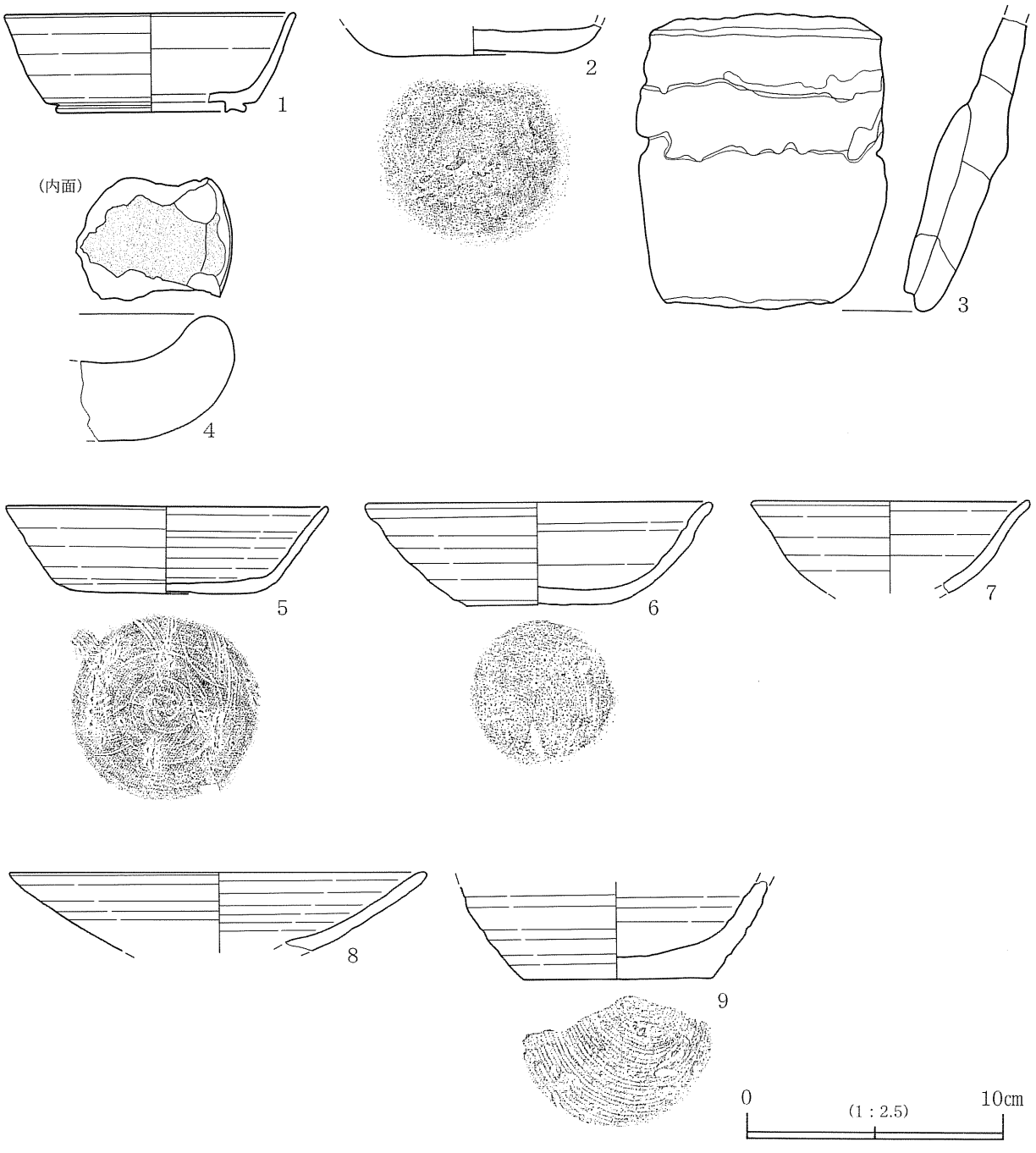
0　(1：40)　2m

上：ＳＫＩ1330-6層出土の遺物（第13図３）
炭化物層中で発見、器種不明

左：ＳＫＩ1330とその周辺遺構確認状況（北東→）
写真左手前がＳＫ1340土坑

右：ＳＫＩ1330土層（Ａ−Ｂ間）堆積状況（北東→）
中央に焼土層（13層）が分布する

第12図　ＳＫＩ1330竪穴状遺構土層断面図



第13図　ＳＫＩ1330竪穴状遺構、ＳＫ1332土坑出土遺物

番号	種　別	器　形	出土位置・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
1	須恵器	台付坏	SKI1330-1層	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り(?)→ナデ	11.3	7.4	3.9	0.65	34.5	20°
2	須恵器	坏	SKI1330-8層上面	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、被熱、焼成不良で黄橙色を呈する		7.0	(1.1)			
3	土師器	不明	SKI1330-6層	非ロクロ、粘土積み上げ痕顕著に残る、外:縦位のケズリ、出土状況写真あり						
4	土師質	坩堝	SKI1330-1層下面	内面に黒色化したガラス質の付着物(滓)あり、底部の厚さ3.1cm						
5	須恵器	坏	SK1332-6層	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→擦痕あり(意図的か否か不明)	12.5	7.3	3.4	0.58	27.2	31°
6	土師器	坏	SK1332-6層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	13.2	5.5	4.0	0.42	30.3	38°
7	土師器	坏	SK1332-6層	内外:ロクロ調整	10.6		(3.6)			
8	土師器	皿	SK1332-6層	内外:ロクロ調整、被熱	16.0		(3.1)			
9	土師器	甕	SK1332-6層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、内外面煤付着		7.3	(3.8)			

の長さ3.3m、東西は4.6m以上の規模となる。掘り込み面は第Ⅲ層中であり、小さな土坑の集合体の様をなし、ＳＫＩ1321のような平坦な床（底）面は少ない。確認面から底面までの深さは最深で1.4mとなる。堆積層を観察すると人為的に埋め戻された土で占められ、火山灰の混入は肉眼では認められなかった。

出土した遺物（第13図１～４）には、土師器・須恵器・瓦・土製品（坩堝・羽口）・鉄滓がある。破片の重量比（％）でみる土師器:須恵器:瓦３者の出土割合は42:17:41となり、瓦が比較的多く目についた。また鉄滓は8.53kg得られている。なお４の坩堝は、穴澤義功氏によると内面の付着物から銀（銀合金）もしくは銅（銅合金）を溶解した容器ではないかとの教示を得た。また３は円筒状の土製品となるが、器種は不明である。

ＳＫ1340土坑、ＳＤ1357溝跡、ＳＮ1334焼土遺構（第11図）

ＳＫ1340は遺構確認作業を通しても西側のプランは明確にできなかったが、一辺が約1.3m四方の隅丸方形を呈する土坑と考えられる。掘り下げは行っていないが、確認面上には多量の炭化物が認められる。ＳＤ1357は東西に延びる溝であり、その幅は30cm前後、深さは22cmとなる。同溝は配置としては、Ｈ１トレンチのＳＤ1341あるいはＳＤ1352のいずれかに接続していた可能性がある。ＳＮ1334はＳＫＩ1330を人為的に埋め戻した上面（１層、第Ⅲ層面相当）に構築される焼土遺構である。これは次に述べるＳＸ1353鍛冶炉の確認面と同一である。焼土面の規模は長さ80cm、幅70cm程の略円形を呈する。Ｈ１トレンチのＳＮ1318と同様に掘り込みを伴う形態ではなく、確認面上での火の使用に伴う施設と判断される。

ＳＸ1353鍛冶炉（第11図）

ＳＫＩ1330の北側に隣接して存在する。長さ95cm、幅50cm程の焼土面（酸化・還元面）上に焼けた礫・鉄滓が10数点分布する。周辺の土を篩いにかけたところ鍛造剥片が見つかり鍛冶炉と判断したものである。しかし礫・鉄滓はいずれも焼土面から浮いた形で検出されており、ＳＸ1320鍛冶炉のような明瞭な炉底は確認できなかった。遺構の確認面レベルからＳＮ1334焼土遺構やＳＫ1340土坑との関係（同時存在を含め）が類推される。

②ＳＤ1343・1344周辺の遺構（第14図）

表土面での標高が40～41m前後に位置する遺構群である。検出地区はＪＳ・ＪＴ05近辺となる。ここでは２条の並行する溝と小柱穴が点在するだけであるが、Ｈ１トレンチにおける標高40～41m前後と同様に、ＳＤ1344以北においいて地山面の観察から竪穴状遺構の存在も推測される。

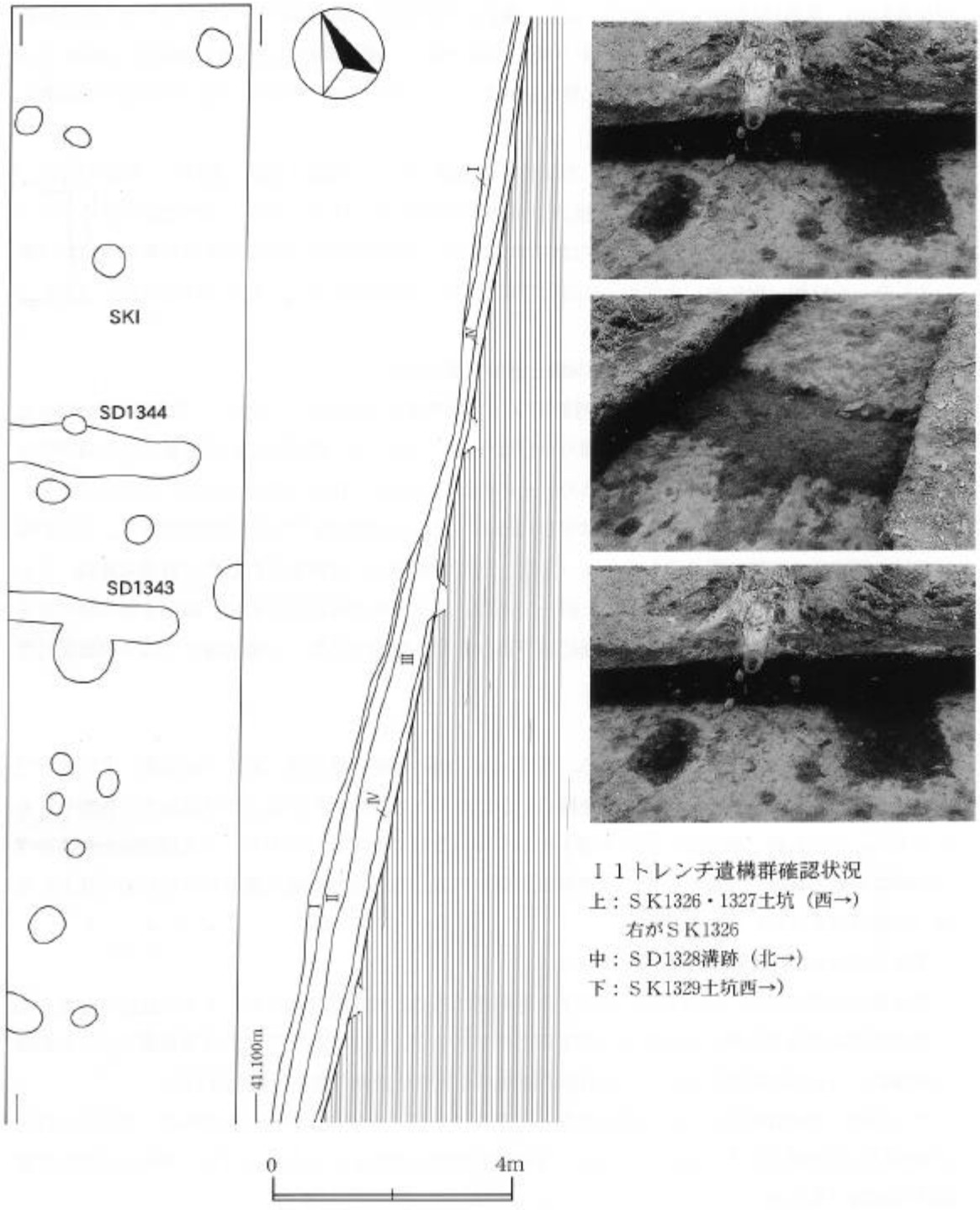
ＳＤ1343・1344溝跡は、1.4mの間隔を保って東西に延び、その幅は30cm前後である。周辺の小柱穴は径が15～30cm程となる。なおＳＤ1343・1344溝を西側に延長させるとＨ１トレンチのＳＤ1346に接続する位置にあたる。

③ＳＫＩ1330以南の遺構群

表土面での標高が44～46mに位置する遺構群である。土坑・溝が存在する。各遺構内からの遺物の出土はない。

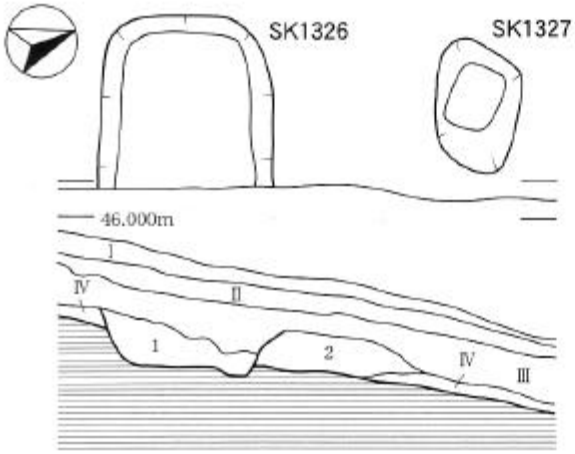
ＳＫ1326土坑（第15図上段左）

ＪＬ07・08で検出した。遺構の東端は調査区外に及ぶため、形状・規模は不明であるが、現況では南北・東西とも１mを測る。おそらく東西に長い隅丸長方形を呈すると思われる。第Ⅲ層中あるいは

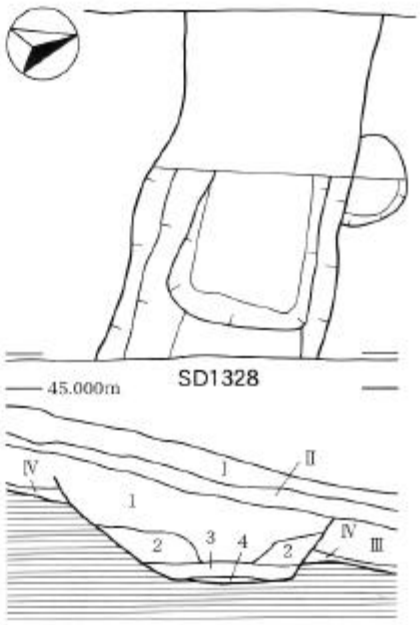


Ｉ１トレンチ遺構群確認状況
上：ＳＫ1326・1327土坑（西→）
　右がＳＫ1326
中：ＳＤ1328溝跡（北→）
下：ＳＫ1329土坑西→）

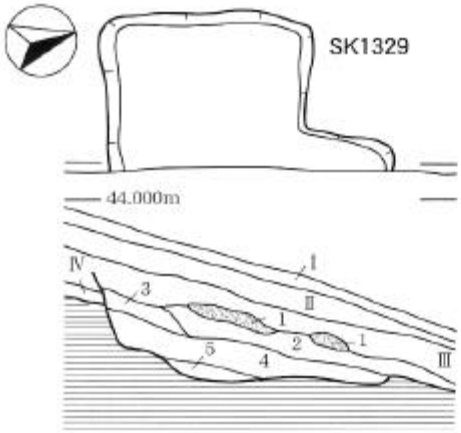
第14図　Ｉ１トレンチ北側の遺構配置図



ＳＫ1326
1：黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粘土・炭化物少量のみ含む
2：黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）地山粘土・炭化物斑状にやや多く含む

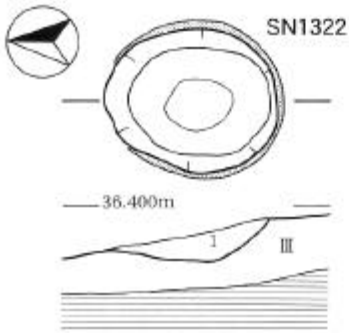


ＳＤ1328
1：黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）炭化物少量含む
2：暗褐色シルト質粘土（10YR3/3）
3：黒褐色シルト質粘土（10YR2/2）
4：暗褐色シルト質粘土（10YR3/4）
※全層的に地山粘土を斑状に多く含み、締まりもやや弱、人為堆積層か

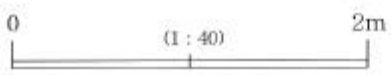


ＳＫ1329
1：暗褐色砂質シルト（10YR3/3）火山灰ブロック
2：暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土・炭化物を斑状にやや多く含む
3：黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粘土少量のみ含む
4：黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）地山粘土斑状に多く含む
5：暗褐色シルト質粘土（10YR3/4）地山粘土・炭化物を斑状に多く含む

ＳＮ1322
1：暗褐色シルト質土（7.5YR3/4）焼土を多く含む



ＳＮ1322-1層出土の炭化米



第15図　ＳＫ1326・1327・1329土坑、ＳＤ1328溝跡、ＳＮ1322焼土遺構

ＳＤ1319b
1：暗褐色シルト質粘土（10YR3/4）堅くしまる、シルト質土と地山粘土の混合土
2：黒褐色シルト質土（10YR3/2）しまり弱、地山粘土少量のみ
3：暗褐色シルト質粘土（10YR3/3）地山粘土ブッロクを斑状に多く含む
4：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土を少量含む
5：黒色シルト質土（10YR2/1）地山粘土少量のみ含む

ＳＫ1332
6:黒褐色シルト質土（10YR2/2）
7:黒褐色シルト（10YR2/3）
※人為的堆積土、層境不明瞭

h・j:整地層

第16図　Ｉ２トレンチ遺構配置図　ＳＤ1319ｂ空堀跡、ＳＫ1332土坑

第Ⅳ層上面から掘り込まれており、その深さは最深で35cmとなる。

ＳＫ1327土坑（第15図上段中）

ＪＬ07で検出した。ＳＫ1326の北約1.2mに位置する。規模は東西70cm、南北50cm程の不整方形を呈する。深さは25cmである。

ＳＫ1329土坑（第15図中段左）

ＪＯ07で検出した。確認時のプランから隅丸（長）方形の北側に張り出しをもつことから、２遺構の重複が考えられたが、精査の結果一つの遺構と判断された。現況での規模は南北1.6m、東西は0.9mとなる。第Ⅲ層中より掘り込まれ、確認面からの深さは25～40cmとなる。底面は平坦ではなく緩やかな凹凸が見られる。堆積土最上位（１層）にはブロック状の火山灰が見られることから、土坑の廃棄時期は10世紀前葉かそれ以前と推定される。

ＳＤ1328溝跡（第15図上段右）

ＪＭ・ＪＮ07で検出した。東西に延びる溝であり、確認した長さはトレンチ幅一杯の２mである。幅は1.1～1.2m程であり、第Ⅲ層中（上面か）より掘り込まれる。底面は平らな箱堀状を示し、深さは最深で55cmとなる。同溝に対応する溝は西側のＨ１トレンチには認められないが、更に西側のＢトレンチに目を移すと、ＳＤ1304に接続するものかもしれない。

④Ｉ２トレンチの遺構

ＳＤ1319ｂ空堀跡（第16図、図版３下）

Ｈ２トレンチのＳＤ1319ａに接続するとみる空堀跡である。掘り込み面は1319ａと同様に第Ⅱ層中である。確認面での幅は1.75～２mであり、断面形状は逆台形状を示す。底面は平らな箱堀状をなし、下端部の幅は0.6m、深さは最深で0.95mとなる。

掘り下げはごく一部ではあったが、土師器坏、須恵器坏・甕の破片と共に、重量1.29kgの鉄滓も出土した。

ＳＫ1332土坑（第13・16図）

ＳＤ1319ｂの北約５mに位置する。一部のみの精査であり形状・規模は不明確ながら、南北長が2.1mとなる比較的大型の（楕）円形土坑を呈するものと考えられる。掘り込み面は整地層ｊ面（第Ⅱ層下面）であり、このことから整地層の下限時期を類推することが可能となった。

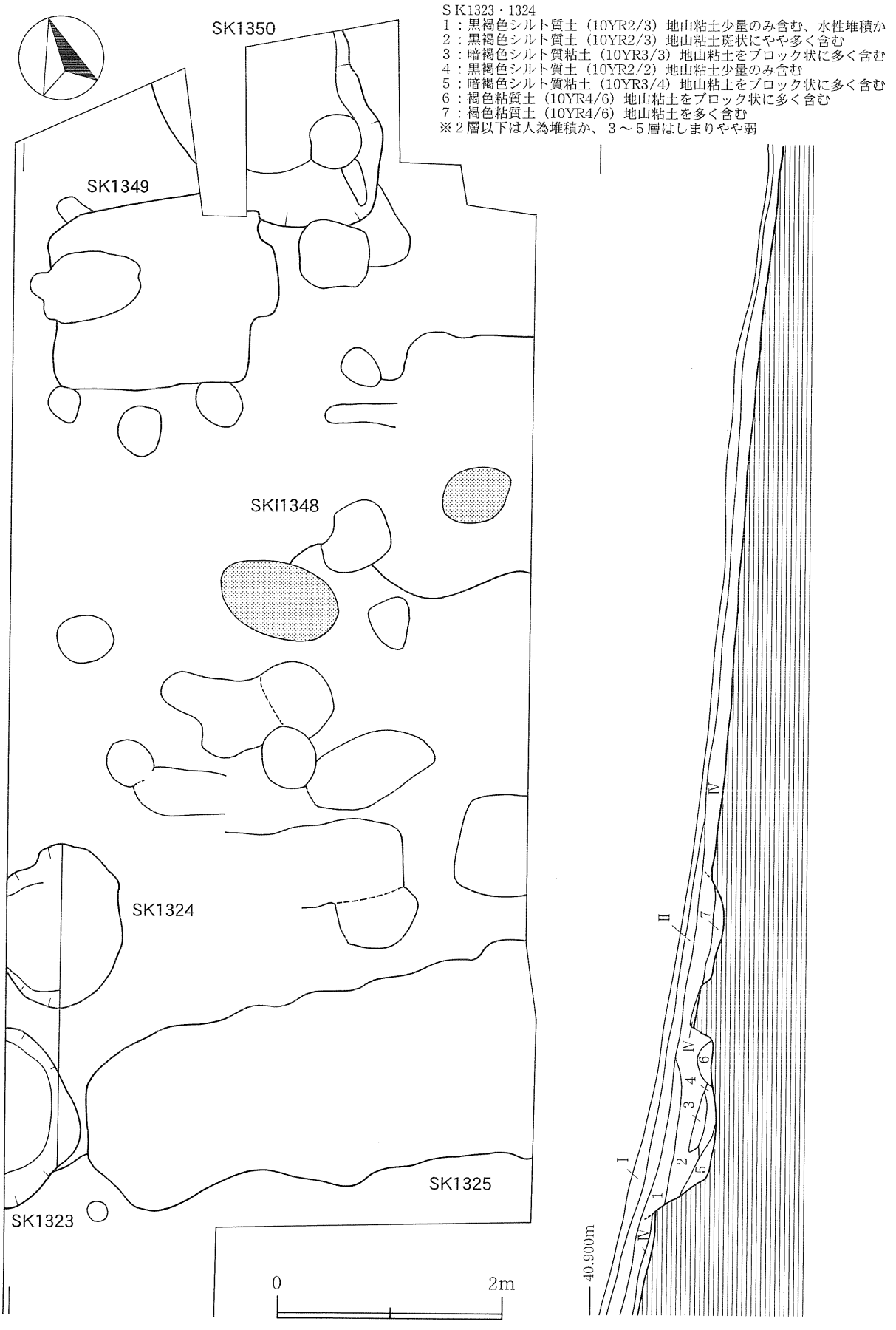
出土遺物（第13図５～９）は、須恵器坏、土師器坏・皿・甕、羽口、鉄滓がある。

（３）Ｊトレンチの遺構と遺物

ＪトレンチはＩトレンチの東22mに設定した。調査の結果、道路南Ｊ１トレンチ（長さ48.6m）ではＪＪライン以北のほぼ全面に遺構の分布が認められ、プランは明確にはできなかったが、表土面での標高が40m前後の位置に竪穴状遺構が存在していた可能性が高い。また北のＪ２トレンチ（長さ25.5m）では土坑と掘り込みを伴う焼土遺構を検出した。

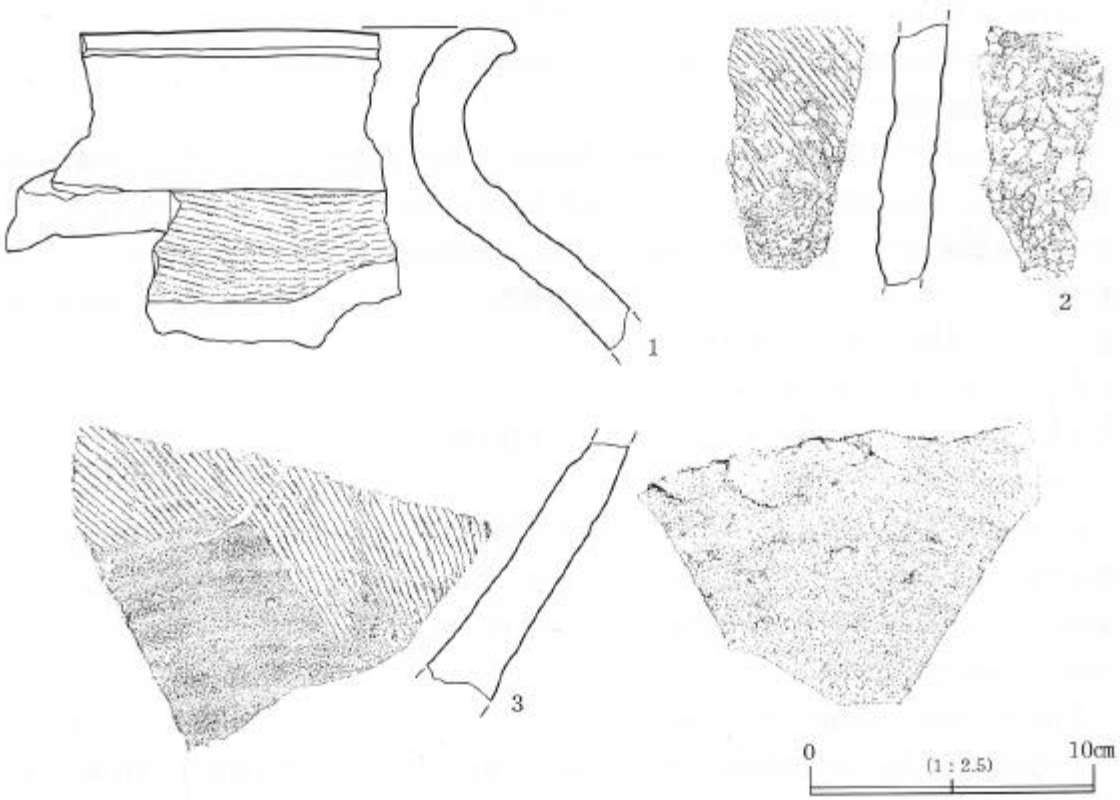
①ＪＱ～ＪＴラインの遺構群（第17図、図版４下）

Ｊ１トレンチ北部、表土面での標高が40～41m前後に位置する遺構群である。この地区では多くの土坑（ＳＫ1323・1324・1349・1350）、焼土遺構・柱穴等と地山面での硬化面の確認から竪穴住居跡あるいは竪穴状遺構の存在を予想し、当初の幅２mのトレンチを最終的に幅4.8mにまで拡幅したが、竪穴としての壁の立ち上がりなどの確認はできなかった。なお本次調査区において唯一中世の遺物を



SK1323・1324
1：黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粘土少量のみ含む、水性堆積か
2：黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粘土斑状にやや多く含む
3：暗褐色シルト質粘土（10YR3/3）地山粘土をブロック状に多く含む
4：黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粘土少量のみ含む
5：暗褐色シルト質粘土（10YR3/4）地山粘土をブロック状に多く含む
6：褐色粘質土（10YR4/6）地山粘土をブロック状に多く含む
7：褐色粘質土（10YR4/6）地山粘土を多く含む
※2層以下は人為堆積か、3～5層はしまりやや弱

第17図　Ｊ１トレンチ北側の遺構配置図



第18図　ＳＫ1325出土遺物

ＳＫ1325土坑（北→）
確認状況、中世陶器
が点在する

伴う遺構（ＳＫ1325）を検出したのは当該地点にあたる。

出土遺物はＳＫ1323で土師器坏、ＳＫ1324では土師器坏・甕、須恵器甕が見られた。

ＳＫ1325土坑（第17・18図）

ＪＱ97を中心とする地区で検出した。規模・形状はその東端が調査区外に延びるため不明確ではあるが、現況での規模は南北が1.5～２ｍ、東西長が４ｍ以上の長円状を呈する。掘り下げは行っていないが、確認面上から、須恵器系中世陶器（第18図）と土師器坏・甕、須恵器蓋・甕が出土している。第18図１～３は別個体ではあるが、いずれも暗赤褐色の色調を呈する。２は被熱で器面が痘痕状に剥落している。３外面のタタキは櫛目状を呈する。

②ＪＪ～ＪＱラインの遺構群

Ｊ１トレンチ中～南部、標高41～45ｍに位置する土坑・溝跡である。

ＳＫ1335・1336土坑（第19図上段、図版５上）

両土坑ともその東端が調査区外に延びるため形状は不明確だが、東西に長い隅丸長方形を呈していたと思われる。現況での規模はＳＫ1335で南北1.65ｍ、東西は1.3ｍ以上に、ＳＫ1336は南北が1.75ｍ、東西1.6ｍ以上となる。両者とも第Ⅲ層中より掘り込まれ、確認面からの深さはＳＫ1335で70㎝、ＳＫ1336では75㎝となる。

ＳＤ1338・1355・1356溝跡（第19図下段）

ＪＮ99で検出した。３つの溝が等高線に沿うように東西に延びる。３者は重複し、旧い順にＳＤ1356→ＳＤ1355→ＳＤ1338となる。ＳＤ1356は未掘で深さは不明だが、確認面での幅は25～55㎝となる。ＳＤ1355は幅が60～140㎝と一定せず、深さは15㎝前後である。ＳＤ1338はＳＤ1355の北側壁を共有するようにその内側に幅30㎝の溝を掘り込む。深さは20㎝前後となる。なお溝跡の北側に隣接して風倒木痕が存在し、これを切り込む土坑（ＳＫ1339）が認められる。

これらの溝は西からＢトレンチＳＤ1305－Ｈ１トレンチＳＤ1341・1352－Ｉ１トレンチＳＤ1357と接続していた可能性がある。各溝はいずれも表土面での標高が42～43ｍに位置している。

③Ｊ２トレンチの遺構

ＳＫ1354土坑（第４図）

Ｊ２トレンチ南端、ＫＣ96・97の第Ⅳ層面で検出した。立木（杉）の関係で遺構の規模は特定できなかったが、円（楕円）をなす土坑と考えられる。確認面上から土師器片が出土している。

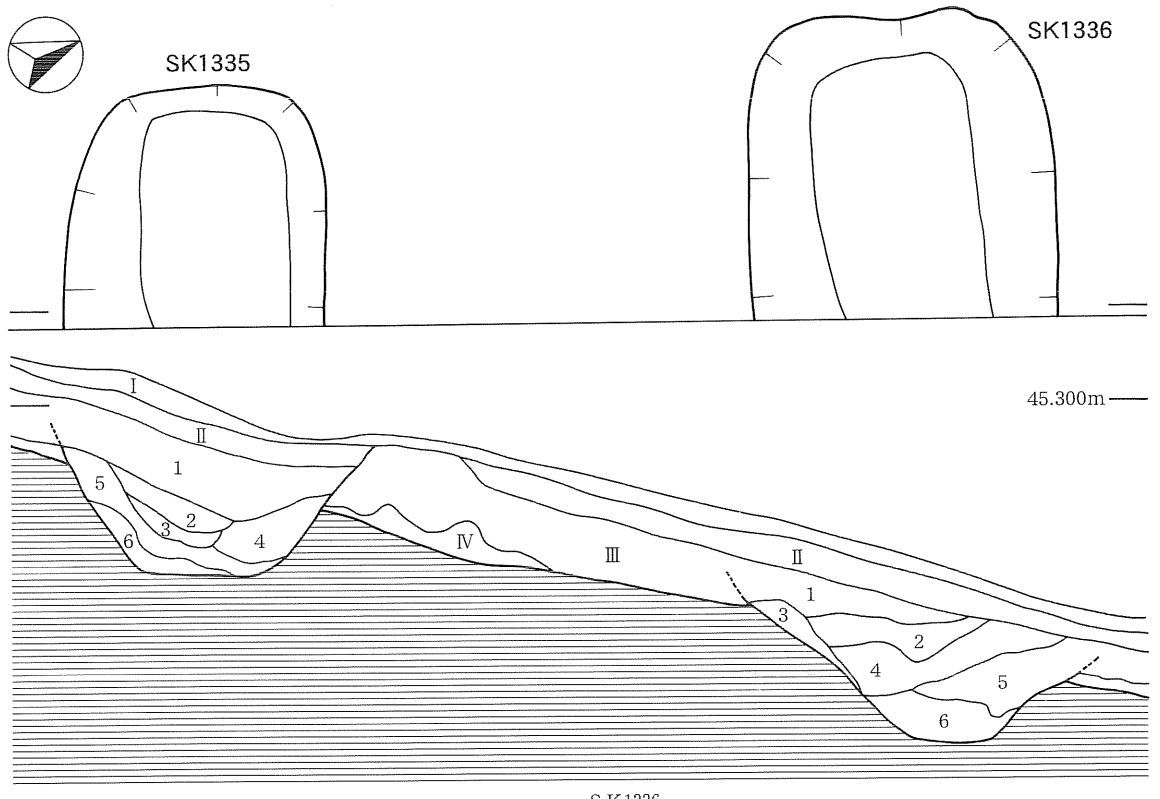
ＳＮ1322焼土遺構（第15図下段、図版５中・下）

ＫＧ・ＫＨ95の第Ⅲ層中で検出した。規模は南北100㎝、東西85㎝の略円形を呈する焼土遺構として確認した。精査の結果、緩いＵ字状の掘り込みを伴うことが判明し、確認面から底面までの深さは25㎝となる。なお底面は第Ⅴ層地山面レベルには達していない。焼土遺構ということで、堆積土を全量持ち帰り、篩いにかけたところ88粒の炭化米が抽出された。

炭化米以外の出土遺物は、土師器坏・皿類がある。

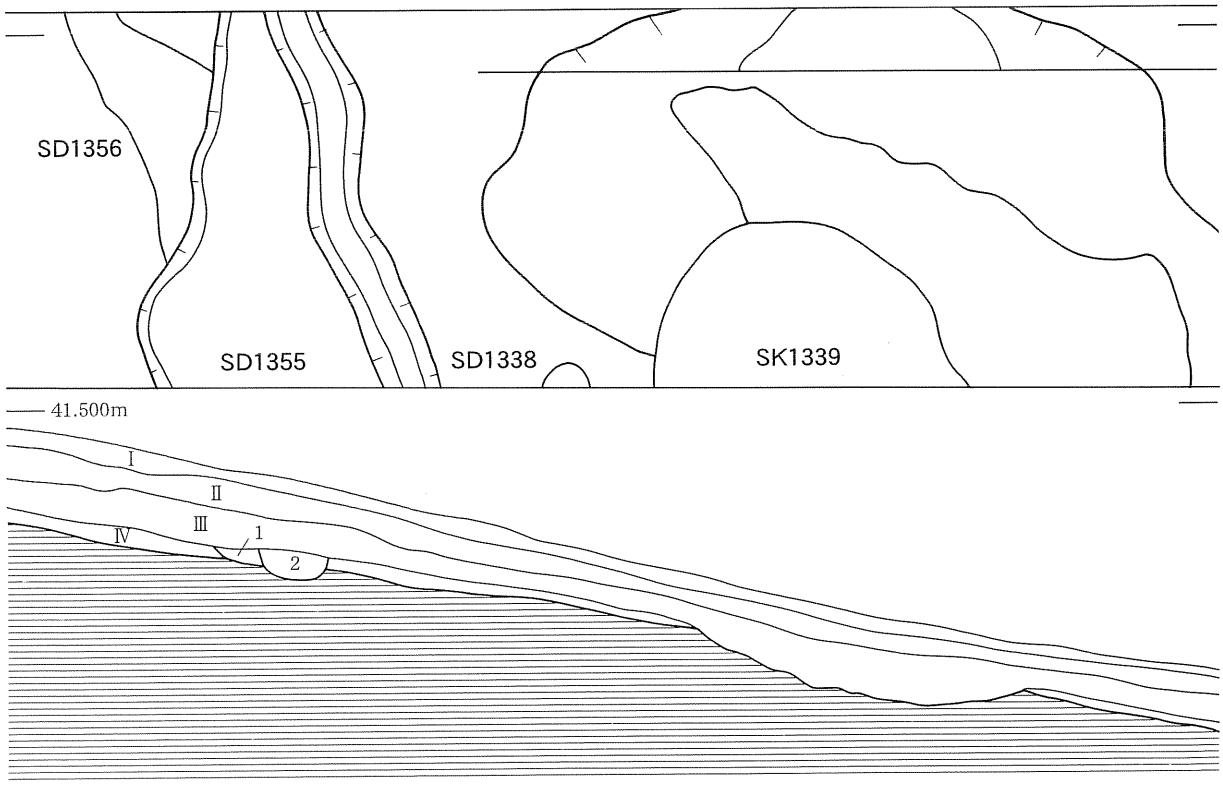
（４）段状地形と整地層（付図）

長森丘陵部北西端部では、平成元年度の第80次調査（微地形測量と測量基準点の埋設）において段状の高まりがあることを確認、図示している（『年報1989』第６図参照）。その高まり自体の本文中における記述はないものの、図を見る限りでは２段の高まりが東西方向（北西－南東）に20数ｍにわ



ＳＫ1335
1：黒褐色シルト質土（10YR2/3）
2：褐色粘質土（10YR4/4）地山粘土ブッロクを斑状に多く含む
3：黒褐色シルト質土（10YR2/2）
4：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土を斑状にやや多く含む
5：黒褐色シルト質土（10YR3/2）
6：暗褐色シルト質粘土（10YR3/3）地山粘土を斑状にやや多く含む

ＳＫ1336
1：暗褐色シルト質粘土（10YR3/3）地山粘土を斑状にやや多く含む
2：黒褐色シルト質土（10YR2/3）
3：褐色粘質土（10YR4/4）地山粘土ブッロクを斑状に多く含む
4：暗褐色シルト質粘土（10YR3/3）地山粘土を斑状にやや多く含む
5：黒褐色シルト質土（10YR2/2）
6：暗褐色シルト質土（10YR3/3）土質は４層に類似



ＳＤ1338
1：暗褐色シルト質粘土（10YR3/3）
2：暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土を斑状にやや多く含む

0　(1：40)　2m

第19図　ＳＫ1335・1336・1339土坑、ＳＤ1338・1355・1356溝跡

たり記録されている。この地形は現在でも追認でき、上下段の差は最大で1.6mに達している。

本次調査では、結果的に第80次調査時の高まりを西端として、ここから東に延びる東西方向の段状地形を確認したことになる。付図及び第27図に今回測量した段状部の地形図（網点貼付箇所）を示している。これに従うと、丘陵北端部を東西に２～３段の地形改変痕が約150mにわたり連続して観察された。基本的には自然地形（等高線）に沿う形ではあるが、明らかに切土・盛土という整地を行っており、一段の幅は４～10m程であり、段差（高さ）は40～70cmを計測する。

①Ｈ２トレンチ整地層と出土遺物（第４・20～22図、図版６）

トレンチを設定して土層を観察すると整地層の構築時期が明確となる。特に本トレンチでは二次堆積ではあるが、十和田ａ火山灰の介在から上限時期が特定される。第４図にＨ２トレンチの土層断面図を示してある。図中のａ～ｇ層が基本層序第Ⅱ層と第Ⅲ層に鋏まれる形で確認された。このうちｅ層以下は火山灰を含んだ自然（水性）堆積層であることから、おそらく火山灰降下（後）に伴う流入土と見ることができる。その上位に間層を鋏まずａ・ｃ・ｄ層が形成される。これらの堆積層は混入物のあり方から人為堆積土であり、盛土・整地層にあたる。ｃ・ｄ層には微量の火山灰を含むが、ａ層には認められず、整地層形成にあたりｃ・ｄ層期とａ層期の時間差が予想される。整地層の厚さは、25～60cm程度である。

Ｈ２トレンチ内における整地層出土遺物は、土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦・羽口・鉄滓・石器（石鏃・石匙等）がある。破片の重量比（％）からみた土師器:須恵器:瓦の出土割合は69:27:４であった。また鉄滓は3.7kgの出土量があった。

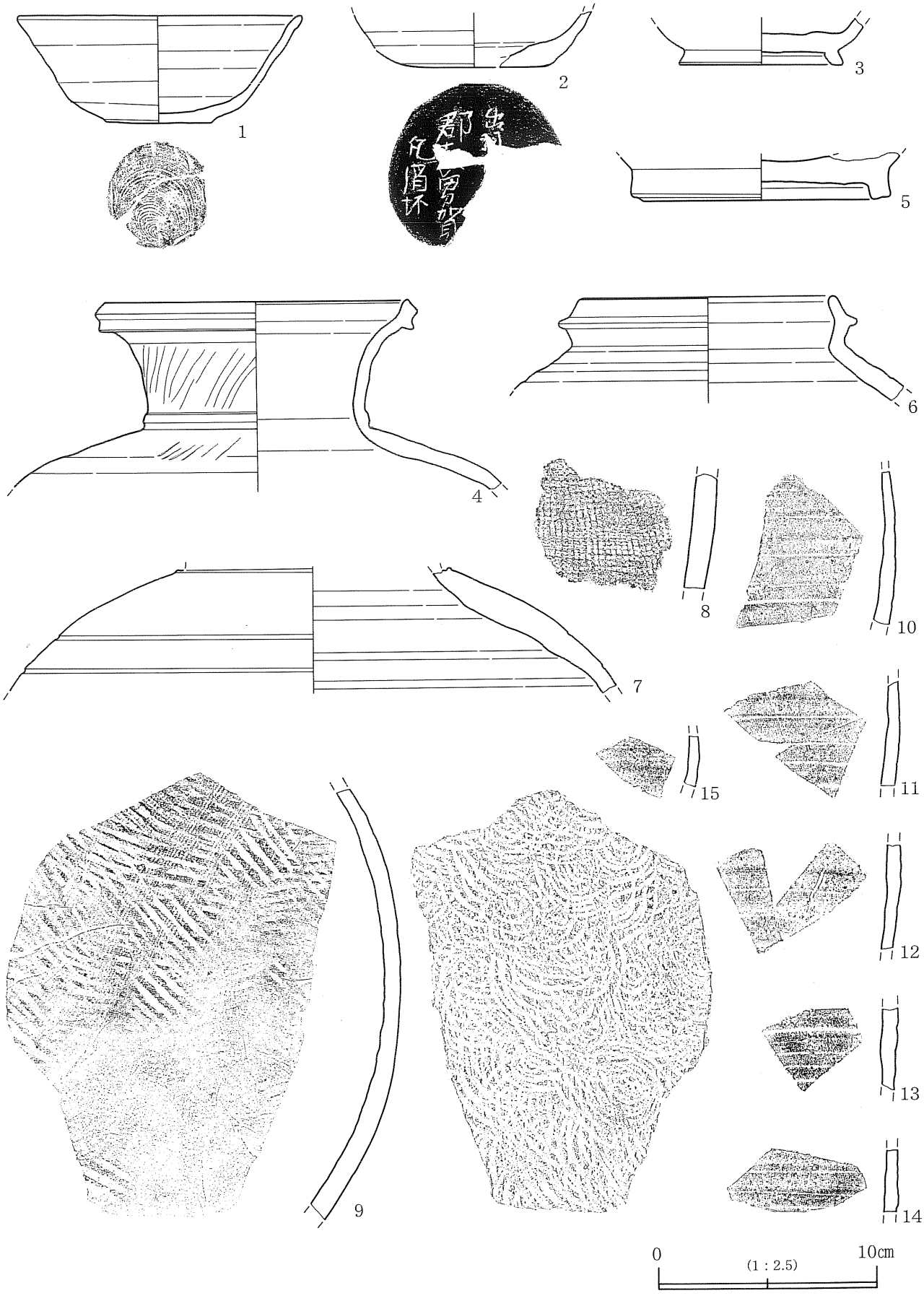
第20～22図にＨ２トレンチ整地層出土遺物を図示した。４・５・８が火山灰層直上のｄ層出土であり、他はａ層出土となる。２は須恵器坏底部に箆書（焼成前に記入）が認められる。ヘラ切り後の外底面を平滑にケズリ（のちナデか）した面に「出羽□□／郡□男賀／凡酒坏」（／は改行）と少なくとも９文字が書かれている。緑釉陶器（第22図）は手付瓶の各部の破片である。詳細は第５章を参照いただきたい。

②Ｉ２トレンチ整地層と出土遺物（第４・23・24図、図版６）

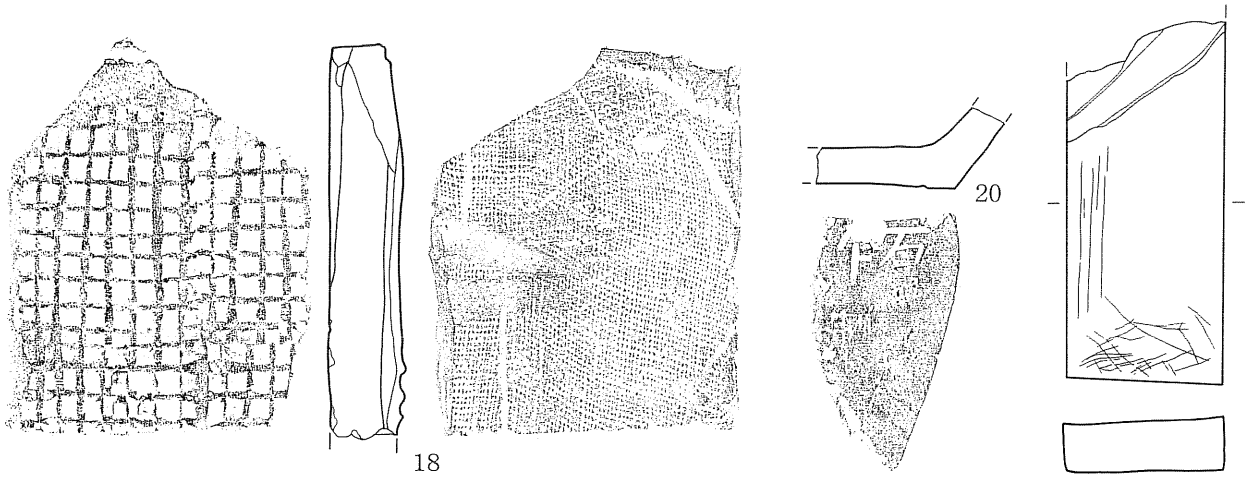
一方、東に隣接するＩ２トレンチでは整地層形成の下限時期が類推される。ここではｈ・ｉ・ｊの整地層が認められ、層厚40～105cmを有する。３層とも肉眼では火山灰混入の有無は不明だが、ここでもｉ・ｊ層期とｈ層期の２時期の時間差が考えられる。ｉ・ｊ層期はＨ２トレンチｃ・ｄ層期に、ｈ層期はａ層期にそれぞれ対比される。同トレンチでは整地層hを古代の土坑ＳＫ1332が切り込んで構築していることから、ＳＫ1332の時期を下限期とすることができる。同土坑は出土遺物から10世紀前～中葉段階とすることができ、このことからＨ２・Ｉ２トレンチでの観察地点との前提を伴うものの、十和田ａ火山灰降下・流失直後から２時期にわたるものの比較的短期間に形成されたと推測される。

またＩ２トレンチでは第Ⅲ層と整地層ｈ～ｊの層境が非常に明瞭に識別できる。このことは整地層形成にあたり、当時の表土を剥離させた上で盛土した結果と判断される。同様のことはＨ２トレンチでも見て取れるが、Ｉ２トレンチほど明確には観察できない。

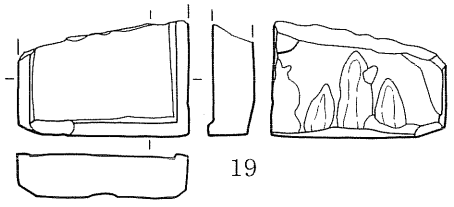
Ｉ２トレンチ内における整地層出土遺物は、主にｈ層出土であり、ｉ・ｊ層は少量である。土師器・須恵器・瓦・坩堝・羽口・紡錘車・鉄滓・砥石等があり、図示したもの（第23・24図）は全てｈ層出土となる。破片の重量比（％）からみた土師器:須恵器:瓦の出土割合は64：30：6であった。また鉄滓

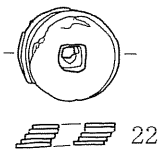


第20図　整地層出土遺物（１）　Ｈ２トレンチ（１）

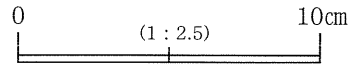


19～22：整地層上層
（撹乱層）出土



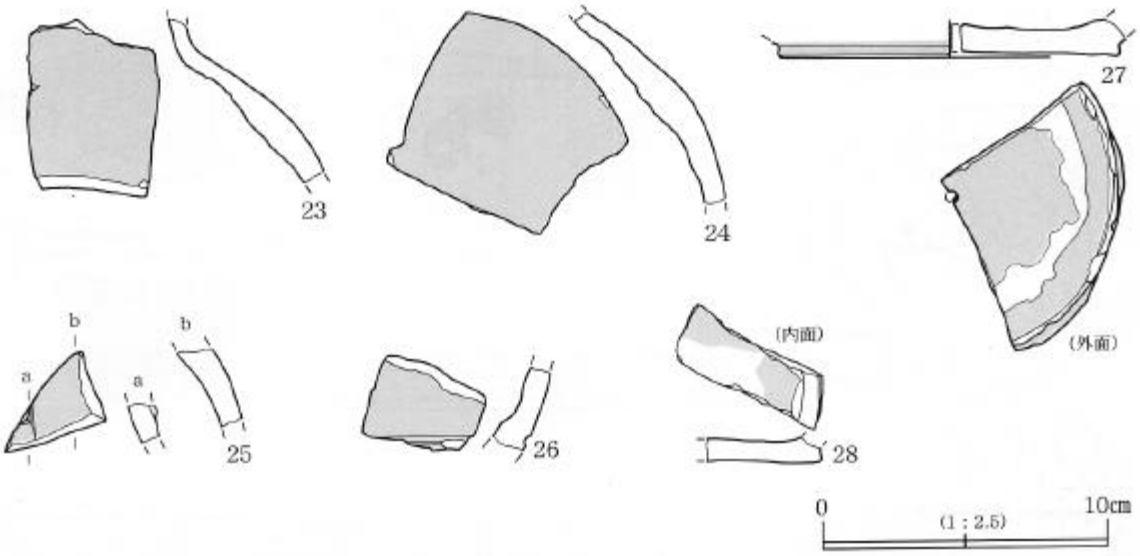


(22のみ1：2)

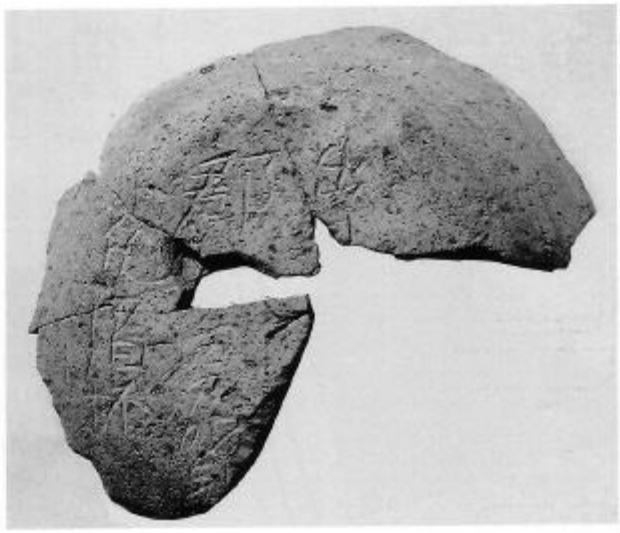


番号	種　別	器　形	出土位置・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	坏	H2トレンチ整地層-a層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	12.9	4.8	4.9	0.37	38.0	30°
2	須恵器	坏	H2トレンチ整地層-a層下	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→ケズリ→篦書(焼成前)		7.2	2.5			
3	須恵器	台付坏	H2トレンチ整地層-a層	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り		7.5	(2.2)			
4	須恵器	壺	H2トレンチ整地層-d層	内外:ロクロ調整	13.8		(8.7)			
5	須恵器	壺	H2トレンチ整地層-d層	底:砂底→ケズリ→台部接合→ナデ、意図的な打ち欠き		11.8	(2.1)			
6	須恵器	壺	H2トレンチ整地層-a層	内外:ロクロ調整	11.4		(4.8)			
7	須恵器	壺	H2トレンチ整地層-a層	内外:ロクロ調整			(5.8)			
8	須恵器	甕	H2トレンチ整地層-a層	外:格子タタキ、内:不明、器面全体(割口を含む)が摩滅している						
9	須恵器	甕	H2トレンチ整地層-a層	外:平行タタキ、内:青海波当て具、意図的な打ち欠き、内面に使用痕跡なし						
10~12	須恵器	甕	H2トレンチ整地層-a層	内外:ロクロ調整→外:ロクロを利用した平行沈線、同一個体						
13~15	須恵器	甕	H2トレンチ整地層-a層	内外:ロクロ調整→外:ロクロを利用した平行沈線、同一個体						
16	須恵器	甕	H2トレンチ整地層-a層	外:波状文						
17	瓦	平瓦	H2トレンチ整地層-a層	凸面:渦巻文叩キ、凹面:布目						
18	瓦	平瓦	H2トレンチ整地層-d層	凸面:格子叩キ、凹面:布目						
19	石製品	硯	H2トレンチa層上	中世か、重量27.9g						
20	陶器	甕	H2トレンチa層上	近世陶器、鉄釉(外面体下端～底面を除く)、底部に篦書あり			(2.7)			
21	砥石	仕上砥	H2トレンチa層上	近世以降か、重量211.6g						
22	銭貨		H2トレンチa層上	5枚溶着						

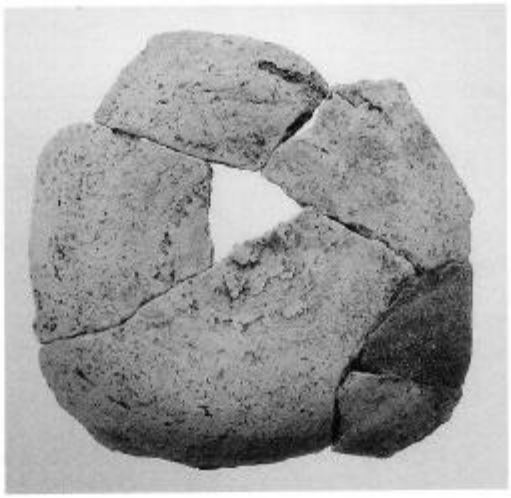
第21図　整地層出土遺物（２）　Ｈ２トレンチ（２）

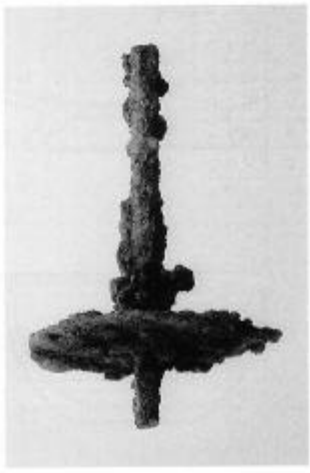


第22図　整地層出土遺物（３）　Ｈ２トレンチ（３）

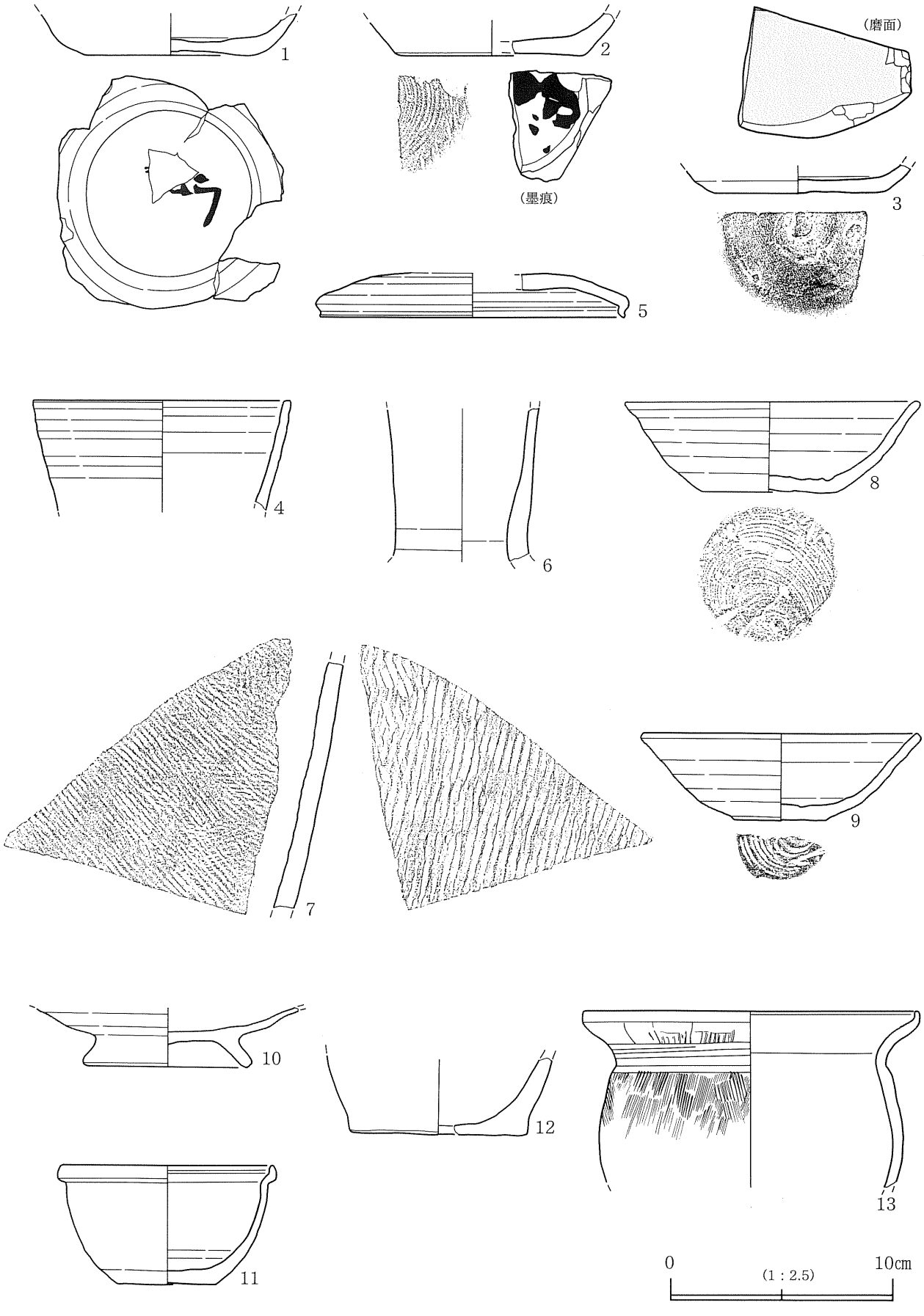


整地層（Ｈ２トレンチ）出土
「出羽」筥書須恵器坏（第20図２）

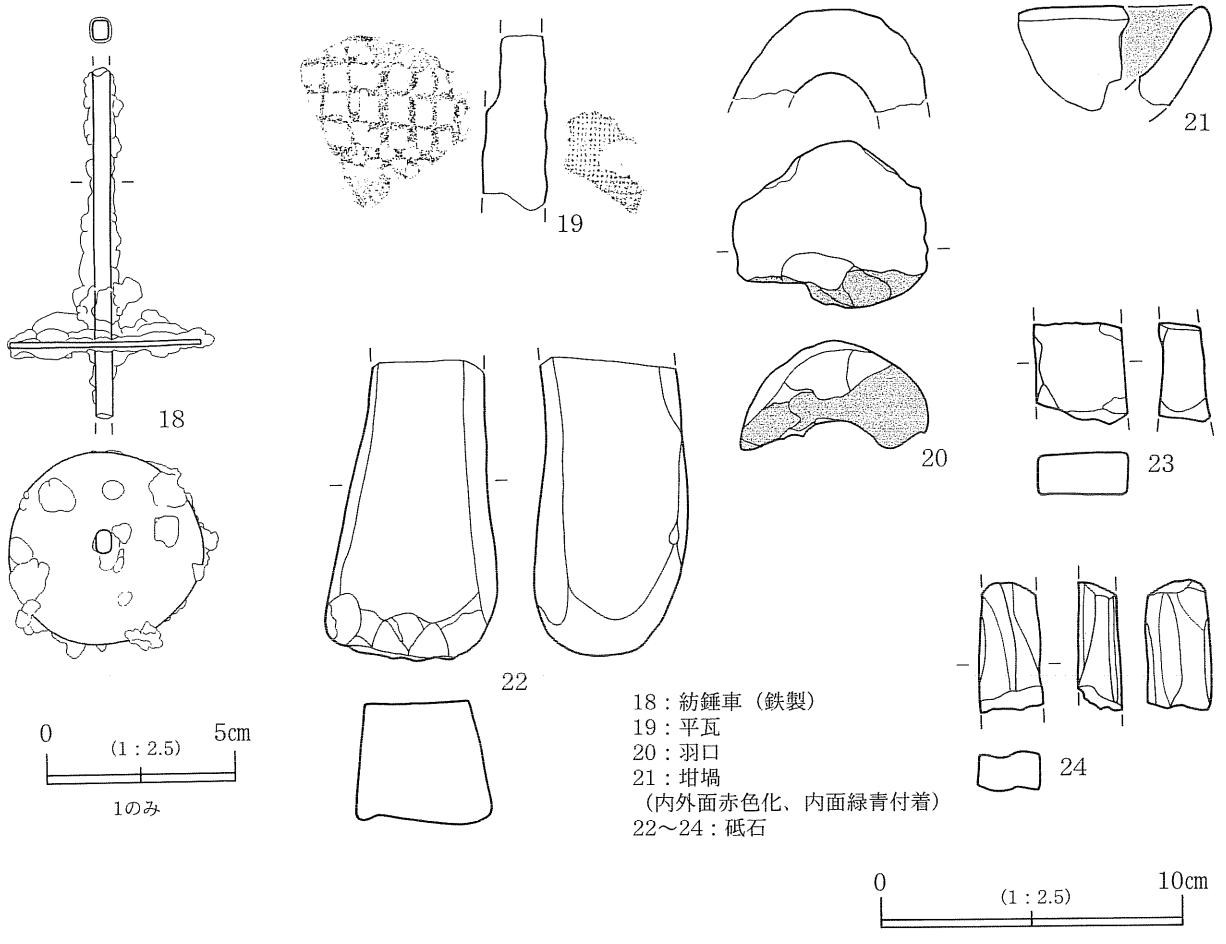




左：整地層（Ｉ２トレンチ）出土須恵器坏（第23図１）底面に墨書が見られる
右：整地層（Ｉ２トレンチ）出土鉄製紡錘車（第24図14）



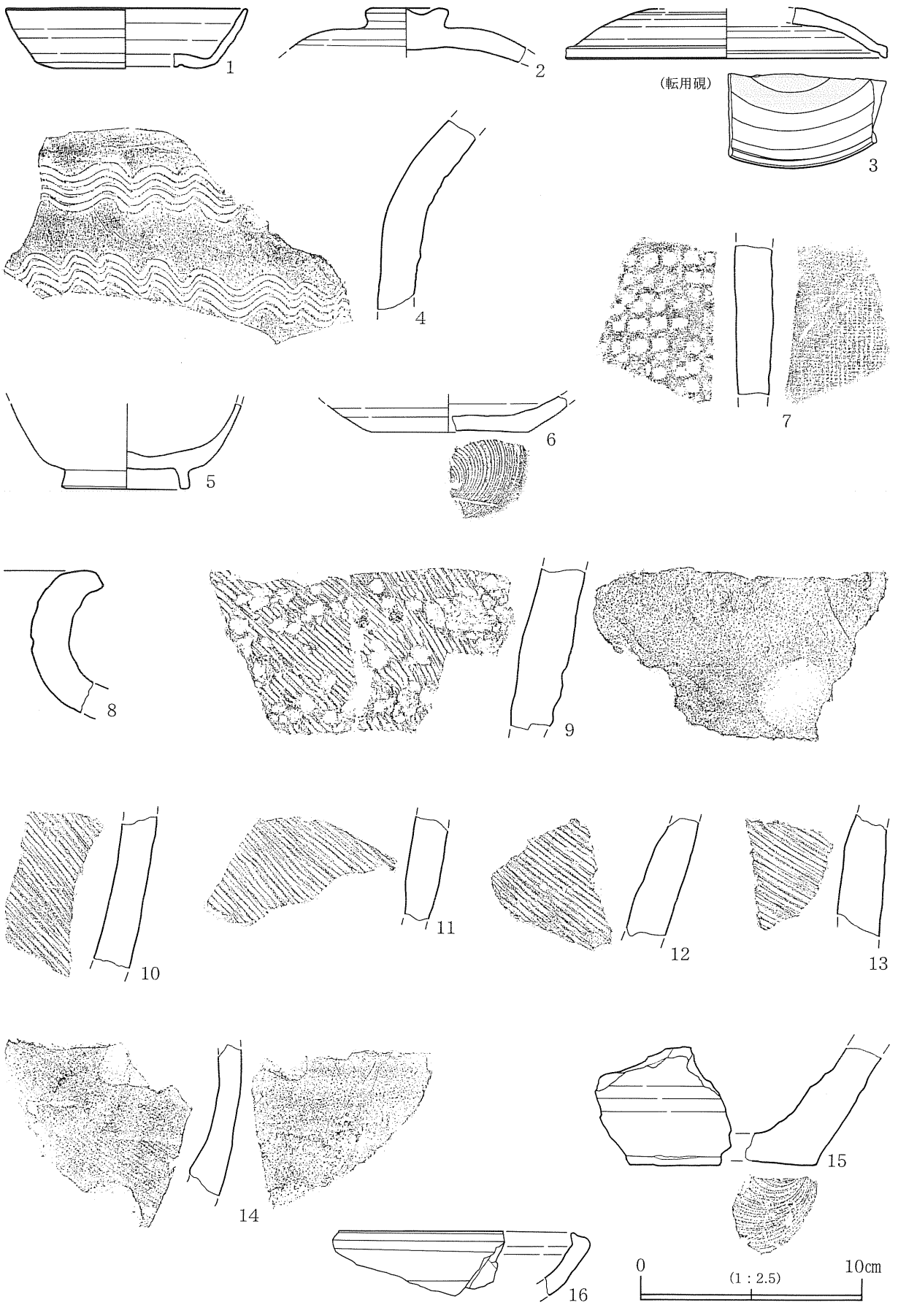
第23図　整地層出土遺物（４）　１２トレンチ（１）



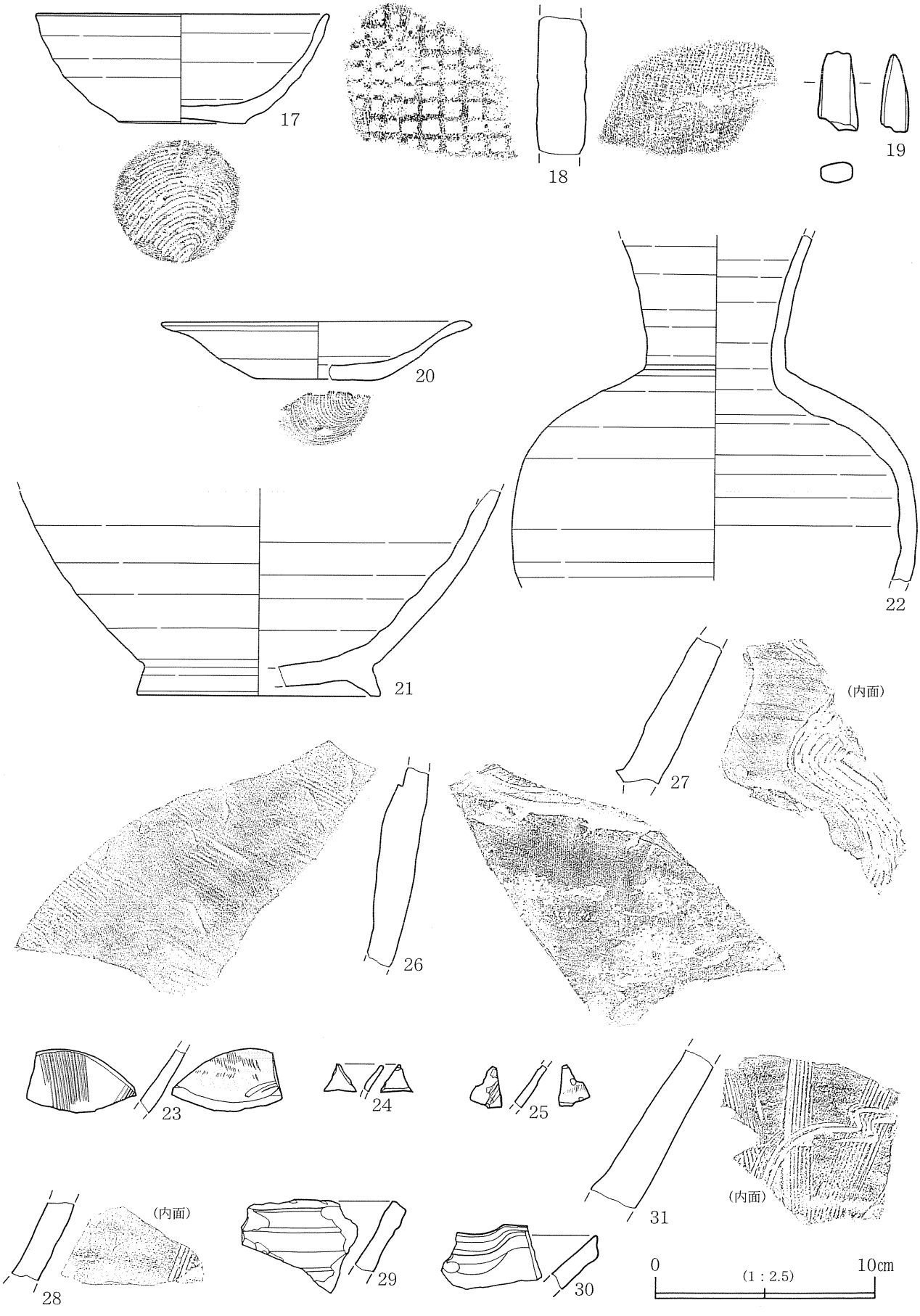
18：紡錘車（鉄製）
19：平瓦
20：羽口
21：坩堝
（内外面赤色化、内面緑青付着）
22～24：砥石

第24図　整地層出土遺物（５）　Ｉ２トレンチ（２）

番号	種　別	器　形	出土位置・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
23-1	須恵器	坏	I2トレンチ整地層-h層	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書あり		7.4	(1.9)			
2	須恵器	坏	I2トレンチ整地層-h層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書(墨痕)あり		8.4	(1.9)			
3	須恵器	坏	I2トレンチ整地層-h層	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、内面磨面あり(使用に伴うものか)		7.6	(1.2)			
4	須恵器	坏	I2トレンチ整地層-h層	内外:ロクロ調整	11.6		(4.9)			
5	須恵器	蓋	I2トレンチ整地層-h層	内外:ロクロ調整	13.6		(3.0)			
6	須恵器	長頸壺	I2トレンチ整地層-h層	内外:ロクロ調整			(6.9)			
7	須恵器	甕	I2トレンチ整地層-h層	外:平行叩キ、内:平行当て具						
8	土師器	坏	I2トレンチ整地層-h層下面	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	13.0	6.0	4.1	0.46	31.5	33°
9	土師器	坏	I2トレンチ整地層-h層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	12.2	4.0	4.0	0.33	32.8	36°
10	土師器	台付坏	I2トレンチ整地層-h層	内外:ロクロ調整、底:菊花状のケズリ		7.2	(2.7)			
11	土師器	小形甕	I2トレンチ整地層-h層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り	9.5	4.4	5.4			
12	土師器	甕	I2トレンチ整地層-h層	非ロクロ、内:ハケメ、底面ナデ		8.0	(3.5)			
13	土師器	甕	I2トレンチ整地層-h層	非ロクロ、外:ハケメ、内:横ナデ	14.8		(7.9)			
25-1	須恵器	坏	I1トレンチⅢ層	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	10.8	6.5	2.7	0.60	25.0	26°
2	須恵器	蓋	I1トレンチⅢ層	内外:ロクロ調整			(2.5)			
3	須恵器	蓋	I1トレンチⅢ層	内外:ロクロ調整、内面を転用硯に使用か	14.6		2.3			
4	須恵器	甕	Iトレンチ	外:5条1組の波状文						
5	須恵器	台付坏	I2トレンチ	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、焼成不良		5.6	(3.9)			
6	土師器	坏	Iトレンチ	内外:ロクロ調整、底部回転糸切り→箆書「一」(焼成前)		7.2	(1.6)			
26-17	土師器	坏	J1トレンチ北端	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	13.2	5.8	5.0	0.44	37.9	27°
20	土師器	Ⅲ	J2トレンチ、SN1322周辺	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	5.6	2.6	0.41	19.1	57°
21	須恵器	長頸壺	J2トレンチⅢ層中	内外:ロクロ調整		10.9	(9.4)			
22	須恵器	長頸壺	J2トレンチⅢ層中	内外:ロクロ調整			(15.7)			



第25図　遺構外出土遺物（１）　Ｉトレンチ



第26図　遺構外出土遺物（２）　Ｊ～Ｌトレンチ

は9.3kgの出土量があった。なお第24図21の坩堝は、穴澤義功氏によると色調・内面の付着物から銅（銅合金）を溶解した容器ではないかとの教示を得た。

（５）遺構外出土遺物（第25・26図）

①Ｈ・Ｉ・Ｊトレンチ出土遺物

当該３トレンチでは整地層を除く遺構外の出土遺物は少ない。しかし縄文・古代・中世・近現代と幅広い時期の遺物が認められる。

Ｉ２トレンチ第Ⅱ層中より須恵器系中世陶器（８～16）がややまとまって出土している。

Ｊ２トレンチではＳＮ1322周辺の第Ⅲ層中より青磁が３片出土した。23～25は同安窯系青磁の椀あるいは皿である。24は小片ながら口縁が残る。23は外面に櫛目文が、内面には劃花文が見られる。また26～28は同トレンチⅡ層出土の須恵器系中世陶器擂鉢・甕である。

②Ｋ・Ｌトレンチ出土遺物遺物

Ｋトレンチ（長さ66m）・Ｌトレンチ（長さ54.2m）は、前述のように表土（第Ｉ層）除去のみ調査である。それでも第Ｉ層中より下記の遺物が出土している。

Ｋトレンチ：土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦、石鏃、須恵器系中世陶器（擂鉢）

Ｌトレンチ：土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦、石器・石核、須恵器系中世陶器（擂鉢）、寛永通宝

29・30はＫトレンチＩ層、31はＬトレンチＩ層出土の擂鉢である。

第３節　小結

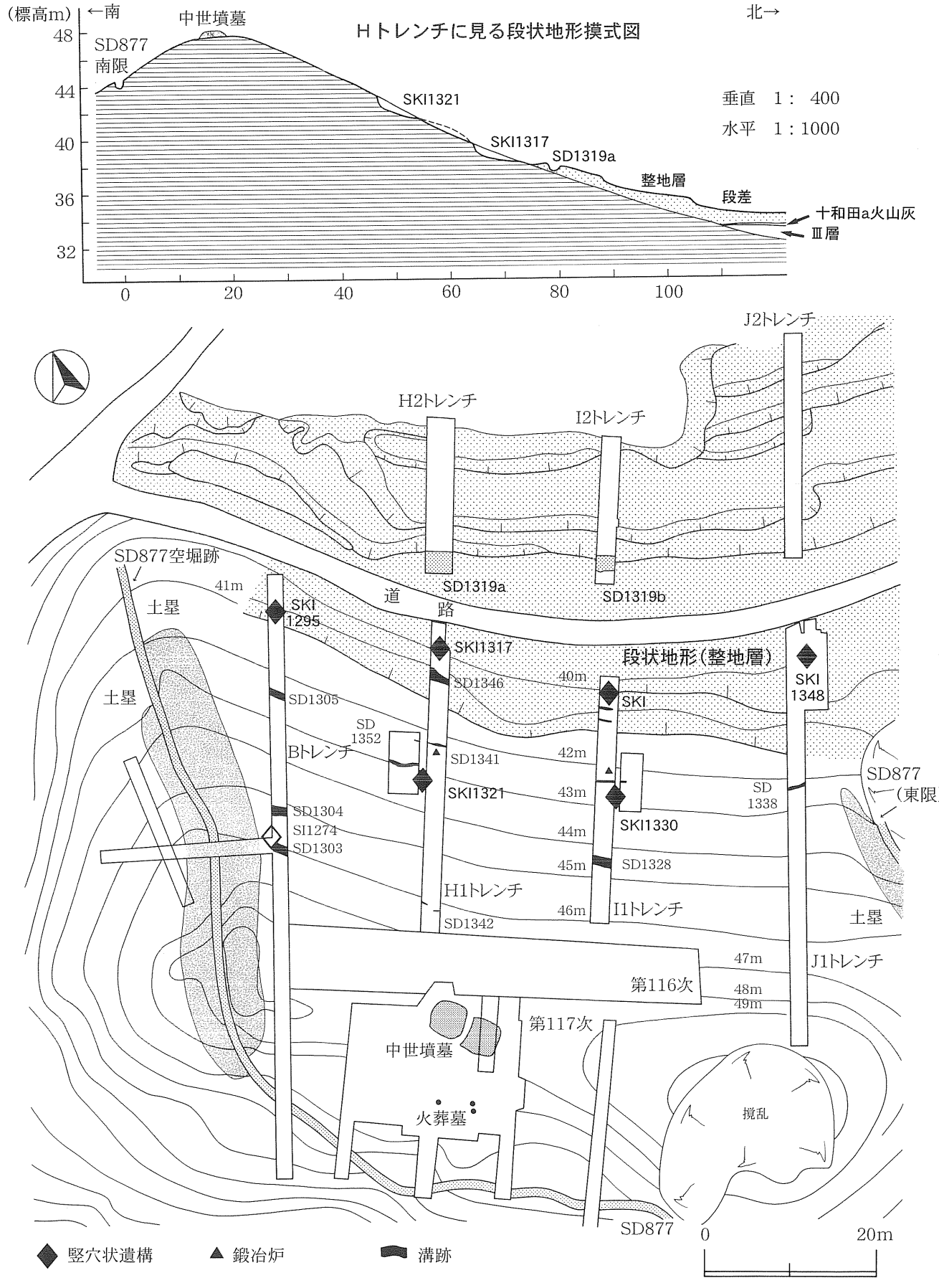
１　古代

①段状地形の確認と遺構の配置

第119次調査における最大の成果は段状地形の確認にある。雑木伐採後の現況地形観察とその後のトレンチ調査により、少なくともＨ２・Ｉ２トレンチ部では十和田ａ火山灰降下・流入期を上限とし、10世紀中葉を下限とする時期に段状地形・整地層が形成されたことを明白にした。Ｉ２トレンチでの整地層を切り込むＳＫ1332土坑の構築時期を見れば、火山灰降下後それほど時間を措くことなく整地層が生み出されたことになる。しかしこの地点での段状部、表土面での標高が40m未満には整地層形成後の施設の構築は認められなかった。

一方、もう一段上位の標高40～41mライン上では、昨年度Ｂトレンチを含め４地点（トレンチ）で竪穴状の遺構を確認あるいは想定することができる。すなわち西側から、ＢトレンチＳＫＩ1295、Ｈ１トレンチＳＫＩ1317、Ｉ１トレンチＳＤ1344北側の竪穴、Ｊ１トレンチＳＫＩ1348である。ただＨ１～Ｊ１北端の３地点では明確な遺構としてのプラン（壁の立ち上がり等）は見つけられなかったものの、平坦化された硬化面を検出しており、竪穴あるいは面的な広がりを伴う施設の存在が充分に類推可能である。この段の遺構は、いずれも切土された下面に構築される（第27図参照）。

更に上位には段状地形は認められないものの、標高42～43mライン上に竪穴状遺構と鍛冶炉が隣接する形で構築される。Ｈ１トレンチのＳＫＩ1321とＳＸ1320鍛冶炉が、Ｉ１トレンチのＳＫＩ1330とＳＸ1353鍛冶炉である。同標高ライン上には未掘箇所にもごく僅かな凹状部が観察される（Ｈ１－Ｉ１間とＩ１－Ｊ１間）。これが竪穴の凹みとすれば、等高線に沿うように複数（少なくとも４基か）



第27図　段状地形模式図と空堀・溝・竪穴の平面配置

の竪穴が配置されることになり、結果的に下段（標高40～41mライン）と同じような景観をもつ施設構成を呈していたと考えられる。このライン上の施設は、鍛冶炉と隣接する竪穴状遺構の存在から、鍛冶あるいは鍛冶に関連をもつ工房施設と見ておきたい。その時期はＳＫＩ1321での堆積土、特に火山灰の介在（1321Ｄ）を考慮すると、当初の構築段階（1321Ａ)は９世紀代に遡る可能性が高い。いずれにしろＨ２・Ｉ２近辺での整地層形成以前に本ライン上の施設は機能を果たしていたことになる。

また東西の等高線に沿う施設として溝跡の存在にも着目する必要がある。標高の高い地点から見ると、46mラインではＢトレンチのＳＤ1303とＨ１トレンチのＳＤ1342が、45mラインではＢトレンチのＳＤ1304とＩ１トレンチのＳＤ1328が、42～43mラインではＢトレンチのＳＤ1305とＨ１トレンチのＳＤ1341あるいはＳＤ1352とＩ１トレンチのＳＤ1357とＪ１トレンチのＳＤ1338・1355が、41mラインにはＨ１トレンチのＳＤ1346とＩ１トレンチのＳＤ1343かＳＤ1344がそれぞれ接続していた可能性が高い。この４トレンチ間で見れば４条の溝が等高線に沿うように掘り込まれていたことになる。こられの同時存在や鍛冶関連施設・段状地形との関係は今後の検証課題として残る。

②出土遺物

ａ）「出羽」箆書土器の発見

Ｈ２トレンチ整地層より「出羽□□／郡□男賀／凡酒坏」の箆書須恵器坏が出土した。４片の接合個体であり、同調査トレンチ内には他破片は見つけることができなかった。三行の文字の解釈については、顧問である新野直吉氏の見解が寄せられているので紹介する。

「古代出羽国（秋田）郡のそれなりの地位にある地方官人で男賀（鹿）氏を氏の称とする人の酒坏（盃）を初めから予定して造られた土器」

なお「凡」については、「おおし」「おおよそ【凡・大凡】」等の用例から「大」として次の文字と合わせ「大酒坏」と現況では解しておきたい。

墨書・箆書の類による「出羽」の文字は、秋田・山形県域を含めて管見の限りでは初出と思われる。ただ漆紙文書では秋田城跡に確認例がある。第９号文書（第54次調査出土）には、紙継ぎ目裏書として「出羽国出羽郡井上□□□□天平六年・・・」と記されている。(註１)一方、「酒坏」の文字は墨書資料として宮城県古川市名生館官衙遺跡で出土例がある。(註２)ＳＩ1152住居跡出土の土師器坏の体部横位に「酒坏」と記される（底部外面にも「上」の墨書あり）。竪穴・遺物の時期については、報告書では言及されていないが、９世紀前半代ではないかと考えられる。

ｂ）緑釉陶器

払田柵跡では過去に３個体の緑釉陶器が出土している。①第２次調査では外郭北門に伴う盛土整地層内より緑釉小椀の底部片が出土している。井上氏によると京都洛西窯の製品と推定され、年代は９世紀後半にあたる。②第47次調査の遺構外第１層中（政庁域西前殿脇）から緑釉皿が１個体出土している。これは『払田柵跡調査事務所年報1982』と『払田柵跡Ｉ　政庁跡』に図が掲載されている。③未報告資料だが第75次調査において遺構外（表土層内）より緑釉深椀の口縁部小破片が出土している。これは東濃窯大原２号窯式（10世紀前半）にあたる。第75次調査区は長森丘陵中央部北端（政庁外北西部）であり、今次調査区と同じ北側緩斜面部となる。

秋田県内での緑釉陶器出土遺跡は、払田柵跡を含め僅か４遺跡にすぎない。秋田市秋田城跡（椀８点、(註３)皿１点）、能代市上の山Ⅱ遺跡（椀３点、近江系）、千畑町内村遺跡（椀・皿４点）だけとなる。

ｃ）須恵器壺Ｇ出土

その形態が一輪挿しの花瓶に類似する須恵器壺Ｇは、高台はなく底部に回転糸切り痕跡を残す特徴をもつ。今回、Ｈ１トレンチ・ＳＫＩ1321竪穴状遺構内より胴部～底部にかけての破片ではあるが、１個体（第７図２）出土した。出土層位はＳＫＩ1321Ｄの３層であり、十和田ａ火山灰層（11層）より上位に位置する。口縁～肩部にかけて欠損しているので、形態は不明確ではあるが、佐野五十三氏の分類に従えば(註４)、中太型あるいは太型Ⅱ類のいずれかと思われる。

壺Ｇは静岡県内２箇所の窯で焼成され、出土地は静岡県内と平城京・長岡京・平安京に集中するもののようで、その時期は中太型・太型Ⅱ類で８世紀後半から９世紀初頭に限られる。用途は、堅魚の煮汁運搬容器説、兵士の携帯用水筒説、仏具としての花瓶説などが示されている。東北での出土例は、秋田城跡で２個体、払田柵跡では過去に３個体が出土している。陸奥では宮城県築館町伊治城跡（１個体）と多賀城市市川橋遺跡（６個体以上）等で見つかっており、全て城柵あるいはこれに関連する遺跡からの出土となる(註５)。

２　中世

本次調査区において、明確に中世と判断される遺構は、Ｊ１トレンチ・ＳＫ1325土坑のみである。未掘ではあるが、確認面上に須恵器系中世陶器（第18図）が10数点散在していた。

一方、Ｈ１・２トレンチのＳＤ1319ａｂはその掘り込み面・断面形状から、昨年度確認されたＳＤ877空堀跡の北側を構成する堀ではないかと想定している。しかし出土遺物は古代の土師器・須恵器と鉄滓のみであり、中世期の遺物は一切ない。しかもＳＤ877と接続する位置での調査例はなく、今後の追検証が必要となる。なおＳＤ1319はＪトレンチ内では未確認であり、Ｊ１・Ｊ２間の現道下に埋もれていると思われる。いずれにしろ、長森丘陵西部には土塁・空堀で画された空間内に墳墓・火葬墓などの墓域が形成されていたことが、昨年度の調査で明らかとなった。その時期は墳墓出土の陶器から13世紀代と明記した。本年度の調査で推定区画（空堀）外にあたるが、Ｊ２トレンチ内より同安窯系の青磁が出土し、13世紀代を後押しする資料が増えたことになる。ちなみに同安窯系青磁の出土は払田柵跡では初見例となる。

その範囲は未だ明確ではないにしろ、遅くとも13世紀代には土塁・空堀構築という一大事業が遂行される。しかし今年度確認された段状地形を観察する限りでは、古代の段状施設を大きく改変することなく、逆に言えば古代の段状地形をうまく利用する形で土塁・空堀が構築されたと言えるであろう。

註

１　秋田城跡調査事務所『秋田城出土文字資料集Ⅱ』1992（平成４年）

２　古川市教育委員会『名生館官衙遺跡Ⅹ』1990（平成２年）

３　秋田城跡出土の陶器類の器種・点数は『秋田市史第７巻　古代史料編』2001（平成13年）に基づく

４　佐野五十三「壺Ｇの成立と伝播」『静岡県考古学研究』31　1999（平成11年）

５　宮城県内の壺Ｇ出土遺跡は上記２遺跡の他に、多賀城市新田遺跡（第３次調査区、１個体）、宮崎町東山遺跡（２個体）があり、やはり城柵官衙に関連する遺跡である。宮城県多賀城跡調査研究所『東山遺跡Ⅵ』1992（平　成４年）ｐ61

図版１　第119次

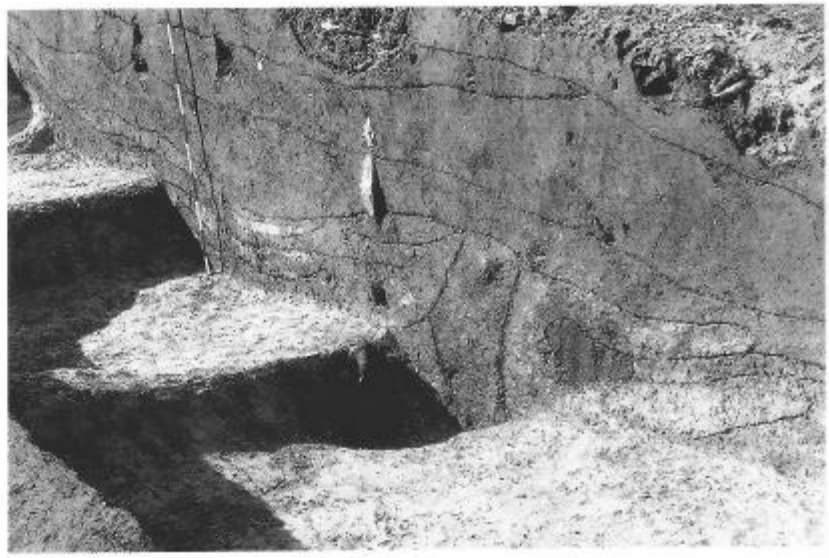
調査前の状況（東→）
丘陵部上部平坦面（左）から北側緩斜面部（Ｈ１～Ｊ１トレンチ）周辺

段状地形現況（北→）
丘陵部西端部の状況後のＨ２・Ｉ２トレンチ部に相当する位置

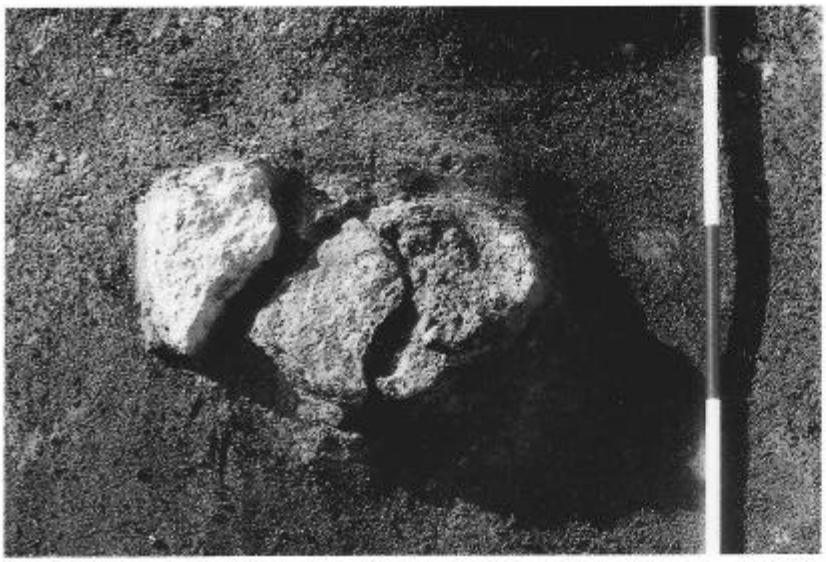
段状地形現況（東→）
階段状に南（左）から北に向かって下る

ＳＫＩ1321竪穴状遺構
確認状況　　（北東→）

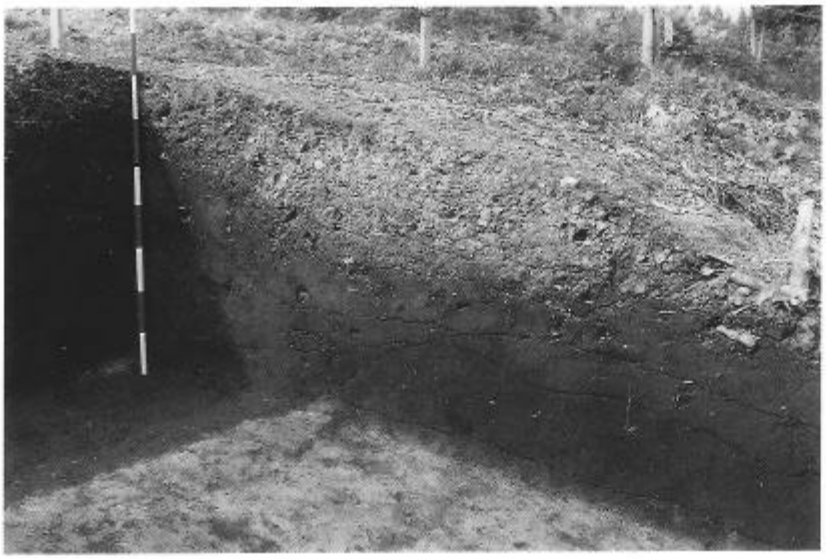
同上　完掘状況と
土層断面　　（北東→）



同上　土層断面
（北東→）
断面Ｃ－Ｄ間の状況



ＳＸ1320鍛冶炉
（真上→）
左:礫、右:椀形滓



ＳＤ1319ａ空堀跡
土層断面（北東→）
古代の整地層を切り
込んで構築される

ＳＤ1319ｂ空堀跡
（西→）

ＳＫ1333土坑２層面
での遺物出土状況
（東→）

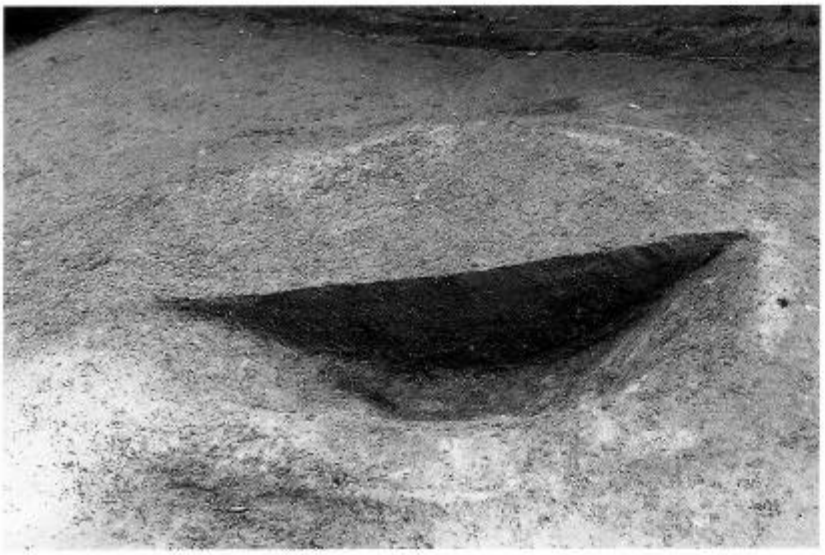
同上　遺構確認状況
３～５層面　（東→）

Ｊ１トレンチ北端部
ＳＫＩ1348周辺の状況
（北→）

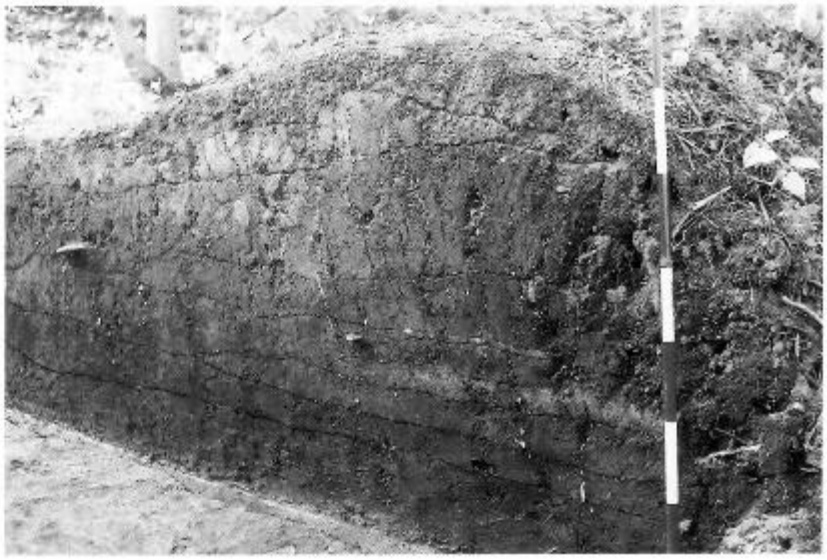
図版５　第119次

ＳＫ1355・1356土坑
（北→）
手前がＳＫ1356

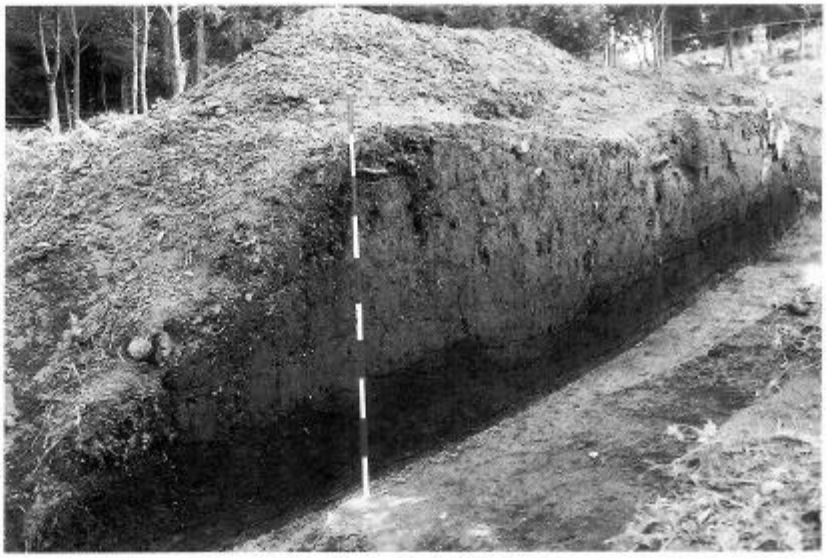
ＳＮ1322焼土遺構
確認状況（北→）



同上　土層断面
（西→）
焼土が帯状・馬蹄形
に巡る（北側が開く）



整地層（Ｈ２北端部）
土層堆積状況（西→）



整地層（Ｉ２トレンチ）
土層堆積状況（北東→）

整地層下部（Ｈ２北端部）における火山灰堆積状況　（南西→）
火山灰（f層）がブロック状に分布

第４章　第120次調査の概要

第１節　調査経過

第120次調査は、先行する第119次と並行する形で進めており、９月28日から11月２日までを調査期間としている。以下では調査日誌よりその経過を抜粋する。掘り下げの開始日は９月28日であるが、前章で報告のように事前の雑木間伐・除去は第119次調査区と一緒に５～６月にかけて実施している。

調査区は、昨年度まで隣接地で掘立柱建物跡が検出されていることを踏まえ、トレンチの幅を６ｍとし、等高線に直交させるように南北方向を意識した設定を立案した。

粗掘り初日から、縄文土器・石器が出土した。10月１日、表土層ながら遺物が比較的多く出土。灰釉陶器や玦状耳飾も見つかっている。２日には青磁や緑釉陶器も発見した。相変わらず遺物は多い。３日、掘り下げ続行中、未だ明確な遺構の確認はない。17日、ようやく遺構が見えてきた。竪穴・土坑・溝がありそう。

10月23日、遺構の平面（確認面プラン）実測に入る。25日には実測終了し、残りは埋め戻しのみとなった。30日より埋め戻しを始め、31日に終了した。その後、機材の撤収を行い、11月２日、本年度の野外調査を全て完了させた。

第２節　検出遺構と遺物

１　調査区の立地と基本層序

第120次調査区は政庁の西約150ｍに位置し、長森丘陵地西部では最も高位となる平坦地から北側にやや下降する位置にあたる。昨年度調査した第118次調査区の北側に隣接し、標高は南端部で49ｍ、北端部では43ｍとなる。現況は杉林・雑木林である。

調査はトレンチによる調査法を採用するが、その主眼は一昨年・昨年度に検出した掘立柱建物跡・板塀跡の北側の様相を探ることにある。このことから調査区の位置やトレンチ幅を考慮した。掘立柱建物跡の検出を想定した上でトレンチを６ｍ幅とすることにした。実際には立木や基本土層観察の関係上、４箇所に細分される形となり、Ａ１区からＡ４区の名称を付して調査を実施した。４細分区は第28図左を参照されたい。

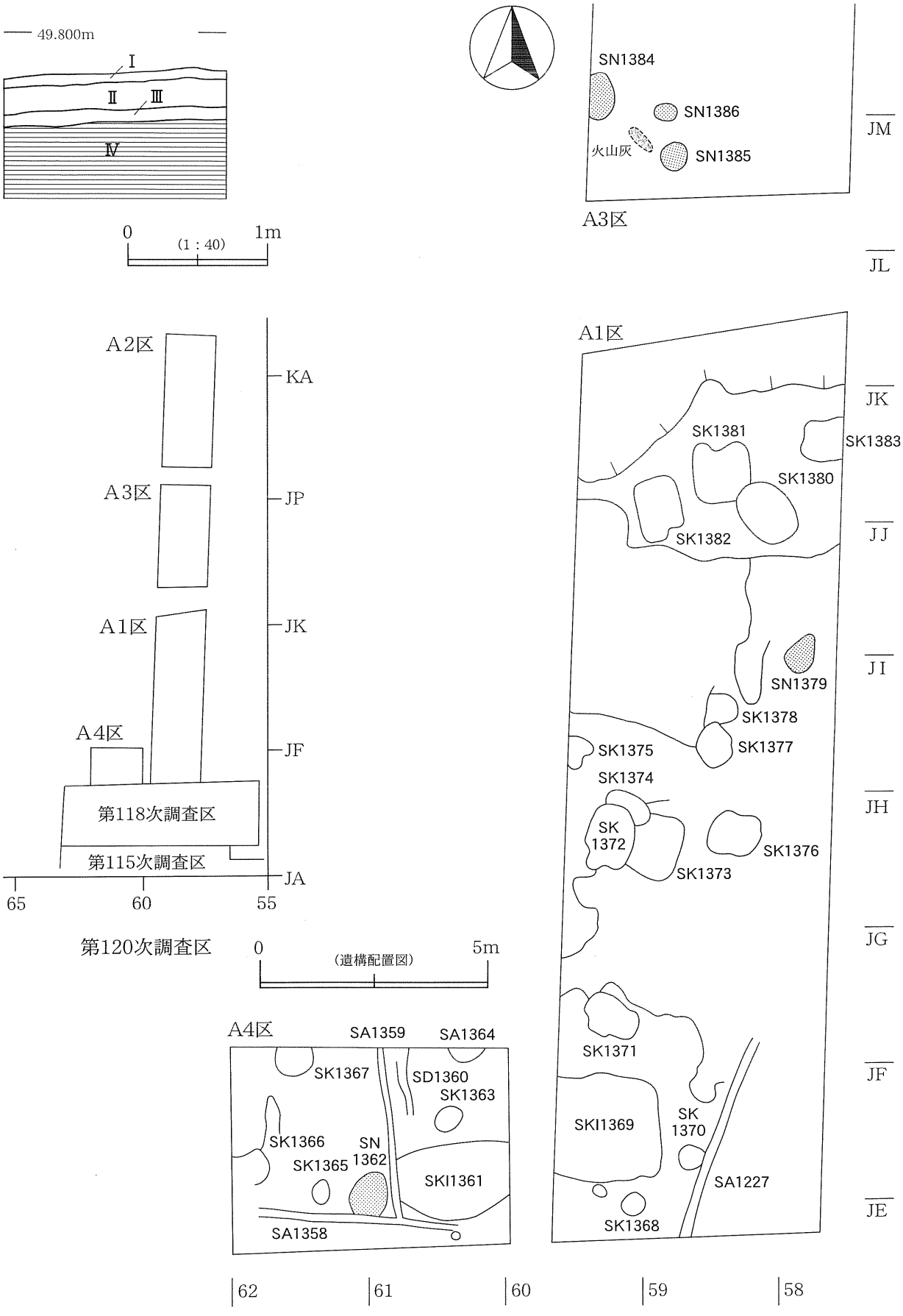
調査区の基本層序は、Ａ－１区南西隅、ＪＤ59グリッドで観察した。

第Ⅰ層：暗褐色土（7.5YR3/4）表土、層厚10cm前後

第Ⅱ層：暗褐色土（7.5YR3/3）層厚20cm前後

第Ⅲ層：暗褐色土（10YR3/4）地山漸移層、層厚10cm前後

第Ⅳ層：褐色粘質土（10YR4/4～4/6）地山



第28図　第120次調査区の基本層序と遺構配置図

2　検出遺構と遺物（第28図右）

本調査は、前項で紹介のように掘立柱建物跡・板塀跡北側の様相を探る（短期計画）ことにあった。結果的に頭書の目的は達せられ（小結参照）、調査期間の関係もあり、Ａ１・４区では第Ⅲ層面までの遺構確認に留め、Ａ２・３区では第Ⅱ層中までの粗掘りで本年度の調査を終了している。遺構確認及び精査については、来年度の新規調査の一部に含める形で行う予定を立てている。

従って検出遺構は、各区での掘り下げ面までに確認された遺構となる。調査の結果、竪穴状遺構２基、土坑19基、焼土遺構５基、板塀跡あるいは溝跡４条を検出した。遺構検出面はＡ１・４区では第Ⅱ層下面～第Ⅲ層上面にかけてであり、Ａ３区の焼土遺構は第Ⅱ層上～中面である。後者Ａ３区の焼土遺構と同一面では火山灰ブロックの堆積が認められた。

これら遺構の構築時期は、確認面での出土遺物の検討から土坑１基（ＳＫ1381）が縄文時代であり、他は古代と判断される。遺構外では中世期の遺物も散見されるが、現段階では明確に該期の遺構は未確認である。以下では、検出遺構と遺物の概要を報告する。なお今次調査で新規に付した遺構番号は、1358～1386までである。

（１）古代

ＳＡ1227板塀跡

Ａ１区で南西－北東方向に延びる溝跡を検出した。一昨年第115次と昨年第118次で確認していたＳＡ1227板塀跡の北側延長部に位置することが明確となったため、遺構番号は第115次で付したＳＡ1227板塀跡を使用する。本年度確認した分は長さ4.7m、幅は25cm前後である。既調査分を含めた総長は40.7mに達する。

ＳＡ1227は、第115・118次で検出していたＳＢ1219・1222掘立柱建物の東側桁から東に2.5m前後の距離を保って南北に延びる板塀跡である。ただ本年度調査した箇所では北東側にその向きを変える。

ＳＡ1358～1360板塀・溝跡

Ａ４区で東西あるいは南北に延びる溝跡を３条検出した。ＳＡ1358は東西に延び、その幅15～20cmであり、確認した長さは4.4mになる。ＳＡ1359はＳＡ1358を起点として北に延びる溝跡である。幅は20cm前後で、その北側は調査区外に及ぶが確認した長さは3.8mとなる。ＳＡ1360はＳＡ1359と並行するように南北に延びる溝である。幅25cmとなり、現況で確認している長さは1.5mである。

ＳＫＩ1361・1369竪穴状遺構

ＳＫＩ1361はＡ４区南東部で検出した。ＳＡ1359に西端を切られ、東端は調査区外に及ぶ。しかしＡ１区にまでは延びないことから、その規模は南北が1.7m、東西が2.5m以上3.3m未満の楕円状を呈する遺構と考えられる。

ＳＫＩ1369はＡ１区南西部で検出した。ＳＡ1227・1358・1359に挟まれる位置となる。規模は南北が2.25m、東西は西端が調査区外に及ぶもののＡ４区にまでは延びず2.4m以上3.2m未満の隅丸方形を呈すると考えられる。確認面上から土師器小片が出土している。

Ａ１・４区の土坑・焼土遺構

本区では土坑18基、焼土遺構２基を確認している。土坑は一辺あるいは径が0.5～0.6m程の円形あるいは楕円形を示すもの（ＳＫ1363・1365・1368・1370など）と1.2～1.5mの隅丸方形あるいは楕円

形を示すもの（SK1371・1372・1376・1380・1382など）に大別が可能である。焼土遺構は一辺が１ｍ前後の楕円状を示す。ＳＮ1362はＳＡ1358に南端を切られる。

（２）縄文

該期の遺構はＡ１区北側、第Ⅲ層上面で検出したＳＫ1381土坑１基のみである。土坑南東隅を古代の土坑であるＳＫ1380に切り込まれる。規模は南北1.3m、東西が1.25mとなる隅丸方形状を呈する。確認面上から縄文土器が10数点出土している（第29図１～７）。胎土に繊維を含むことと、文様構成から前期に属すると考えられる。

（３）遺構外出土遺物（第30～33図）

遺構外の出土遺物は、古代の須恵器・土師器・瓦・青磁・灰釉陶器・緑釉陶器・土錘・砥石が、縄文時代では土器・石器・石製品がある。出土層序はいずれも第Ⅰ～Ⅱ層にかけてである。

①須恵器・土師器・瓦

１～14が須恵器、15～24が土師器、25・26は瓦である。１～６が須恵器坏類となり、１・４は意図的な体部周縁の打ち欠きが認められる。２の外面底部には判読不能だが墨書が見られる。７は蓋、８～14は甕・壺類となる。11の内面には墨の付着が認められる。土師器は22・23が甕であり、図示した他は全て坏類となる。20は体部外面に墨書が、21の内面底部には焼成後の刻書がそれぞれ認められる。22・23は両面が黒色処理された甕となる。25・26は凸面正格子叩き、凹面布目の瓦である。

②青磁・灰釉陶器・緑釉陶器

27は越州窯系青磁の坏か皿となる。小破片ではあるが口縁部の形状から５輪花となる可能性が高い。28～30は灰釉陶器、31～34は緑釉陶器である。詳細は第５章を参照いただきたい。

③土錘・砥石

35・36は細管状の土錘、37・38は砥石である。37は極小だが完形品であり、本来提砥石等として使用していたものが折れるなどして細分化されたものを再加工した製品と考えられる。38は図示面１面のみを砥面としている。

④縄文時代の遺物

該期の遺物はＡ１区北側・ＳＫ1381周辺で縄文土器が点在する。ここに図示したものは石製品２点である。第29図８は玦状耳飾であり、９は中央に径15㎜程の穿孔を伴う環状石製品、あるいは環状を呈する玦状耳飾の残欠かもしれない。

第３節　小結

１　検出遺構について

第120次は過去２年の第115・118次を含め、政庁西方における官衙域のあり方を探る目的（中期計画）で調査を続けている。過去２次の調査では、９世紀後半～10世紀前・中葉という比較的限られた時期において、掘立柱建物が区画施設となるであろう板塀を伴い設置されたことが判明している。一方、政庁東方域では払田柵の創建直前・創建から終末にかけて７時期（Ａ期直前・Ａ期～Ｆ期）の変遷を

辿りながら官衙域を形成している。この東方官衙域でＥ期と呼称している時期（10世紀前葉～中葉）の遺構群は、南北・東西に延びる板塀と、これに画された内部に整然と建物が並ぶ（『払田柵跡調査事務所年報2000』第48図参照）。このような配置は、第115・118次で検出した遺構群のあり方に近似する。建物配置・規模・検出数等に差異はあるもののＥ期にのみ、東方官衙域に配された施設と同形態を有する施設を対峙する西方域平坦面にも構築させていたと考えられるようになってきた。

今次調査は短期計画で見れば、第115・118次で検出した南北棟の建物２棟（各２時期）とこれらの東側で並行して南北に延びる板塀跡の北側の様相を探ることにした。結果的には、第120次では新規の建物は発見されず、東西の板塀跡（ＳＡ1358）確認に伴い、政庁から外郭西門に至る道路・通路の存在が想定されるに至った。すなわちＳＡ1358板塀跡は、南北棟建物のうちの北側建物であるＳＢ1222北面梁間と並行する位置関係で検出された。また第118次調査においてＳＢ1222北東隅柱掘形の北東１ｍを起点として、ここから東に延びるＳＡ1313板塀跡も確認していた。ＳＡ1313とＳＡ1358は約３ｍの距離を保ったまま並行関係をもち、ＳＢ1222の北側に存在していたことになる。従ってＳＡ1313とＳＡ1358板塀間の約３ｍの空隙を通路としてみなすことが可能になるのではないか。

政庁から真西に歩を進めると（ＳＡ1228・ＳＤ1231間か）、南北の板塀であるＳＡ1226・1227に突き当たる。出入口と考えられる途切れ部の存在から、ある時期はそのまま西に進み外郭西門に辿り着くことができたのかもしれない。しかしＳＢ1222が作られた時期は今回確認したＳＡ1313とＳＡ1358板塀間を通っていたと推測されることから、政庁からの直進路が北寄りにずれ、地形を考慮するとＳＢ1222を過ぎた所でいくらか南に折れ、それから真西に向かうルートが想定される。東西道路とその変遷に南北の板塀（特に出入口の存在）を考えあわせると、東西道路は２例紹介した中間のＳＡ1313とＳＡ1228の間にもある時期存在していたと考えることも可能になるであろう。

２　遺物について

①越州窯系青磁の出土（第32図27）

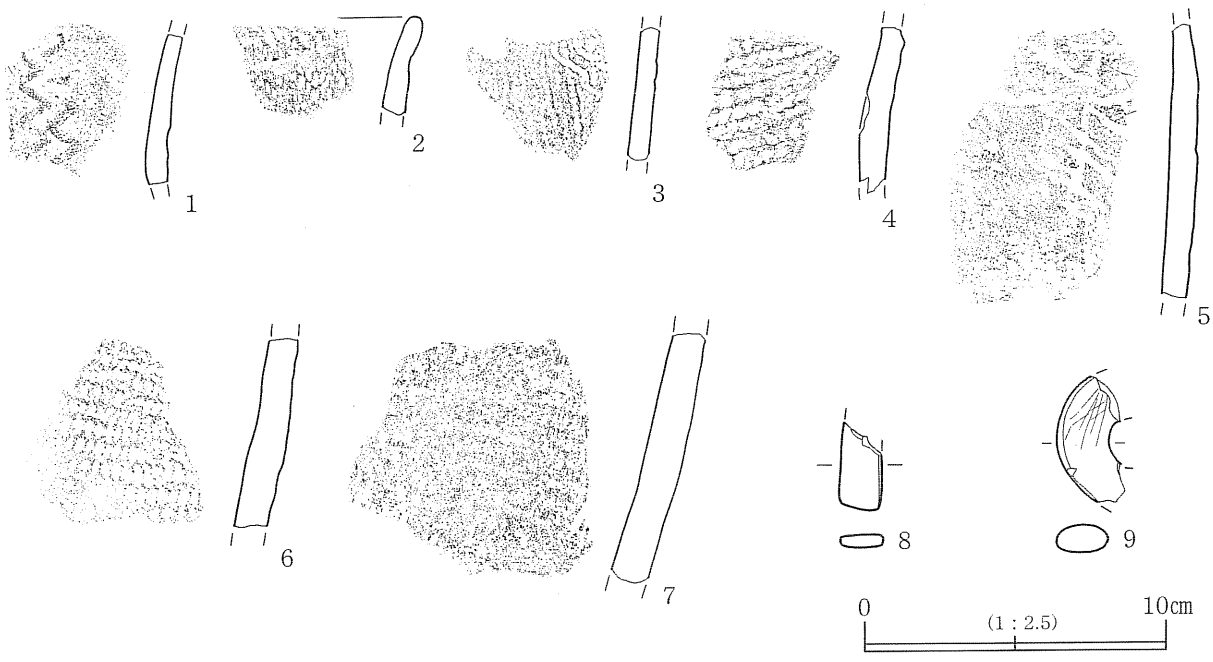
払田柵跡では初出となる越州窯系青磁が発見された。Ａ２区の表土層出土の小破片ではあるが、平泉町教育委員会の八重樫忠郎氏を通して、山本信夫氏（前太宰府市教育委員会、現山本考古研究所）に鑑定いただいた結果、坏Ⅰ1-2か皿Ⅰbで５輪花の可能性が高いとのことであった。時期的には９世紀第３四半期から10世紀中頃となるようである。

越州窯系青磁は県内では千畑町内村遺跡（昭和55年調査）と琴丘町小林遺跡（平成12年調査）に次いで３遺跡目となる。当該青磁は、「官衙など国家と深いつながりのある遺跡からしか出土しない」という貴重な焼物とされる。(註1)

②灰釉陶器・緑釉陶器（第32図28～34）

本次調査区出土の灰釉陶器は、猿投窯産の皿（28）・長頸壺（胴部、29）・平瓶（底部、30）であることが井上氏の報告から明らかとなった。３点とも黒笹14号窯式（９世紀前半）に比定されるようである。

過去、払田柵跡では３調査地区から灰釉陶器が出土している。①第35次調査（政庁域内、北東部）で長頸瓶と思われる破片６点（同一個体か）、②第94次調査（外郭南門東北地区）で長頸瓶破片２点（光ケ丘１号～大原２号窯式、10世紀初頭～前半）、③同94次調査（外郭南門南西地区）で建物の外



第29図　縄文時代の出土遺物

位置する溝（ＳＤ1041）から無台の段皿（10世紀初頭の東濃産《虎渓山１期》か）と同地区遺構外（十和田ａ火山灰下層）より椀１個体（光ケ丘１号窯式、10世紀初頭）がそれぞれ確認されている。このうち後２者は『払田柵跡調査事務所年報1993』に実測図が載せられている。

その他、県内の灰釉陶器出土遺跡は、秋田城跡（26点）、男鹿市小谷地遺跡[註2]（椀１個体、底部に「福」の墨書あり）、大雄村江原嶋１遺跡[註3]、平成12年に調査された琴丘町小林遺跡（椀１個体、10世紀初頭の東濃産《虎渓山１期》）で確認されているだけのようである。江原嶋１遺跡では土器溜（土器廃棄用土坑）としているＳＫ05とこれを切るＳＤ01溝跡などから約10点（おそらく同一個体）の破片が出土しており、灰釉陶器広口壺の肩部破片とされる。産地は不明ながら、猿投窯との比較から９世紀前半代のものと推定される。

緑釉陶器（31～34）は、９世紀後半代（K-90号窯式）の皿(31)・段皿(32)・小椀(33)・椀(34)である。

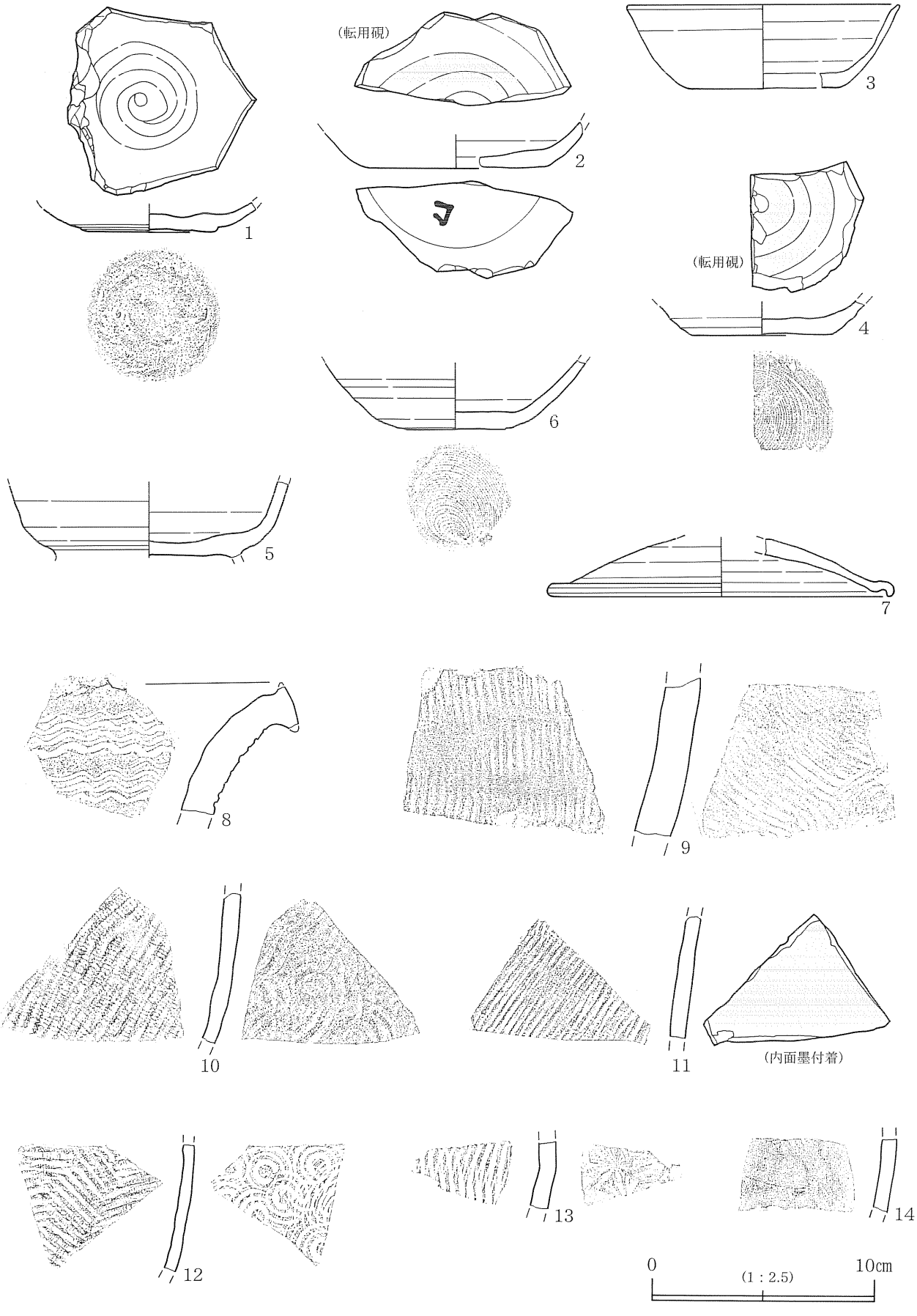
註

1　八重樫忠郎「東日本における青磁の出現時期」『貿易陶磁研究』第20号　2000（平成12年）

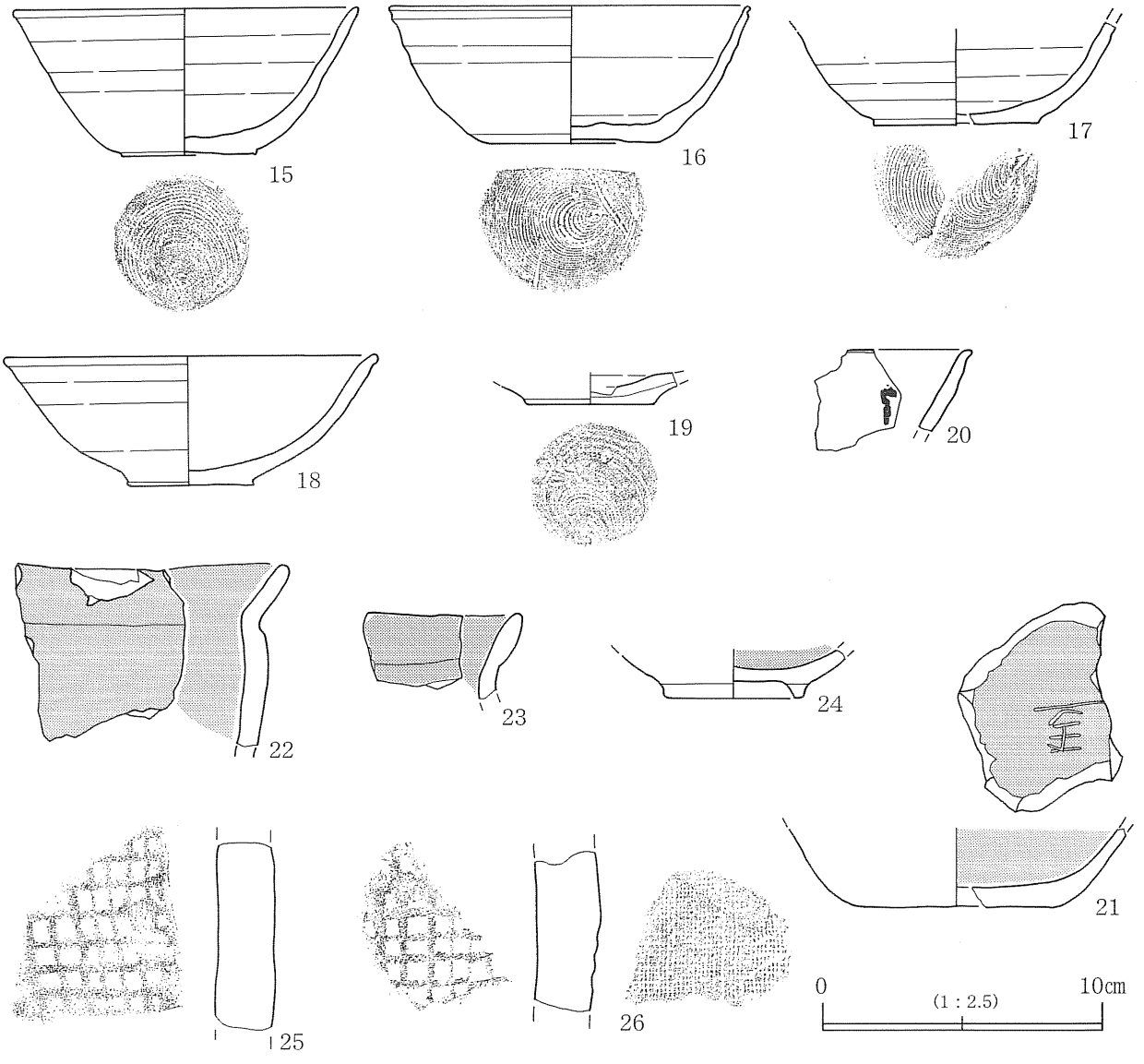
なお、雄勝町鵜沼城跡で越州窯青磁が出土したとの報告（橿原考古学研究所・土橋理子氏が実見、橿原考古学研究所編『貿易陶磁』臨川書店　1993年）がされているが、払田柵跡出土を受けて、鵜沼城跡出土とされる資料を再度見直したところ、注記（遺跡略記号と出土年月日）から内村遺跡出土と判明したものである。逆にこのことから、内村遺跡も越州窯系青磁・緑釉陶器を保有する遺跡となり、本年度調査された千畑町厨川谷地遺跡の成果を引用するまでもなく、払田柵の関連遺跡であったことを再認識させられる結果を生んだことになる。

2　三嶋隆儀・庄内昭男「男鹿市小谷地遺跡の墨書土器」『秋田県立博物館研究報告』第12号　1987（昭和62年）

3　秋田県教育委員会『江原嶋１遺跡』秋田県文化財調査報告書第310集　2001（平成13年）

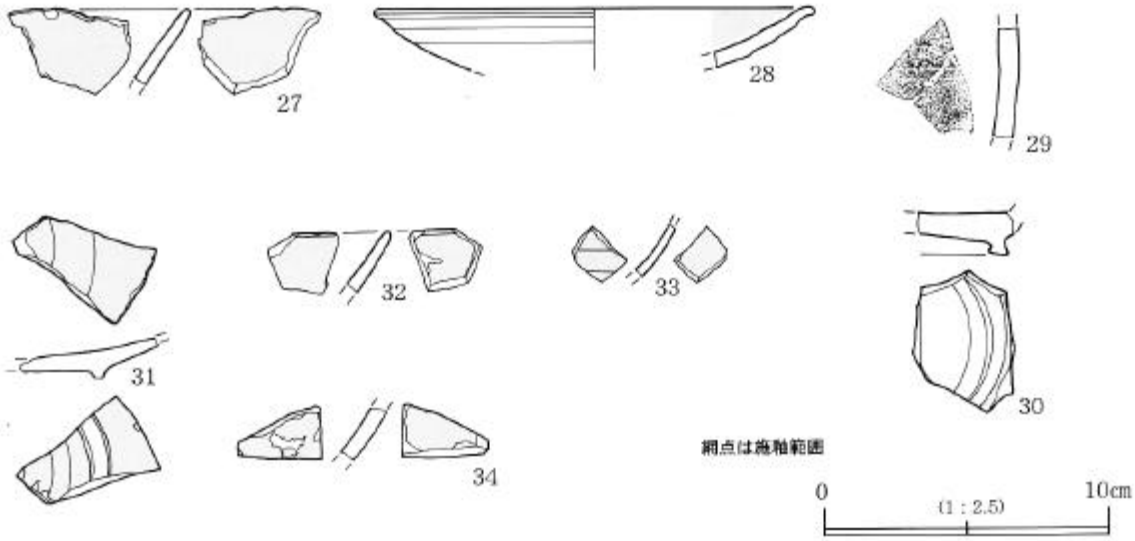


第30図　遺構外出土遺物（１）

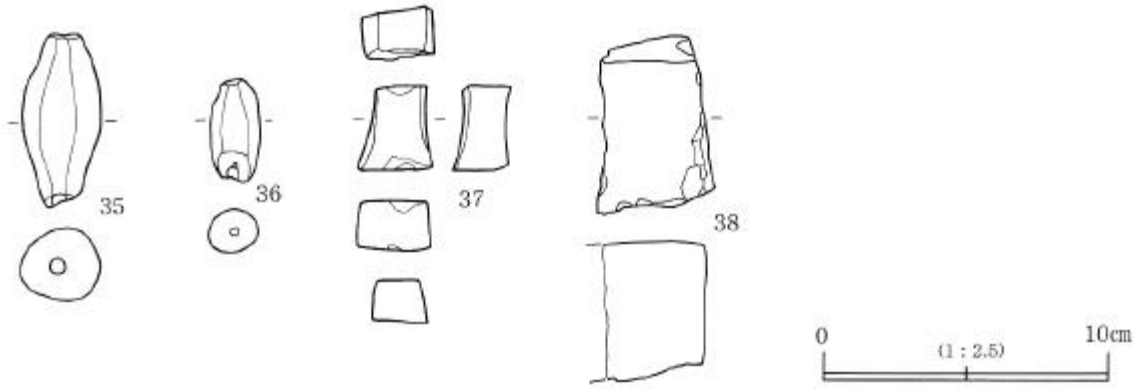


第31図　遺構外出土遺物（２）

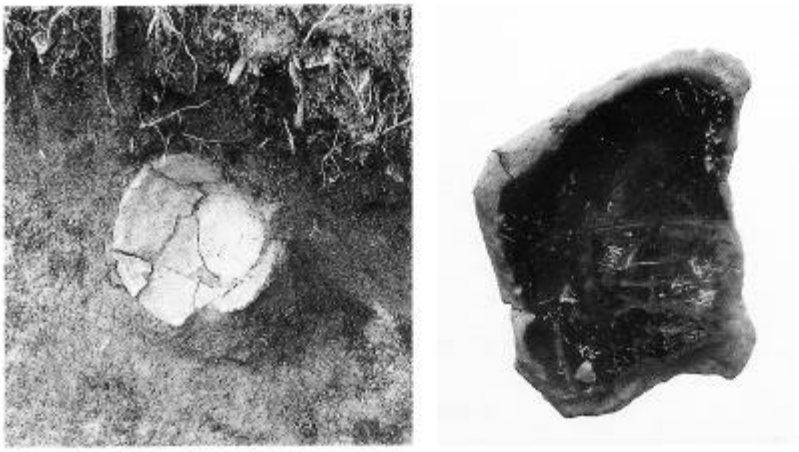
番号	種　別	器　形	出土位置・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
1	須恵器	坏	A1区Ⅱ層下	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、意図的な打ち欠き		6.0	(1.3)			
2	須恵器	坏	A4区Ⅲ層	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書、内面転用硯、意図的な打ち欠き		8.4	(2.0)			
3	須恵器	坏	A1区Ⅲ層	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.3	6.8	3.8	0.55	30.9	26°
4	須恵器	坏	A1区Ⅲ層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、内面転用硯、意図的な打ち欠き		6.4	(1.5)			
5	須恵器	台付坏	A1区Ⅱ層下	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り(?)→回転ヘラケズリ			(3.4)			
6	須恵器	坏	A3区Ⅱ層上	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、内面に使用に伴う擦痕あり		4.5	(3.1)			
7	須恵器	蓋	A3区Ⅱ層上	内外:ロクロ調整	15.2		(2.6)			
15	土師器	坏	A1区Ⅱ層下	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り(出土状況の写真あり)	12.3	4.8	5.3	0.39	43.1	29°
16	土師器	坏	A2区Ⅱ層下	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り→篦書「一」か、被熱	12.8	6.2	4.9	0.48	38.3	25°
17	土師器	坏	A4区Ⅲ層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り		5.8	(3.6)			
18	土師器	坏	A3区Ⅱ層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、摩滅	13.2	4.6	4.6	0.35	34.9	36°
19	土師器	坏	A3区Ⅱ層	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り		4.6	(1.1)			
20	土師器	坏	A2区Ⅱ層	内外:ロクロ調整、体部外面に墨書						
21	土師器	坏	A2区Ⅱ層	非ロクロ、内外:ミガキ→内面黒色処理→刻書(黒色処理後)		7.0	(2.9)			
22	土師器	甕	A1区Ⅱ層下	非ロクロ、内外:ミガキ→黒色処理						
23	土師器	甕	A4区Ⅱ層	非ロクロ、内外:黒色処理						
24	土師器	台付坏	A4区Ⅰ層	内外:ロクロ調整、内面:ミガキ→黒色処理		5.0	(1.7)			
25	瓦	平瓦	A1区Ⅲ層	凸面:格子叩キ、凹面:布目						
26	瓦	平瓦	A1区Ⅱ層下	凸面:格子叩キ、凹面:布目						



第32図　遺構外出土遺物（３）青磁・灰釉陶器・緑釉陶器

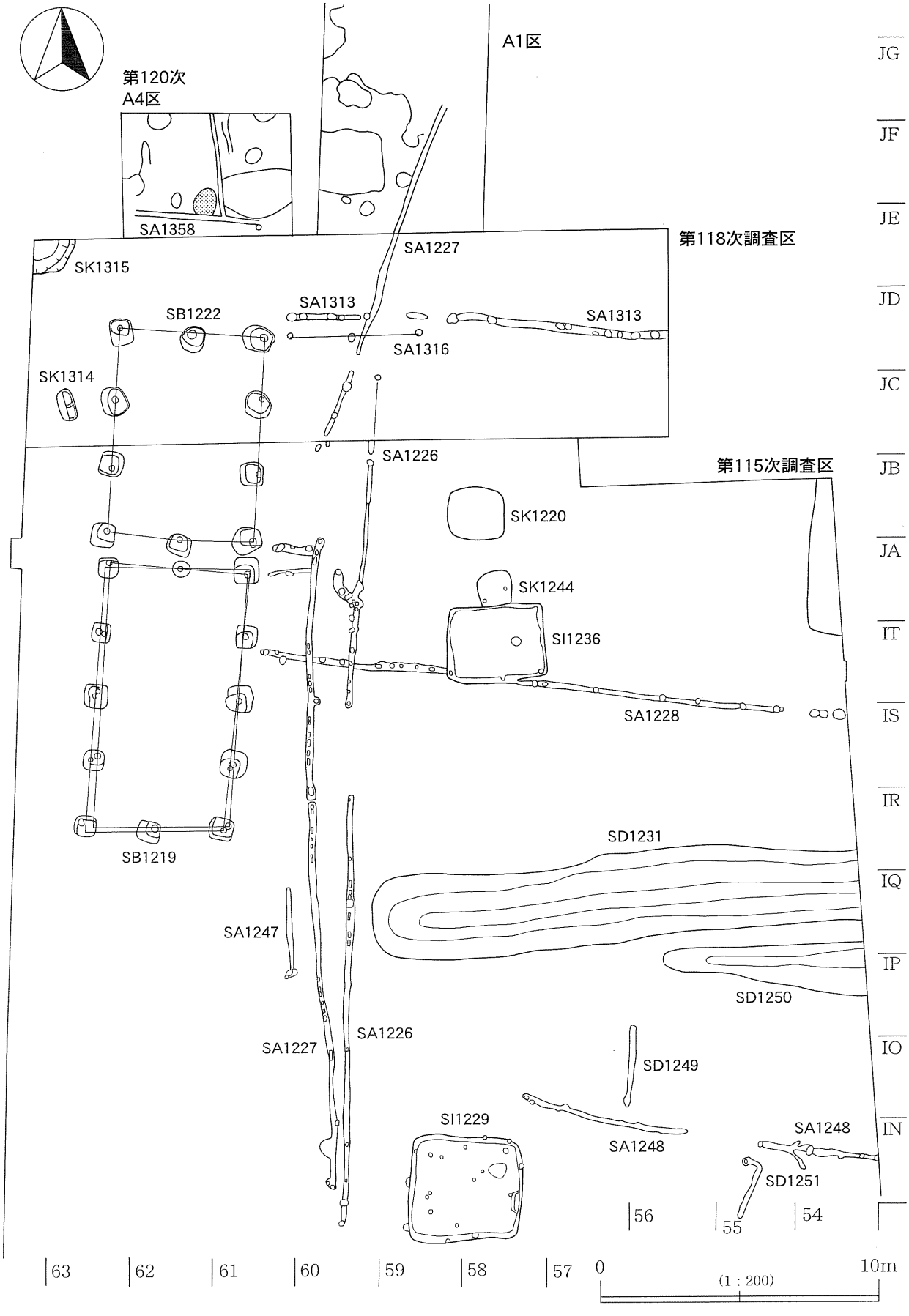


第33図　遺構外出土遺物（４）土錘・砥石



左：遺物出土状況
（Ａ２区Ⅱ層下、第31図15）

右：内面に刻書のある
土師器坏（第31図21）

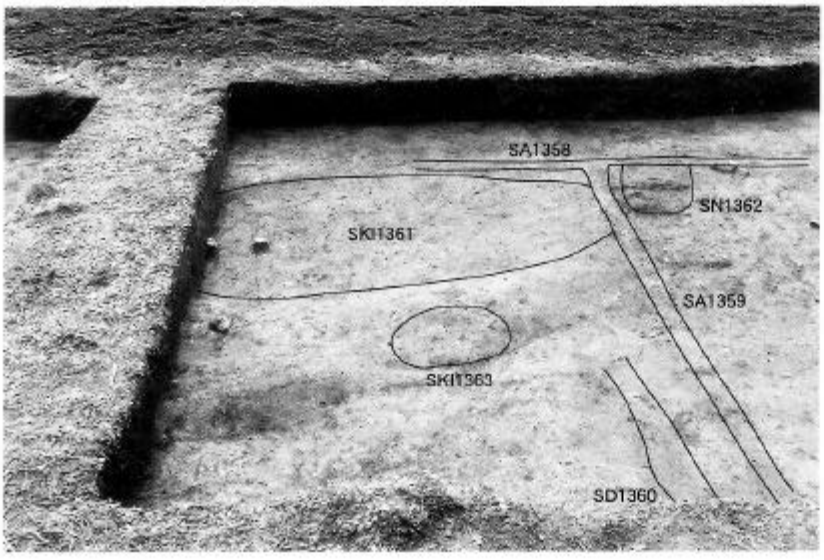


第34図　第115・118・120次調査区における建物と板塀の配置状況

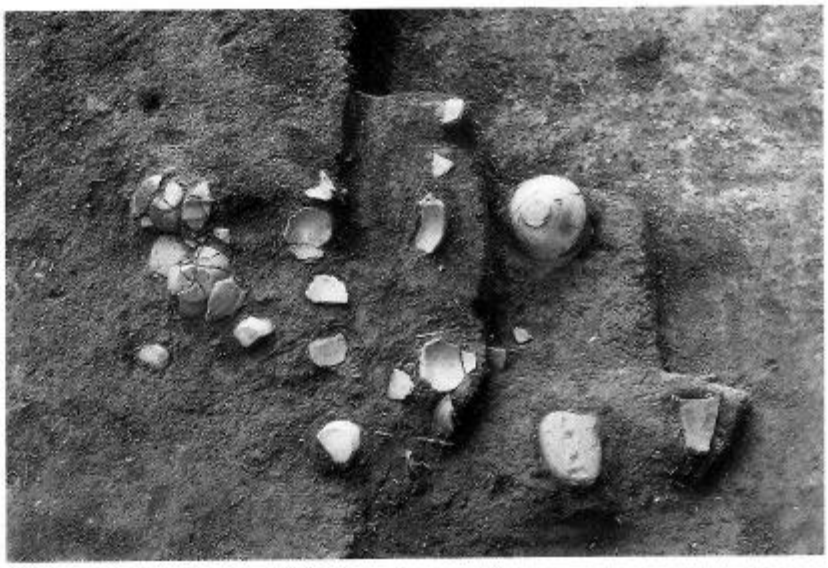
図版７　第120次

調査前の状況（北西→）
丘陵部平坦面（右）
から北に傾斜している
奥が政庁域にあたる

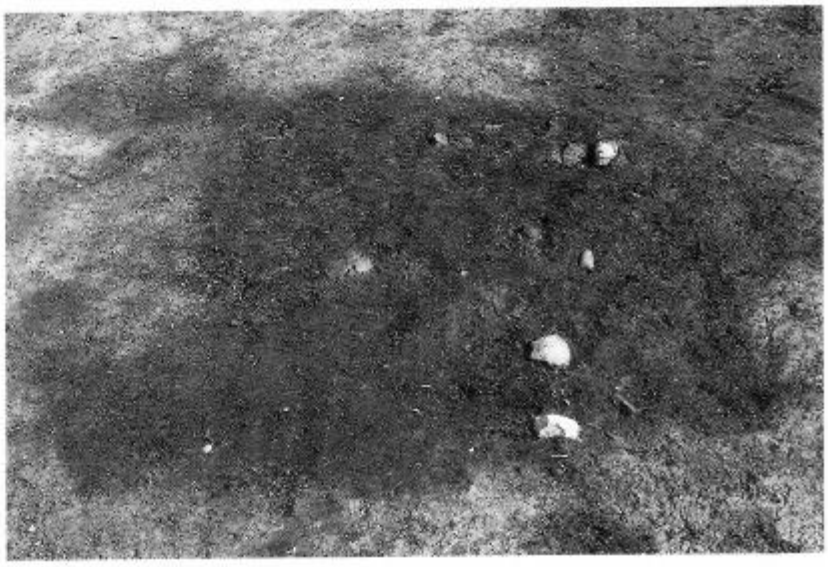
調査後のＡ１区全景
（北→）



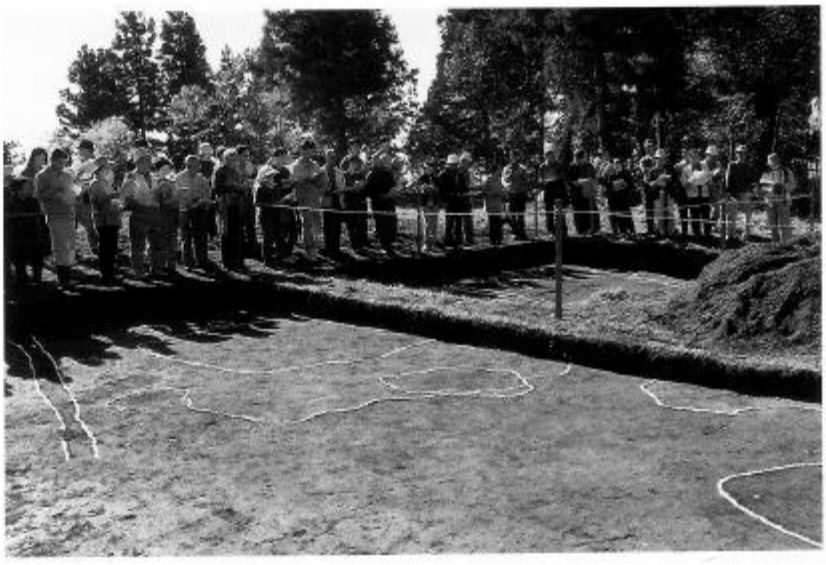
Ａ４区の遺構分布状況
（北→）



Ａ３区の遺物分布状況
（北→）



ＳＫ1381土坑確認状況
（西→）
縄文土器が点在する



遺跡見学会の様子（北東→）
Ａ１・４区周辺での１コマ
写真左端の溝がＳＡ1227

第５章　払田柵跡第119・120次出土の施釉陶器

愛知県陶磁資料館　井上喜久男

１　第119次・Ｈ２トレンチ整地層出土の緑釉陶器（巻頭図版２、第22図）

第22図はいずれも尾張猿投窯の製品と推定される。緑釉陶器は素地の一次焼成後に緑釉（鉛釉）を施釉してさらに二次焼成した二度の焼成によって造られたもので、それらの素地の色調は褐色を呈し、断面内部が灰褐色のものもある。個別に色調が変化したものであるが、27の陶片の素地の白色味の色調が本来目指した地肌のものと考えられ、その部分のみ淡緑色の釉調となっている。それらの６点の破片は緑釉手付瓶の各部の破片であり、素地の焼成状態や緑釉の色調に違いが認められるものの、同一個体の可能性が極めて高いものである。

23・24は、頸部から下膨れの体部へ移行する肩部の破片であり、体部は轆轤水挽き成形され、表面は５～10㎜の幅のやや粗い篦削り整形された後に、さらに細かい磨き調整が施されている。頸部は右轆轤回転により絞られて成形されており、内面に絞り皺状の痕跡が認められる。表面の緑釉は摩耗が著しく、篦削りによる僅かな稜線の緑釉が磨り減って、素地が露出した状態が観察される。それらの破片の断面部は角が鋭利のままであり、廃棄された後に、破砕したとしてもそのまま埋没して流土などによる摩耗の痕跡が認められないものである。このような経年の使用によると考えられる緑釉表面の摩耗は特に椀や皿の内面底部を中心に認められる例がほとんどであり、２片が同一個体とするとほぼ全面にわたり摩耗痕が生じていると推定されることになる。

25は把手下端の体部の接合部分の一端が認められるもので、把手の下端が角に面取されていることが判り、平紐状の把手であることが推定される。

26は体部下端の腰部から底部に移る部分であり、底部の周辺が抉られるように内面へ凹み、円板状の底部を形成している。底面は27・28により平底であることが判り、底面の周縁寄りが撫で仕上げによりわずかな凹線が巡っている。その内側の底面中央部は轆轤水挽き成形後の仕上げ整形が行われずに、轆轤上に底板となる粘土の円板を置いてその周囲に紐輪積み成形した後に回転水挽きが施された如くの未調整の状況を示しており、底面は平滑に撫で仕上げが施されずに凹凸のままとなっている。その未調整の表面は緑釉が施されているが、経年使用による摩耗のため、剥落して地肌の露出が甚だしいものとなっている。その内面は26の陶片から見て、体部下端から轆轤水挽き成形が丁寧に施されているが、その底面は厚さが一定せず最初に轆轤上に備えた円板の表面を軽く回転により撫でた位の整形で止めており、その中心部は当初の円板を轆轤上に据えた時の指押さえの凹凸がこのまま残存している状態である。そして27にみられるように特異な形状として、そのほぼ中心と見られる位置に焼成前の成形時に開けられた直径４㎜の円孔が存在することである。その円孔の内面には底部表面に施釉した時に流れ込んだと考えられる緑釉が呈色している。

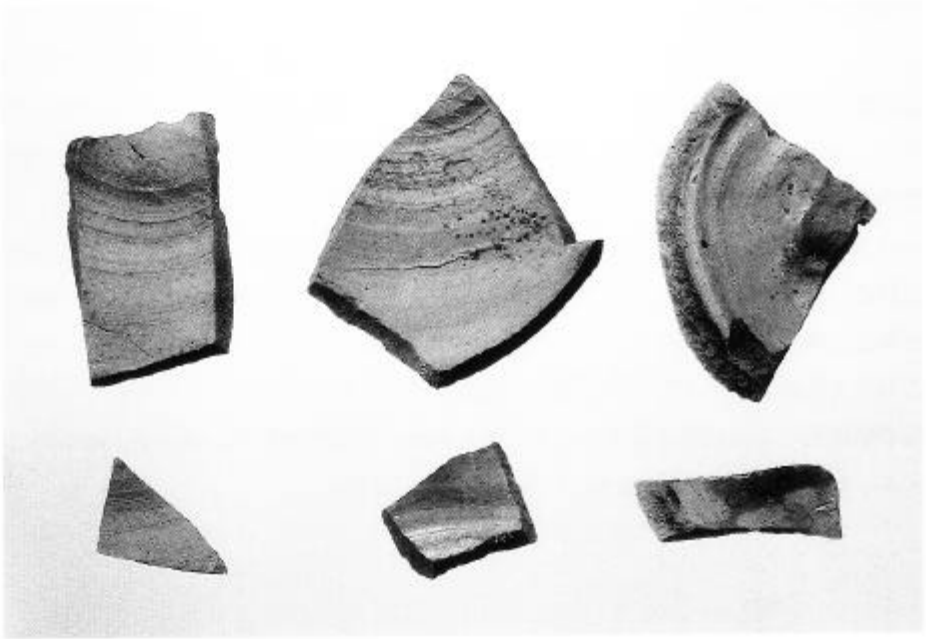
この緑釉手付瓶は窯跡や消費遺跡に認められる通有の大小二種類のうちの大形のものに相当するが、本例のように底部に成形時から穿孔されたものは、これまで確認されていない新発見のものである。

同形態の類例品として、埼玉県岡部町・西浦北遺跡第４号住居址出土の緑釉手付瓶は竪穴式住居址の中心の土壙から灰釉長頸瓶と共伴して出土したもので、灰釉長頸瓶は口縁部が全て打ち欠き取られ、

緑釉手付瓶は頸部に把手が付く側の口縁の一部が欠き取られていた。いずれも猿投窯の製品である。また、その他に全形が復元されているものに出土地不明の東京国立博物館蔵品がある。福岡県甘木市・池の上13号墳出土の蔵骨器として出土した緑釉緑彩文水注は、長門国産の緑釉陶器と推定されるものであり、底部に約10㎜の円孔が穿孔されており、通例の蔵骨器使用例の一つと考えられるものである。その円孔は骨壺として転用される時に穿孔されたものと推定され、蔵骨器としての通有な使用例である。

払田柵跡出土例のように穿孔のある手付瓶は、外形的には全くの手付瓶の器種ではあるが、製作時の当初から底部に穴を開けた器物として造られたことになり、用途が限定された専用器として、液体容器としての機能を否定した仮器として製作されたものということになる。出土陶片の状態からは表面に満遍なく摩耗痕が認められ、単に祭礼器物として供えるだけではなく、かなりの頻度で表面を摩擦する行為が行われる使用法が推察されるところである。

これら手付瓶の器種は灰釉と緑釉製品が猿投窯黒笹14号（K-14）窯式から黒笹90号（K-90）窯式に造られるようになり、なかでも大形品は黒笹90号（K-90）窯式に盛行する。本例のように体部の肩の張りが強いこと、肩部の器壁が厚いこと、成形方法として底板の上に体部の下半位までを紐輪積みしてから轆轤回転水挽き成形したものと推定されることから、黒笹90号（K-90）窯式の古式の様相を示しているものであり、９世紀中～後半にかけての年代が推定されるものである。



緑釉陶器手付瓶
（第119次、第22図）
巻頭図版２（下段）
の裏面

2　第120次調査区出土の灰釉・緑釉陶器（巻頭図版２、第32図）

28はＡ２区１層出土の猿投窯製品の灰釉皿である。器形は轆轤水挽き成形されたもので、高台近くになるにしたがい器壁が厚くなるものと考えられる。外側面（裏面）の高台寄りの半分ほどに回転篦削り整形が施され、口縁部端を外反させ、皿の上面のみにたっぷり灰釉が掛けられて斑紋状に呈色しているものである。それらの形態から黒笹14号窯式に比定される。

29もＡ２区１層出土の猿投窯製品の灰釉長頸壺の胴部と推定される小破片である。次の30と胎土や灰釉の釉調が類似する破片であり、同一産地の製品であることを示している。小破片であるが、湾曲度と轆轤成形の痕跡から胴部のやや下方の腰部へ向かう部分の破片と考えられる。外表面には灰釉が刷毛塗りされ、淡黄緑色を呈し、僅かに気泡が吹いて破れて痕跡となっている。内面の一部に灰釉の流れた跡が認められ、口頸部内面の施釉の際に灰釉が落ちたものと推定される。編年的な時期は轆轤成形や施釉の丁寧さなどから、黒笹14号窯式（９世紀前半）に比定した30の資料の時期まで遡っても差し支えない特徴がある。

30はＡ１区１層出土である。内面に轆轤水挽き痕が認められ、撫で仕上げや摩耗痕が認められないことから、瓶類の底部と考えられる破片である。その瓶類の中でも底面が大きい平面となり、低い高台が付く器種であることから、灰釉平瓶の底部破片と推定されるものである。高台の一部と考えられる底面の突起部の側面には灰釉が付着しているかのように溜まっており、平瓶の背部上面に施された灰釉が流れたものと考えられる。尾張猿投窯の製品と推定され、残欠の高台の形状等から黒笹14号窯式（９世紀前半）に比定される。

31はＡ２区２層下出土である。腰部が横に開く器形と急に薄くなることから猿投窯製品の緑釉皿と推定される。素地の内面と外側面は細かく磨きが施され、底部の高台内面は轆轤水挽き成形のままである。素地は陶質に良く焼き締まり、灰褐色を呈し、緑釉は素地の凹凸による釉層の厚さの変化によって僅かな濃淡が生じている。高台が欠失しているが、底部の中央が器壁が薄くなることなどの轆轤成形の特徴によりK-90号窯式（９世紀後半）に編年されるものと推定される。

32はＡ２区１層出土である。口縁部の破片であり、傾き具合から皿と推定され、湾曲の小さい表面と外側面が口縁部近くまで篦削り整形が施されていることなどから、猿投窯製品の緑釉段皿と推定される。素地は表面に磨きが施され、31・34とも類似して良く焼き締まり、緑釉が厚く掛けられて淡緑色の光沢のある色調となっている。K-90号窯式に編年されるものと推定される。

33はＡ２区２層出土である。小破片であるが、湾曲の具合から猿投窯製品の緑釉小椀の腰部と推定される。胎土・釉調とも灰色気味であるが、表面は細かい磨きが施され、編年的には31・32・34と同一時期と考えて差し支えないもので、K-90号窯式に編年されるものと推定される。

34はＡ２区２層出土である。僅かに湾曲することや厚さに変化が少ないことから猿投窯製品の緑釉椀の腰部辺りの小破片と推定される。31と素地や釉調が類似する破片で、編年的にも31と同一時期と考えられ、K-90号窯式に編年されるものと推定される。

第６章　調査成果の普及と関連活動

１　遺跡見学会の開催

『払田柵跡（第119・120次調査）・厨川谷地遺跡　合同遺跡見学会』

平成13年10月20日（土）10:00～13:00

払田柵跡の東側に隣接する千畑町厨川谷地遺跡と合同で見学会を実施

好天に恵まれ、210名の来跡者を得た

２　諸団体主催行事への協力活動

発掘調査の現場や、政庁跡、外柵南門・大路周辺地域などにおいて、下記諸団体などの遺跡視察・研修・見学会に対し、払田柵跡の説明や調査実習・体験を行った。

秋田県埋蔵文化財センター新任職員研修（４月９日）、仙北町立南小学校六年生・保護者（総合学習:７月９日）、企業・行政研修（秋田大学学生:８月１日）、チャレンジ研修マイプラン支援事業（８月１日・７日）、東アジアの古代文化を考える会（８月５日）、社会貢献活動体験研修（８月７日～８日）、市町村埋蔵文化財担当職員研修（Ａ課程、秋田県教育委員会主催:８月７日）、仙北町立仙北中学校一年生進路学習（８月７日）、古窯跡研究会・石巻市教育委員会（８月21日）、県教育庁総務課・文化財保護室（８月29日）、秋田県議会教育公安委員会（９月４日）、仙北町立仙北中学校３年生（９月７日）、県教育庁総務課・文化財保護室（９月11日）、東北芸術工科大学歴史遺産学科（９月26日）、秋田大学教育文化学部日本史研究室（９月27日）、秋田県高等学校初任者研修（10月18日）、北海道七飯町教育委員会（11月７日）、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（12月６日）

３　顧問会議の開催

第53回　平成13年10月15日（月）

第54回　平成14年２月28日（木）

４　発掘調査への協力・指導

千畑町厨川谷地遺跡（秋田県埋蔵文化財センター南調査課担当）

平成13年５月14日～11月26日

５　中国研修生の受け入れ

平成13年11月５日～６日

研修生　王　琦（甘粛省博物館歴史部）　魏文斌（甘粛省文物考古研究所）

研修内容　赤外線テレビカメラの操作法とその実習

6　史跡払田柵跡保存管理計画策定指導委員会（仙北町主催）への出席

第４回　平成13年７月16日（於：仙北町ふれあい文化センター会議室）

保存管理計画の概要検討

第５回　平成14年１月28日（於：仙北町役場大会議室）

保存管理計画策定（素案）の検討

第６回　平成14年２月27日（於：仙北町役場大会議室）

史跡払田柵跡第２次保存管理計画書（案）の検討

7　払田柵跡環境整備審議会（仙北町主催）への出席

平成14年３月29日（於：仙北町役場）

8　第30回大規模遺跡調査連絡協議会への出席

平成13年９月20日～21日（於：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

9　報告・講演・勉強会

高橋　学「払田柵は“なぜ”作られたのか（１）」　柵の案内人「ほたるの会」第１回勉強会

平成13年６月14日　場所：仙北町ふれあい文化センター

高橋　学「払田柵跡について」　企業・行政研修、チャレンジ研修マイプラン支援事業講話

平成13年８月１日　場所:秋田県埋蔵文化財センター

高橋　学「払田柵は“なぜ”作られたのか（２）」　柵の案内人「ほたるの会」第３回勉強会

平成13年８月23日　場所：仙北町ふれあい文化センター

高橋　学「「１章　秋田のあけぼの」を考古学的見地から読む」

公開シンポジウム「『秋田県の歴史』を読む」　2001年度秋大史学会基調報告

平成13年９月22日　場所：秋田大学教育文化学部

高橋　学「払田柵勉強会」　よみがえる平安の柵　蝦夷ほたるをとばす会

平成13年10月20日　場所：秋田県埋蔵文化財センター

高橋　学「払田柵・厨川谷地遺跡勉強会」　仙北町史談会　学習会

平成13年12月13日　場所：秋田県埋蔵文化財センター

高橋　学「洲崎遺跡から見る中世出羽の一様相」　第９回秋大史学会古代中世部会

平成13年12月15日　場所：秋田大学教育文化学部３号館

高橋　学「秋田県琴丘町家の下遺跡」　第15回東北日本の旧石器を語る会

平成13年12月22・23日　場所：秋田市文化会館

高橋　学「地方官衙と墨書土器Ⅲ－城柵官衙遺跡と墨書土器－」

研究集会　古代官衙・集落と墨書土器－墨書土器の機能と性格をめぐって－

平成14年１月24～25日　場所:独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所

高橋　学「払田柵跡－平成13年度調査の概要－」　第28回古代城柵官衙遺跡検討会

平成14年２月９～10日　場所：岩手県水沢市（資料報告）

高橋　学「払田柵跡（第119・120次調査）・厨川谷地遺跡」
　　平成13年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会
　平成14年３月２～３日　場所：秋田市文化会館
高橋　学「秋田の須恵器窯跡」　第６回須恵器窯構造検討会（関東・東北例会）
　平成14年３月２～３日　場所：埼玉県さいたま市さいたま共済会館（資料報告）

10　資料の貸し出し

秋田県立博物館　考古部門展『00’秋田発掘調査速報展』　平成13年３月８日～４月19日
　貸し出し資料：平成12年度出土資料（土師器・須恵器・縄文土器など）
秋田県立博物館　企画展『絵馬』　平成13年４月28日～６月17日
　貸し出し資料：絵馬（第112次調査出土）
北海道開拓記念館　第52回特別展『知られざる北の中世－チャシと館の謎にせまる－』
　　平成13年９月７日～11月４日
　貸し出し資料：絵馬（第112次調査出土）・木製鋤・漆器皿・曲物容器・墨書土器等

社会貢献活動体験研修
（８月７～８日）
における地形測量（平板）
研修の様子

遺跡見学会での一コマ
政庁前で払田柵跡の
概要を説明する
写真の奥が厨川谷地
遺跡となる

報告書抄録

ふりがな	ほったのさくあと　だい　　じちょうさ がいよう
書名	払田柵跡　第119・120次調査概要
副書名	払田柵跡調査事務所年報2001
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第343集
編著者名	高橋　学
編集機関	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
発行年月日	2002年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
払田柵跡	秋田県仙北郡 仙北町払田 千畑町本堂城回 調査地点は 仙北町払田字 長森	53429 53432		39度 27分 57秒	140度 33分 11秒	第119次 20010507 ～ 20011102	630	学術調査
						第120次 20010928 ～ 20011102	280	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
払田柵跡 第119次	城柵	平安時代	竪穴状遺構（鍛冶工房か）、鍛冶炉、土坑溝跡、焼土遺構	須恵器、土師器縁釉陶器、瓦	人工的な地形改変痕跡（段状地形）を確認、整地層より「出羽」箆書土器、縁釉陶器手付瓶が出土
	墓域	中世（鎌倉時代）	空堀、土坑	須恵器系陶器壺・擂鉢、青磁(同安窯)、石硯、銭貨	
払田柵跡 第120次	城柵	平安時代	板塀跡、土坑、焼土遺構	須恵器、土師器縁釉陶器・灰釉陶器、青磁(越州)	越州窯青磁は払田柵跡では初見
		縄文時代	土坑	縄文土器・石器	

Y=24.50　　Y=24.40

35 30 25 20 15 10 05 00 95 90 85 80 75 70 65 60 55

LF LA KP KK KF KA JP JK JF JA IP

X=59.20　　X=59.30

・34.7 ・34.6 ・34.8 ・35.0 ・35.2 ・35.3 ・35.4 ・34.5 ・34.9

神社

第119次

H2 I2 J2 K L

（網点範囲は、段状地形確認・平面図作成範囲）

SD877 土塁 土塁

H1 I1 J1

第116次 第117次

外郭西門

A1 A2 A3 A4

第120次 第118次 第115次

45 40 35 50

0 50m

秋田県文化財調査報告書第343集
払田柵跡調査事務所年報2001
払田柵跡　第119・120次調査概要
2002年３月
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

付図　長森丘陵西部の地形と第119・120次調査区配置